鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(55)

一般国道10号姶良バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅱ)

森(もり)遺跡
白金原(しらがねばる)遺跡

(姶良郡姶良町)

2003年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

方形周溝

序　　文

鹿児島県教育委員会は，一般国道１０号姶良バイパスの建設に伴い，平成２年度に「森遺跡」「白金原遺跡」の発掘調査を実施しました。

この報告書は，これらの遺跡の発掘調査の記録をまとめたものです。

「森遺跡」の調査では，平安時代を中心として中世・近世の遺物や遺構が数多く発見されました。また，「白金原遺跡」では遺物の発見は少なかったものの畠跡と思われる耕作列が平行して何条も検出されました。

本報告書が，郷土の歴史の一端を明らかにするための資料として活用されることを期待しています。

終わりに，発掘調査にご協力していただきました建設省（現・国土交通省）九州地方整備局鹿児島国道事務所の皆様方をはじめ，関係者の方々ならびに発掘調査・整理作業にあたられた作業員の方々に心から感謝申し上げます。

平成15年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　井　上　明　文

報告書抄録

ふりがな	もりいせき　しらがねばるいせき
書名	森遺跡　白金原遺跡
副書名	一般国道10号姶良バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅱ
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	55
編著者名	宗岡　克英
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899－4461　鹿児島県国分市上之段１１７５番地１
発行年月日	西暦2003年３月20日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	東経	北緯	調査期間	調査面積 m²	調査起因
森遺跡（もりいせき）	鹿児島県（かごしまけん）姶良郡（あいらぐん）姶良町（あいらちょう）西餅田（にしもちだ）字森（あざもり）	464422	53-74-0	130度37分45秒	31度43分38秒	平成２年８月８日～平成３年３月29日	4,600	一般国道10号姶良バイパス建設
白金原遺跡（しらがねばるいせき）	鹿児島県（かごしまけん）姶良郡（あいらぐん）姶良町（あいらちょう）西餅田（にしもちだ）字白金原（あざしらがねばる）	464422	53-73-0	130度37分3秒	31度42分22秒	平成２年６月６日～平成２年８月10日	520	一般国道10号姶良バイパス建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
森遺跡		平安時代	方形周溝１ 溝状遺構５ 竪穴遺構３ 掘立柱建物跡４ 土坑３	土師器　須恵器	
		近世	道路状遺構２ 竪穴遺構１	染付碗　摺鉢等の陶磁器 貨幣（寛永通寶）	
白金原遺跡			畠跡 溝状遺構６	土師器　須恵器	

一般国道 10 号姶良バイパス関係遺跡

番号	遺跡名	備考（主な時代）
1	森	古代　　本報告書
2	白金原	古代以降　本報告書
3	小倉畑	古代　H14 年報告書刊行
4	中原	縄文　H6，7 発掘調査

第 1 図　遺跡位置図

例　　言

1　本報告書は，「一般国道10号姶良バイパス建設」に伴う森遺跡・白金原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，建設省九州建設局鹿児島国道工事事務所の受託事業として，平成２年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

3　現地調査に関する実測及び写真撮影は主として，井ノ上秀文・児玉健一郎が行い，製図は主として，川野高子・寺田みどり・中西マリ子・宗岡が行った。

4　発掘調査にあたっては，河口貞徳氏（鹿児島県考古学会会長）に現地指導をいただいた。

5　本報告書の執筆・編集は鹿児島県立埋蔵文化財センターで行い，宗岡が担当した。ただし，付編の科学分析については，（株）九州テクノリサーチ・ＴＡＣセンター大澤正己氏の分析報告である。

6　本報告書に使用した写真図版のうち，遺物撮影については，鶴田靜彦・福永修一・横手浩二郎（鹿児島県立埋蔵文化財センター）が行い，牛嶋茂氏（奈良文化財研究所）の協力を得た。

7　本報告書に用いたレベル数値は，海抜絶対高である。遺物番号は通し番号とし，本文・挿図・図版の番号は一致し，本報告書に掲載した遺物の縮尺は，それぞれの挿図内に提示してある。

8　本遺跡の出土遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターが一括して保管し，活用する予定である。

目　　次

第１章　調査の経過……1
　第１節　調査に至るまでの経過……1
　第２節　調査の組織……1
　第３節　調査の経過……2

第２章　遺跡の位置及び環境……4
　第１節　遺跡の位置及び自然環境……4
　第２節　歴史的環境……4

第３章　発掘調査の概要……8
　第１節　発掘調査の方法……8
　第２節　層序……12

第４章　第１地点の調査の概要……16
　第１節　古墳時代の調査……16
　第２節　古代の調査……21
　第３節　中・近世の調査……49
　第４節　近代の調査……58
　第５節　時期不詳の遺物・古銭……59

第５章　第２地点の調査の概要……61
　第１節　古代の調査……61
　第２節　中世の調査……76

第６章　白金原遺跡の調査の概要……77
　第１節　白金原遺跡の調査……77

第７章　出土遺物観察表……80

第８章　調査のまとめ……88

付編　科学分析……93

写真図版……105

あとがき

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図
第２図　周辺遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・　6
第３図　第１地点調査区及びトレンチ配置図・・　9
第４図　第２地点調査区及びトレンチ配置図・・　10
第５図　白金原遺跡調査区域・・・・・・・・・・　11
第６図　第１地点土層断面図・・・・・・・・・・　13
第７図　第２地点土層断面図・・・・・・・・・・　14
第８図　白金原遺跡土層断面図・・・・・・・・　15
第９図　古墳時代出土遺物・・・・・・・・・・・・　16
第10図　第１地点遺構配置図(古代)・・　17・18
第11図　第１地点遺物出土状況　・・・・　19・20
第12図　方形周溝出土遺物・・・・・・・・・・・・　22
第13図　方形周溝実測図・・・・・・・・・・・・・　23
第14図　溝状遺構Ⅰ実測図・・・・・・・・・・・・　24
第15図　溝状遺構Ⅱ・Ⅲ実測図・・・・・・・・　25
第16図　溝状遺構Ⅳ・Ⅴ実測図・・・・・・・・　26
第17図　溝状遺構Ⅰ出土遺物・・・・・・・・・・　27
第18図　溝状遺構Ⅱ出土遺物・・・・・・・・・・　28
第19図　溝状遺構Ⅲ出土遺物・・・・・・・・・・　28
第20図　溝状遺構Ⅳ出土遺物・・・・・・・・・・　30
第21図　１・２号竪穴実測図　・・・・・・　31・32
第22図　３号竪穴実測図・・・・・・・・・・・・・　33
第23図　１号竪穴出土遺物・・・・・・・・・・・・　34
第24図　２号竪穴出土遺物・・・・・・・・・・・・　34
第25図　３号竪穴出土遺物・・・・・・・・・・・・　34
第26図　土師器（坏）Ⅰ類・・・・・・・・・・・・　35
第27図　土師器（坏）Ⅱ類・・・・・・・・・・・・　36
第28図　土師器（埦）Ⅰ類・・・・・・・・・・・・　37
第29図　土師器（埦）Ⅱ類・・・・・・・・・・・・　37
第30図　土師器（皿）・・・・・・・・・・・・・・・　37
第31図　土師器（甕）・・・・・・・・・・・・・・・　38
第32図　黒色土器・・・・・・・・・・・・・・・・・・　40
第33図　須恵器Ⅰ・・・・・・・・・・・・・・・・・・　41
第34図　須恵器Ⅱ・・・・・・・・・・・・・・・・・・　43
第35図　須恵器Ⅲ・・・・・・・・・・・・・・・・・・　44
第36図　須恵器Ⅳ・・・・・・・・・・・・・・・・・・　45
第37図　その他の古代遺物・・・・・・・・・・・・　46
第38図　道路状遺構Ⅰ・Ⅱ実測図・・・・・・　47
第39図　竪穴遺構実測図・・・・・・・・・・・・・　48
第40図　竪穴遺構出土遺物・・・・・・・・・・・・　50
第41図　中世遺物Ⅰ・・・・・・・・・・・・・・・・　53
第42図　中世遺物Ⅱ・・・・・・・・・・・・・・・・　54
第43図　近世遺物Ⅰ・・・・・・・・・・・・・・・・　56
第44図　近世遺物Ⅱ・・・・・・・・・・・・・・・・　57
第45図　防空壕跡実測図・・・・・・・・・・・・・　58
第46図　時期不詳の遺物・・・・・・・・・・・・・　59
第47図　古銭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　60
第48図　第２地点遺構配置図・・・・・・・・・・　62
第49図　第２地点遺物出土状況・・・・・・・・　63
第50図　掘立柱建物跡１・２号実測図・・　64
第51図　掘立柱建物跡３・４号実測図・・　65
第52図　１号土坑実測図・・・・・・・・・・・・・　68
第53図　２・３号土坑実測図・・・・・・・・・・　69
第54図　第２地点出土遺物Ⅰ（古代）・・　73
第55図　第２地点出土遺物Ⅱ（古代）・・　74
第56図　第２地点出土遺物Ⅲ（古代）・・　75
第57図　第２地点出土遺物Ⅳ（中世）・・　76
第58図　白金原遺跡遺構配置図・・・・・・・・　78
第59図　白金原遺跡出土遺物・・・・・・・・・・　79

表　目　次

第１表　周辺遺跡・地名表…… 7
第２表　掘立柱建物跡計測表…… 66
第３表　出土遺物観察表…… 80
古墳時代出土遺物
方形周溝出土遺物
溝状遺構Ⅰ出土遺物
溝状遺構Ⅱ出土遺物
溝状遺構Ⅲ出土遺物
溝状遺構Ⅳ出土遺物
１号竪穴出土遺物
２号竪穴出土遺物
３号竪穴出土遺物
土師器（坏）
土師器（埦）
土師器（皿）
土師器（甕）
黒色土器
須恵器
その他の古代遺物
竪穴遺構出土遺物
中世遺物Ⅰ
中世遺物Ⅱ（青磁）
近世遺物Ⅰ（陶磁器）
近世遺物Ⅱ
時期不詳の遺物
古銭
第２地点出土遺物（古代）
第２地点出土遺物（中世）
白金原遺跡出土遺物

図 版 目 次

図版１（調査風景）…… 105
図版２（溝状遺構・遺物出土状況・溝状遺構埋土断面）…… 106
図版３（方形周溝）…… 107
図版４（竪穴検出状況・１号竪穴）…… 108
図版５（２号竪穴・３号竪穴）…… 109
図版６（道路状遺構Ⅱ・竪穴遺構）…… 110
図版７（遺物出土状況）…… 111
図版８（遺物出土状況・防空壕跡）…… 112
図版９（白金原遺跡遺構検出状況）…… 113
図版10（出土遺物）…… 114
図版11（出土遺物）…… 115
図版12（出土遺物）…… 116
図版13（出土遺物）…… 117

第１章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

昭和58年，建設省（現国土交通省）九州建設局鹿児島国道工事事務所は，一般国道10号姶良バイパスの建設を計画し，計画路線内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会（以下文化課）に照会した。これを受け，文化課は昭和58年５月に分布調査を実施し，中原Ａ・中原Ｂ・白金原・西溝原・森・小倉畑遺跡において遺物散布地を確認した。協議の結果，これらの遺跡は緊急発掘調査による記録保存とされることが決定され，確認調査及び全面調査が実施されることとなった。発掘調査は受託事業として文化課が実施した。

森遺跡と白金原遺跡は，平成２年６月から平成３年３月にかけて確認調査ならびに緊急発掘調査が実施されることとなった。

白金原遺跡では，確認調査の結果，遺物包含層の存在は認められなかったものの，一部に遺構が検出されたため，当該部分については緊急発掘調査を実施することとなった。

森遺跡では，分布調査の際に遺物の散布が確認された地点以外で，遺跡の立地する可能性のある部分についても確認調査を実施した。その結果，遺物の出土が認められたため，第１地点と第２地点に分けて緊急発掘調査を実施した。

第２節　調査の組織

発掘調査（平成２年度）

事業主体者	建設省九州建設局鹿児島国道工事事務所		
調査主体者	鹿児島県教育員会		
調査責任者	鹿児島県教育委員会文化課	課　長	吉井　浩一
調査企画者	〃	課長補佐	濱松　　巌
	〃	主　幹	立園多賀生
	〃	主任文化財研究員兼埋蔵文化財係長	吉元　正幸
調査事務担当者	〃	主幹兼企画助成係長	濱崎　琢也
	〃	主　査	平山　　章
	〃	主　事	末永　郁代
調査担当者	〃	埋蔵文化財係主事	井ノ上秀文
	〃	〃	児玉健一郎

報告書作成（平成13年度）

作成主体者	鹿児島県教育委員会		
作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所　長	井上　明文
作成企画者	〃	次　長	黒木　友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東　晃一
	〃	調査課長補佐	立神　次郎

	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濵　修
作成事務担当者	〃	主　査	今村孝一郎
	〃	主　事	池　珠美
作成担当者	〃	文化財研究員	宗岡　克英

第３節　調査の経過

調査は平成２年６月６日から，平成３年３月29日まで実施した。以下，日誌抄により発掘調査の経過を略述する。

月	調査の経過
6月	白金原遺跡確認調査開始。(担当　井ノ上・児玉) ２m幅のトレンチを14か所設定し，遺跡の範囲及び包含層の確認を行う。その結果，第２トレンチに青磁片が，第４トレンチに平安時代の土師器や近世の薩摩焼が，第５・第８トレンチに溝状遺構が，第14トレンチに畦状遺構が確認される。
7月	第15トレンチを設定。第14・第15トレンチを拡張し掘り下げを行う。第14トレンチで畑跡が，第15トレンチで溝状遺構の延長部分が検出される。 10日－白金原遺跡全面調査開始。杭打ち，表土剥ぎを行う。表土除去と併行して遺構の精査を行う。畑跡が予想以上に広がっている。溝・耕作列全体完掘状況写真撮影。
8月	８日－森遺跡第１地点発掘調査開始。10日－白金原遺跡調査終了。第１～第20トレンチを設定し，掘り下げを行う。第１・第２トレンチで土師器が出土する。第２トレンチで道路状遺構・溝状遺構と考えられるものを確認する。第１・第３トレンチ遺物出土状況写真撮影。
9月	第21～第32トレンチを設定し，掘り下げを行う。第11トレンチから石塔片２個出土。第22トレンチ最下層から流れ込みと思われる土師器片出土。Ｄ－13～18区，Ｅ－16区表土剥ぎ取り。Ｄ－15～16区掘り下げを行う。
10月	Ｄ－13～18区掘り下げを行う。ピット群検出及び掘り下げ，実測を行う。Ｄ－８～12区杭打ち，表土剥ぎ，堀り下げを行う。Ｄ－11区で住居跡と考えられる遺構を２基確認する。Ｄ・Ｅ－３・４区表土剥ぎ。Ｄ－９区防空壕実測。
11月	Ｄ－２・３区，Ｅ－３～６区表土除去，掘り下げを行う。Ｅ－９～11区掘り下げを行う。Ｄ・Ｅ－11区住居状遺構１・２掘り下げを行う。青磁片出土する。Ｄ－４～７区掘り下げを行う。Ｄ－11区住居状遺構３掘り下げを行う。Ｄ・Ｅ～３～10区包含層掘り下げを行う。

月	調　査　の　経　過
12月	D－3・4区，E－4区遺物出土状況及び遺物取り上げを行う。D－11区住居状遺構1・3内の遺物出土状況実測及び取り上げを行う。全体を5mグリッドで組み直す。 C・D・E－3～7区清掃，溝，ピットを確認し検出を行う。C・D・E－4区古道溝部分遺物出土状況実測，遺物取り上げを行う。 D－10・11・12・住居跡，ピット群全体清掃及び写真撮影。D－11区住居跡3実測。 17日－森遺跡第2地点全面調査開始。B－8区表土剥ぎ。
1月	1地点 D・E－3～6区ピット，溝状遺構掘り下げ，埋土掘り下げ。遺構平板実測。 D－10・11区住居状遺構1・2実測。D－3・4区周溝部分遺物出土状況実測。 2地点 B・C－8・9表土除去。B・C－6・7区，B－7・8区土層確認のための深堀り。
2月	1地点 C・D－3・4区大溝清掃写真撮影実測，ピット掘り下げ，清掃，ピット内土器取り上げ。D・E－4区不明土坑実測。D－3・4区周溝実測 2地点 C－1・2区掘り下げ。B－3～6区掘り下げ。B・C－12・13区表土掘り下げ。
3月	1地点 D・E－3～6区周溝，溝遺物取り上げ，古道・溝掘り下げ。全体清掃，全体完掘状況写真撮影。古道，溝，ピット群実測。D－3区ピット実測。 2地点 B・C－10～13区掘り下げ。土器片出土遺物出土状況実測及び取り上げ，遺構検出。 2地点ピット群清掃写真撮影，掘り下げ。完掘状況写真撮影。実測。土坑1・2・3掘り下げ及び実測。発掘用具・機材かたづけ及び搬出。全調査終了。

第２章　遺跡の位置及び環境

第１節　遺跡の位置及び自然環境

森遺跡は，姶良郡姶良町西餅田大字森に所在する。

白金原遺跡は，姶良郡姶良町平松大字白金原に所在する。

姶良町は，鹿児島県本土ほぼ中央の薩摩半島の基部，鹿児島湾奥に位置する。

地形は南北に細長く，町の北部から中部にかけては山地が多く，南部に平野部が広がる。町の北部には姶良カルデラによって形成され，輝石安山岩，角閃安山岩，溶結凝灰岩などを基盤とする烏帽子岳，北東部には，長尾山があり，横川，溝辺町境となる。西部に天ヶ花等の山が連なり，その末端は姶良カルデラの火口壁となり鹿児島湾に続いている。南部は，別府川・思川が形成した沖積平野となっている。

森遺跡は，姶良町の南部平野部をほぼ南北に流れ，河口部で加治木町との境をなす別府川の西方約１㎞に位置し，沖積台地に立地している。台地部分は，微高地となり，標高約９～10m前後のほぼ平坦面で，中央公民館をはじめ現在では宅地となり集落が形成されている。この台地の黒色腐植土には，古代の遺構や遺物が確認されている。この段丘面から東側にある後背湿地との境は比較的急な崖で，この部分は段丘崖が推定され，砂層やシルト層で構成されており，サンドパイプが多く直立している。

白金原遺跡は，思川の河口部から約500mほどさかのぼった地点より西側約150mの所に位置している。標高は，約６～７mである。

第２節　歴史的環境

1　縄文時代

建昌城跡は，1988～1990年に姶良町教育委員会によって発掘調査が実施された。早期の前平式土器や石坂式土器が出土している。建昌城域の台地上は，縄文時代早期の生活地に適していたことが考えられる。

稲荷橋遺跡は，1953年に発見され，前期の轟式・曽畑式土器，中期の阿高式土器，後期の岩崎上層式・市来式土器，晩期の夜臼式土器片が採集されている。また乳房状の磨製石斧も発見されている。

南宮島遺跡は，1976年に姶良町教育委員会によって発掘調査が実施された。中期の春日式土器，中期後半～後期の南福寺式・出水式・市来式系・岩崎上層式・指宿式土器などが出土している。

鍋倉洞窟遺跡は，1939年に寺師見国らによって発掘調査が実施された。後期の市来式・西平式土器が出土している。

2　弥生時代

萩原遺跡は，弥生時代後期から古墳時代後期にかけて営まれた集落遺跡である。1977・79・91年に３回にわたって姶良町教育委員会によって発掘調査が実施された。遺構は，竪穴住居跡78基，井戸跡１基，礫積石室１基，土器溜１カ所が検出された。遺物は，弥生時代中期の入来

式・山ノ口式土器，後期後半の免田式土器が出土している。

小瀬戸遺跡は，1971年に鹿児島県教育委員会によって発掘調査が実施された。中期に該当する入来式土器の甕形土器や壺形土器が出土している。

3　古墳時代

萩原遺跡は，遺構として，多数の円形や方形の竪穴住居跡が検出された。遺物は，成川式土器や祭祀用とみられる手捏土器・ミニチュア土器，そのほか紡錘車，土錘とともに製塩土器の破片が出土している。

重富保養院遺跡は，敷地整地中に発見され，多数の成川式土器や石器が出土している。1989・90・91年3回にわたって鹿児島県教育委員会によって発掘調査され，多数の竪穴住居跡で形成される古墳時代の集落跡が発見された。

帖佐上場遺跡は，1932・33年頃に隈元静哉によって，成川式土器の壺形土器や甕形土器の破片が多数採集された。

4　古代

前述の小瀬戸遺跡からは，遺構として，掘立柱建物跡・溝状遺構・井戸跡等が検出された。遺物は，「伴家」と刻書した緑釉陶器のほか「大伴」「伴」「仲」「仲家」「利」「雄」の墨書・刻書土器が出土している。さらに，祭祀に用いられたと考えられる土馬も土坑内から出土している。

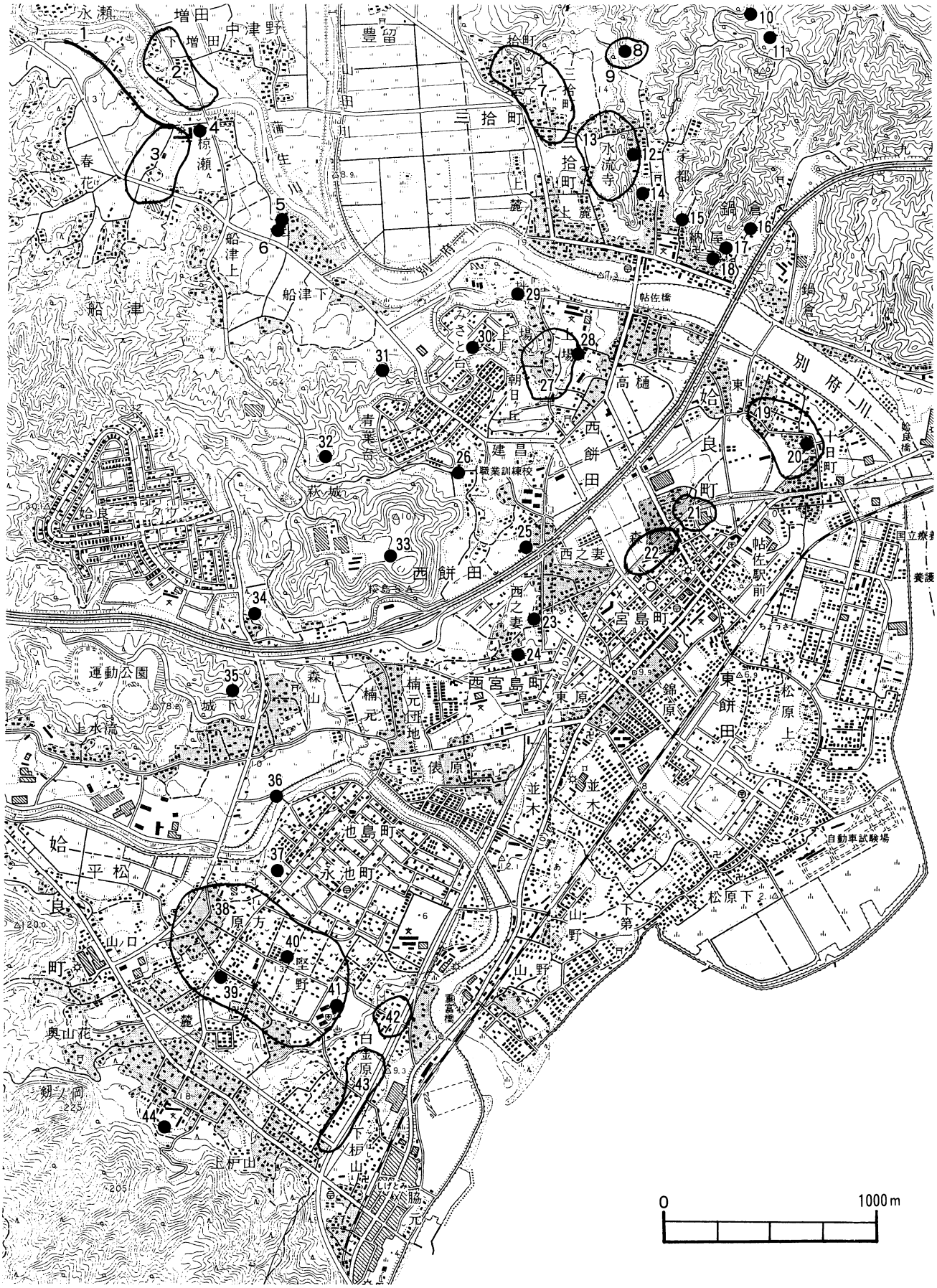
前述の萩原遺跡からは，奈良時代のものとされる礫積石室が1基出土している。また遺物は，該当期の壺形土器，土師器皿，椀，墨書土器，刻書土器などが出土している。

宮田ヶ岡窯跡は，1996・97年に姶良町教育委員会によって発掘調査が実施された。遺構として，奈良時代から平安時代にかけての瓦窯が3基確認された。遺物は，軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・面戸瓦，土馬，須恵器，土師器，陶磁器等が出土している。大隅国分寺に瓦を供給した瓦窯と考えられる。

小倉畑遺跡は，1994・95・97年に鹿児島県立埋蔵文化財センターによって発掘調査が実施された。本遺跡の北東に隣接する。遺構として，平安時代の溝状遺構1条，方形周溝墓1基などが検出されている。方形周溝墓は本遺跡と関連があると思われる。遺物は，土師器，須恵器，鉄製紡錘車，刀子，羽口，香炉，鉄鉢模倣品，模倣品，植物遺存体，昆虫遺存体などが出土している。

引用・参考文献

姶良町教育委員会「萩原遺跡」1978
姶良町教育委員会「萩原遺跡（Ⅱ）」1980
姶良町教育委員会「南宮島遺跡」『姶良町都市計画事業に伴う埋蔵文化財報告書』1977
姶良町教育委員会「宮田ヶ岡窯跡」『姶良町埋蔵文化財発掘調査報告書』第7集　1999
姶良町郷土史改訂編さん委員会「姶良町郷土史」1995
鹿児島県教育委員会「小瀬戸遺跡・建馬場・松木田遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(19)　1982
鹿児島県教育委員会「平松原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(58)　1991
鹿児島県立埋蔵文化財センター「保養院遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(11)　1994
鹿児島県立埋蔵文化財センター「小倉畑遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(34)　2002


永瀬
増田
中津野
豊留
三拾町
春花
船津
船津上
船津下
別府川
上麓
水流寺
鍋倉
納屋
帖佐橋
上場
高樋
西餅田
建昌
職業訓練校
萩城
拾良
十日町
帖佐駅前
国立療養
西之妻
宮島町
西宮島町
運動公園
森山
楠元
楠元団地
東原
錦原
東餅田
松原上
俵原
並木
池島町
永池町
自動車試験場
松原下
拾平松
原方
山口
竪野
第
山野
白金原
下枦山
上枦山
奥山花
朝夕岡
0
1000m

第２図　周辺遺跡位置図

第１表　周辺遺跡・地名表

	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	城ヶ崎	船津城ヶ崎	沖積地	古墳，歴史	官道跡推定地 成川式，土師器等	
2	川畑	船津川畑，郷屋	沖積地	古墳，歴史	成川式，土師器	
3	春花	船津春花，一丁畑	台地	古墳，歴史	成川式，土師器	
4	船津	船津	畑地	弥生（後）	完形壺形土器	S34発掘
5	馬場迫	船津馬場迫	畑地	弥生（後）	弥生土器，高坏	
6	馬場迫	船津馬場迫	畑地		土師器，須恵器	
7	外園	鍋倉外園，神田油	沖積地	古墳，歴史	成川式，土師器	
8	亀泉院廃寺跡	鍋倉仮屋，宇都	山麓	室町		三国名勝図会
9	諏訪前	鍋倉諏訪前，宇都	沖積地	古墳，歴史	土師器	
10	平安城跡	鍋倉本丸	山頂	鎌倉	本丸，中丸，平安城，荒神城，鶴丸，松尾，小城高尾城等，遺構空堀あり	三国名勝図会
11	増長院廃寺跡	新正八幡	山頂	鎌倉		弘安年中　，平山了清建立という　三国名勝図会
12	古帖佐焼窯跡	鍋倉宇都	宅地	江戸	陶器片，窯跡	
13	稲荷脇	鍋倉稲荷脇他	台地	古墳，歴史	成川式，土師器	本屋敷・房屋敷
14	花園廃寺跡	鍋倉宇都	平地	安土桃山	修験住持免許状座禅石	三国名勝図会
15	総禅寺廃寺跡	鍋倉仮屋	山麓	室町		三国名勝図会
16	天福廃寺跡	鍋倉	山麓	鎌倉	仁王２基，磨崖仏22体	再興開山は福昌寺18世代賢和尚，松平定行夫人千鶴姫元和３年再興　三国名勝図会
17	木野	木津志木野	台地	縄文(早前)	吉田式，石坂式土器片	Ｓ21発掘　住居跡
18	米山薬師廃寺跡	鍋倉仮屋	山頂	室町		三国名勝図会
19	東道丁原	鍋倉東道丁原他	沖積地	歴史	土師器，青華	願成寺他
20	願成廃寺跡	東餅田十日町	畑地	安土桃山		三国名勝図会
21	小倉畑	西餅田小倉畑	低湿地	古墳，歴史	成川式，土師器	Ｈ６，９発掘
22	森	西餅田森	沖積地	歴史	土師器	Ｈ２発掘
23	西ノ妻	西餅田848	畑地	縄文（早）	吉田式土器片	
24	南宮島	西餅田南宮島 字上田山野	畑地	縄文～歴史	春日式，南福寺式土器片	Ｓ51発掘
25	小瀬戸	西餅田小瀬戸	沖積地	縄(早前)，歴	前平式，深浦式，弥生土器，土師器，甕，墨書土器	Ｓ46発掘
26	雲門廃寺跡	西餅田建昌	宅地	室町	仁王２基	雲門寺池の北，宅造
27	上場	西餅田上場，羽迫	畑地	弥生（中）	弥生土器片(完形)	Ｓ36発掘
28	上場	西餅田上場，羽迫	畑地	弥生（中）		Ｓ36発掘
29	小野元立院窯跡	西餅田壷屋	宅地	江戸	陶器片，窯跡	帖佐運送宅造により窯跡破壊される
30	茶臼城跡	西餅田上場	山麓	南北朝	堀切遺構	宅造で一部破損 三国名勝図会
31	宮田岡	船津	山麓	歴史	布目瓦，窯跡	Ｈ８・９発掘
32	萩峯城跡	西餅田萩峯	山頂	室町	堀切・馬乗馬場郭跡	三国名勝図会
33	建昌城跡	西餅田建昌城	山頂	縄文（草早） 室町	竪穴状遺構，集石，堀切・馬乗馬場郭跡	三国名勝図会
34	森山	平松2724	山麓	縄(晩)，弥(後)	西平式，成川式	
35	諏訪城跡	平松宇都	山頂	室町	堀切・馬乗馬場郭跡	三国名勝図会
36	稲荷	平松原方稲荷橋	河川	縄文（前）	曽畑式，日木山式	Ｓ28発掘　川底
37	萩原	平松4590	畑地	弥生，奈良	縄文後期土器片，弥生土器，成川式，須恵器	Ｓ53～55発掘
38	平松原	平松原竪野	沖積地	弥生，歴史	弥生土器，土師器等	後迫・京田他
39	紹隆廃寺跡	平松	平地	江戸		三国名勝図会
40	竪野	平松竪野	宅地	弥生（前後）	完形壺形土器	Ｓ26発掘
41	保養院	竪野県立姶良病院	畑地	縄，弥，古墳 古代，中世	免田式，石器，古墳時代の集落	Ｈ１～３発掘
42	白金原	脇元白金原			畦畔	Ｈ２発掘
43	中原	脇元中原外	沖積地	縄～近世	道跡（古代～近世）	Ｈ６，７発掘
44	平松城跡	平松上星原	山麓	室町	古井戸，石垣，抜穴	Ｓ38町指定

第３章　発掘調査の概要

第１節 発掘調査の方法

＜森遺跡第１地点＞

遺物の散布が認められた部分を中心に20か所のトレンチ（合計405㎡）を設定し，平成２年８月８日から同年９月18日まで確認調査を実施した。その結果，遺物包含層が良好な状態で残存しているのは，Ｃ・Ｄ・Ｅ－３～６区だけであることが判明した。Ｄ－７～18区では，遺物包含層は残存していないものの，遺構の存在する可能性が認められた。その他の区では，Ⅲ層まで削平され，遺構の存在する可能性は認められなかった。遺物包含層の残存していない部分には，住宅撤去時に生じた住宅の基礎や廃材を埋めた大きな撹乱部分が認められた。

緊急発掘調査は，平成２年９月14日から平成３年３月14日まで実施し，約2,500㎡を調査した。調査の結果，平安時代の遺構・遺物，近世の遺構・遺物等が確認された。

＜森遺跡第２地点＞

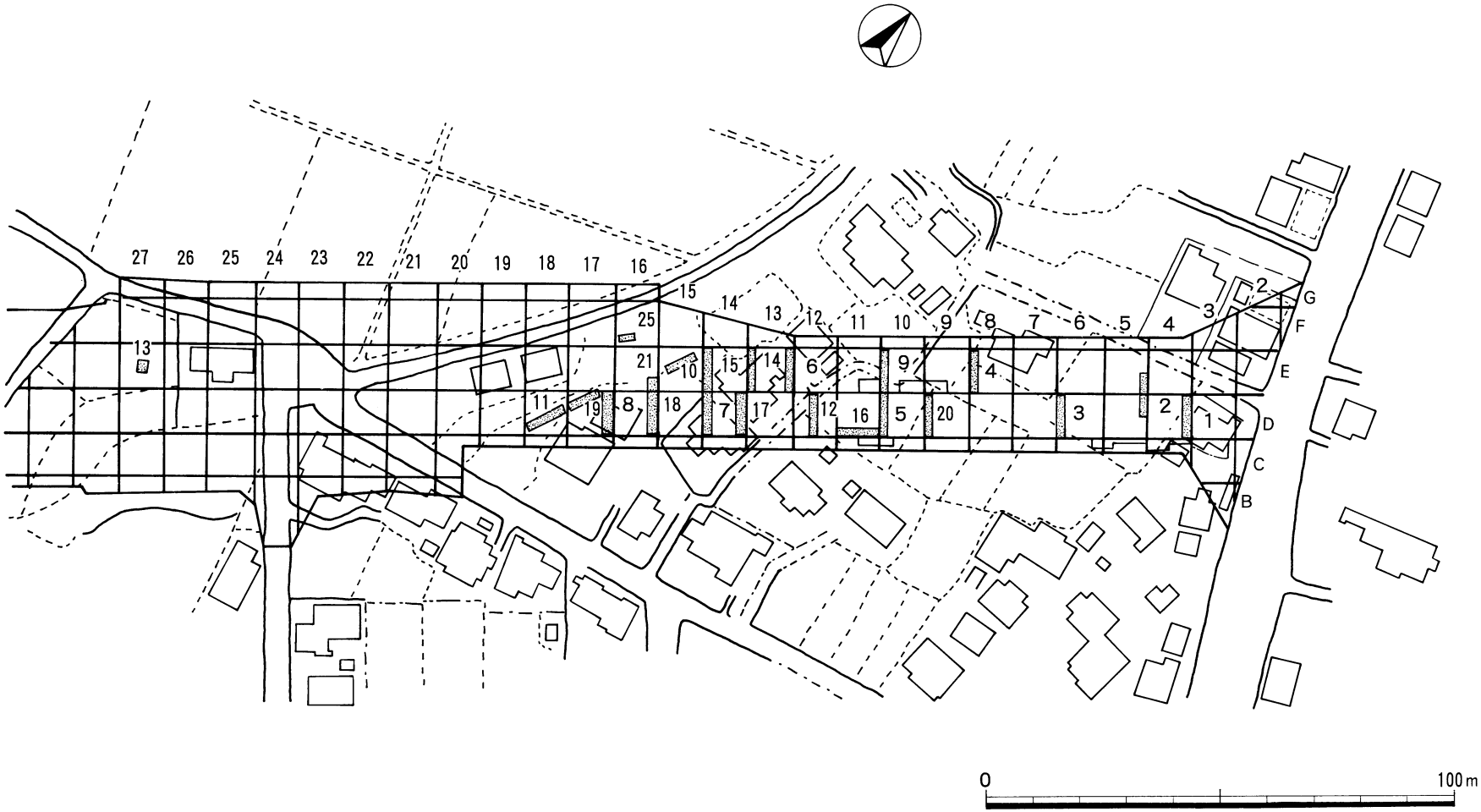
11か所のトレンチ（約156㎡）を設定し，平成２年９月10日から同年10月４日まで確認調査を実施した。現況が水田と荒地になっているＡ・Ｂ・Ｃ－１～９区では表土下の黒褐色粘質土から多量の土師器片や須恵器片が出土したが，本来の遺物包含層である黒色腐植土は認められなかった。Ｂ・Ｃ－10～13区では薄いながらもⅡ層の遺物包含層が確認され，土師器等の遺物が出土した。

緊急発掘調査は，平成２年12月17日から平成３年３月29日まで約2,100㎡について実施した。Ａ・Ｂ・Ｃ－１～９区は，確認調査時の状況から溝状遺構の可能性を考慮し調査を進めた。また，調査中に付近の住民から「水田は江戸時代末期に畑を地下げして開田されたものだ。」という話を聞いた。実際の調査においても開田直後のものと思われる畦や水路等が検出され，染付等の近世の陶磁器も出土したため，黒褐色土は地下げ後の盛土であると判断し遺物の採集のみをおこなった。Ｂ・Ｃ－10～13区では，土師器，須恵器等の遺物が出土したほか，掘立柱建物跡，土坑等の遺構も検出された。

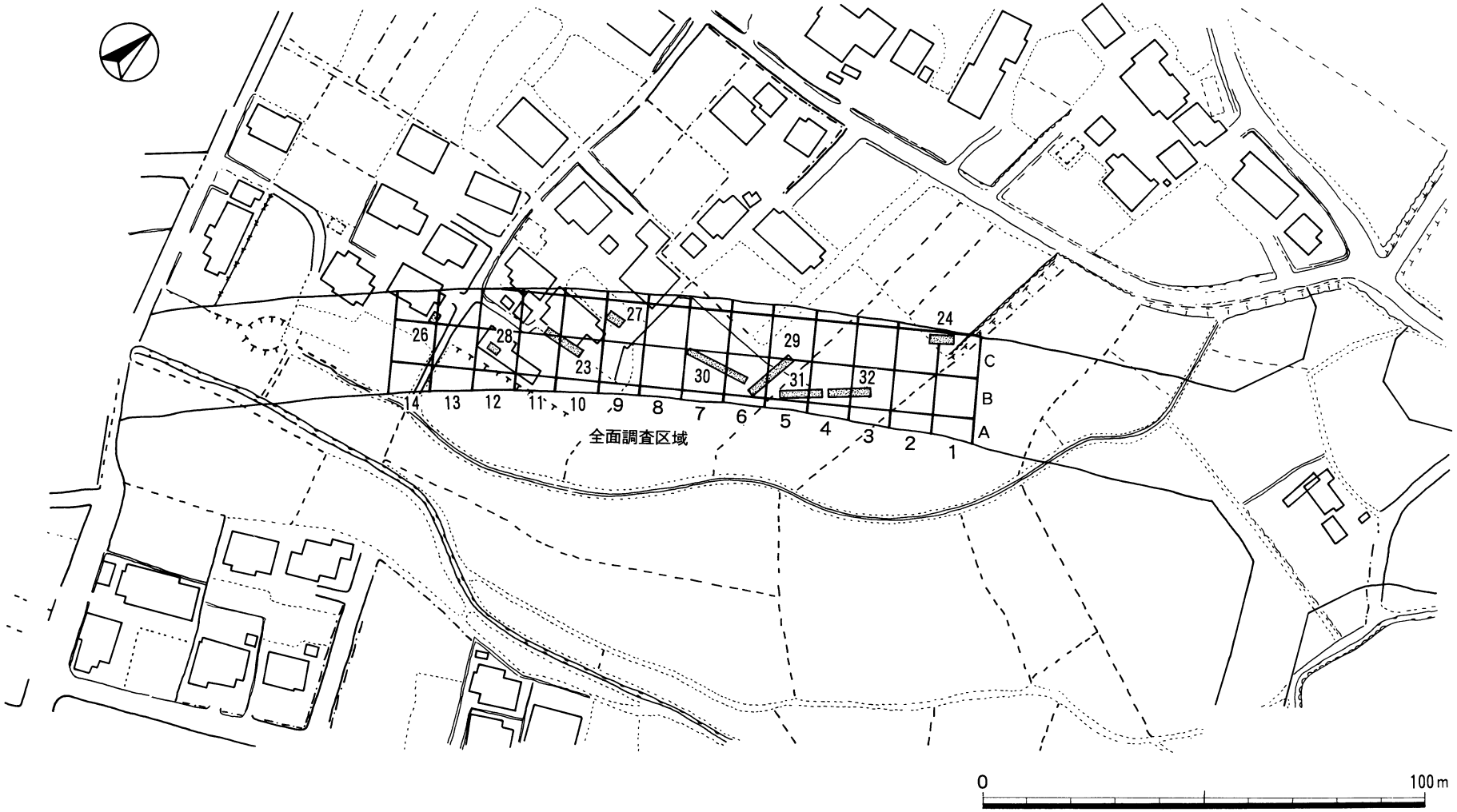
＜白金原遺跡＞

遺物の散布が認められた工事計画地内に14か所のトレンチ（250㎡）を設定し，平成２年６月６日から同年７月９日まで確認調査を実施した。その結果，予想された古墳時代から中世の遺物包含層は認められなかった。第14トレンチでは，畑跡と思われる遺構が検出された。第１トレンチと第６トレンチの状況から遺構の広がりは，第１トレンチから第６トレンチの間に限定されると判断した。

これらの事実をもとに，鹿児島国道事務所と県教育委員会が協議し，畑跡遺構の存在する部分約520㎡については，当該年度中に緊急発掘調査を実施することとなった。緊急発掘調査は，平成２年７月10日から同年８月10日まで実施した。



第３図　第１地点調査区及びトレンチ配置図



第４図　第２地点調査区及びトレンチ配置図

第５図　白金原遺跡調査区域

第２節　層序

【森遺跡第１地点】

遺物包含層が良好な状態で残存しているのは，Ｃ・Ｄ・Ｅ３～６区だけであった。19区以降ではⅢ層まで削平され，遺構の存在する可能性は認められなかった。

Ⅰ	Ⅰ層	黒灰色砂質土	表土。畑として利用される。場所により，この層より上に盛土がなされている。中・近世の遺物含まれる。
Ⅱ	Ⅱ層	黒色腐植土	平安時代後期の遺物包含層。Ｄ・Ｅ７～18区では削平されている。
Ⅲ	Ⅲ層	黄褐色～黄橙色砂層	無遺物層。この層以下は砂の層で基盤層として扱った。

【森遺跡第２地点】

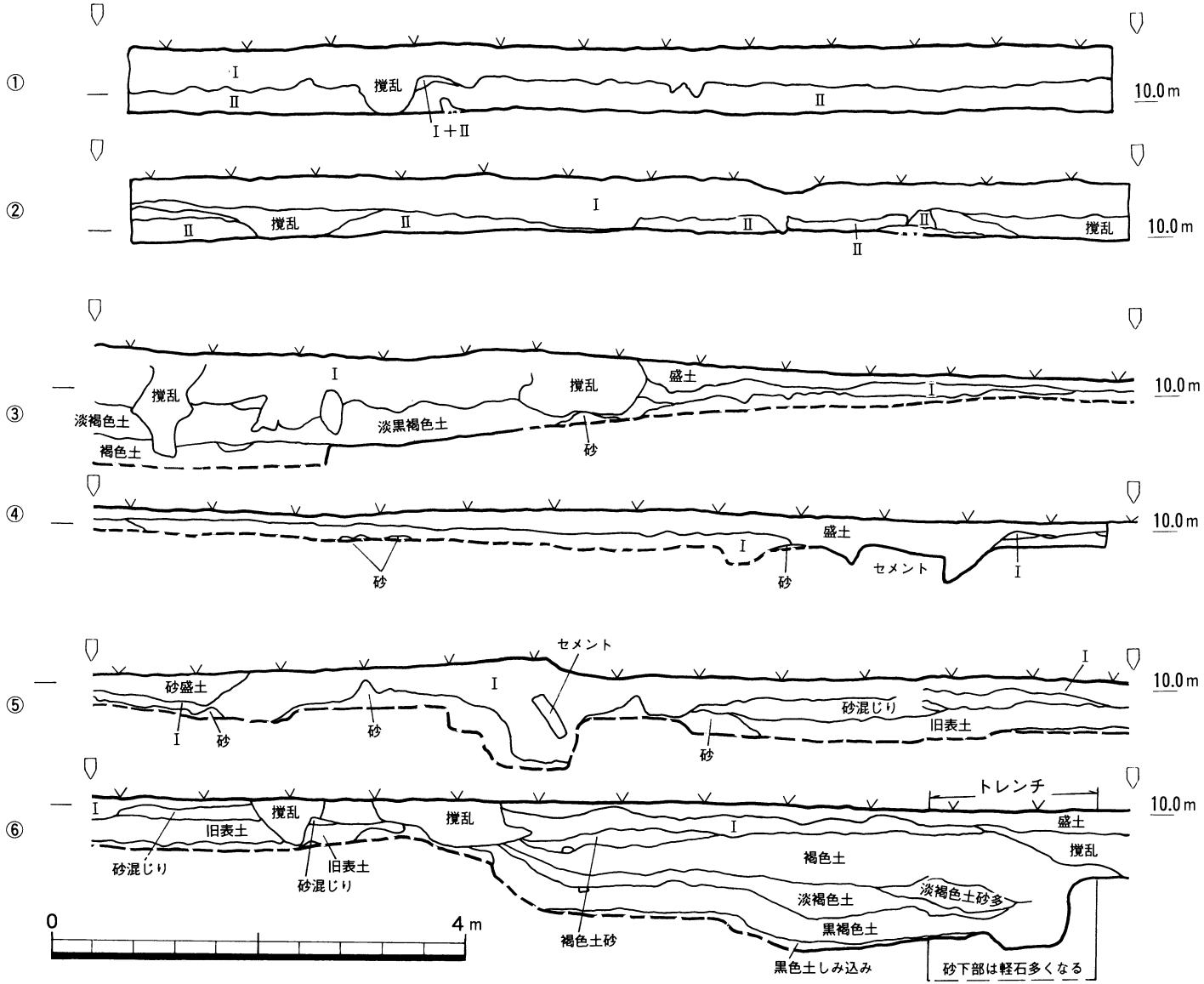
現況が水田と荒地になっていたＡ・Ｂ・Ｃ－１～９区ではⅠ層は灰褐色粘質土である。その下の黒褐色粘質土から多量の土師器片や須恵器片が出土したが，本来の遺物包含層である黒色腐植土は認められなかった。付近の住民の話によると，「水田は江戸時代末期に畑を地下げして開田された。」ということであった。調査においても，開田直後のものと思われる畦や水路等が検出され，染付等の近世の陶磁器も出土したため，黒褐色土は地下げ後の盛土であると判断した。また，水田部分では，Ⅱ層からⅤ層は欠如している。

Ｂ・Ｃ－10～13区では薄いながらもⅡ層の遺物包含層が確認された。

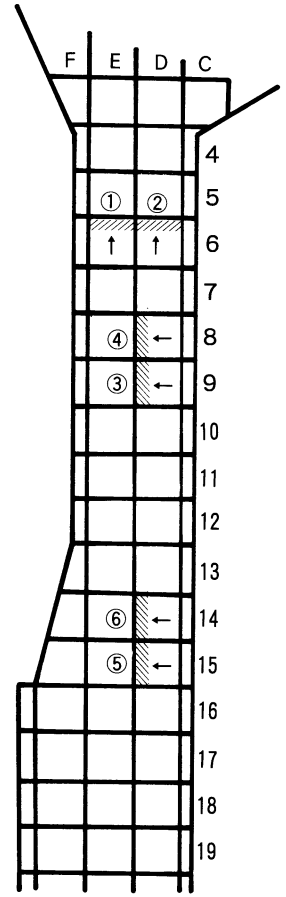
Ⅰａ（Ⅰｂ）	Ⅰａ層	黒灰色砂質土	表土。住宅地となっていた部分では，この上に更に盛土がなされている
Ⅰａ（Ⅰｃ）	Ⅰｂ層	灰褐色粘質土	水田部分の表土
	Ⅰｃ層	黒褐色粘質土	盛土
Ⅱ	Ⅱ層	黒色腐植土	平安時代後期の遺物包含層。
Ⅲ	Ⅲ層	黄色砂質土	粒子が細かい。シラスの二次堆積の可能性がある。
Ⅳ	Ⅳ層	灰白色粘質土	粘質を帯びる。乾燥するとひび割れる。
Ⅴ	Ⅴ層	灰白色砂礫層	腐植した軽石礫を主体とする。崩れやすい。
Ⅵ	Ⅵ層	黄褐色～黄橙色砂層	基盤層として扱った。

【白金原遺跡】

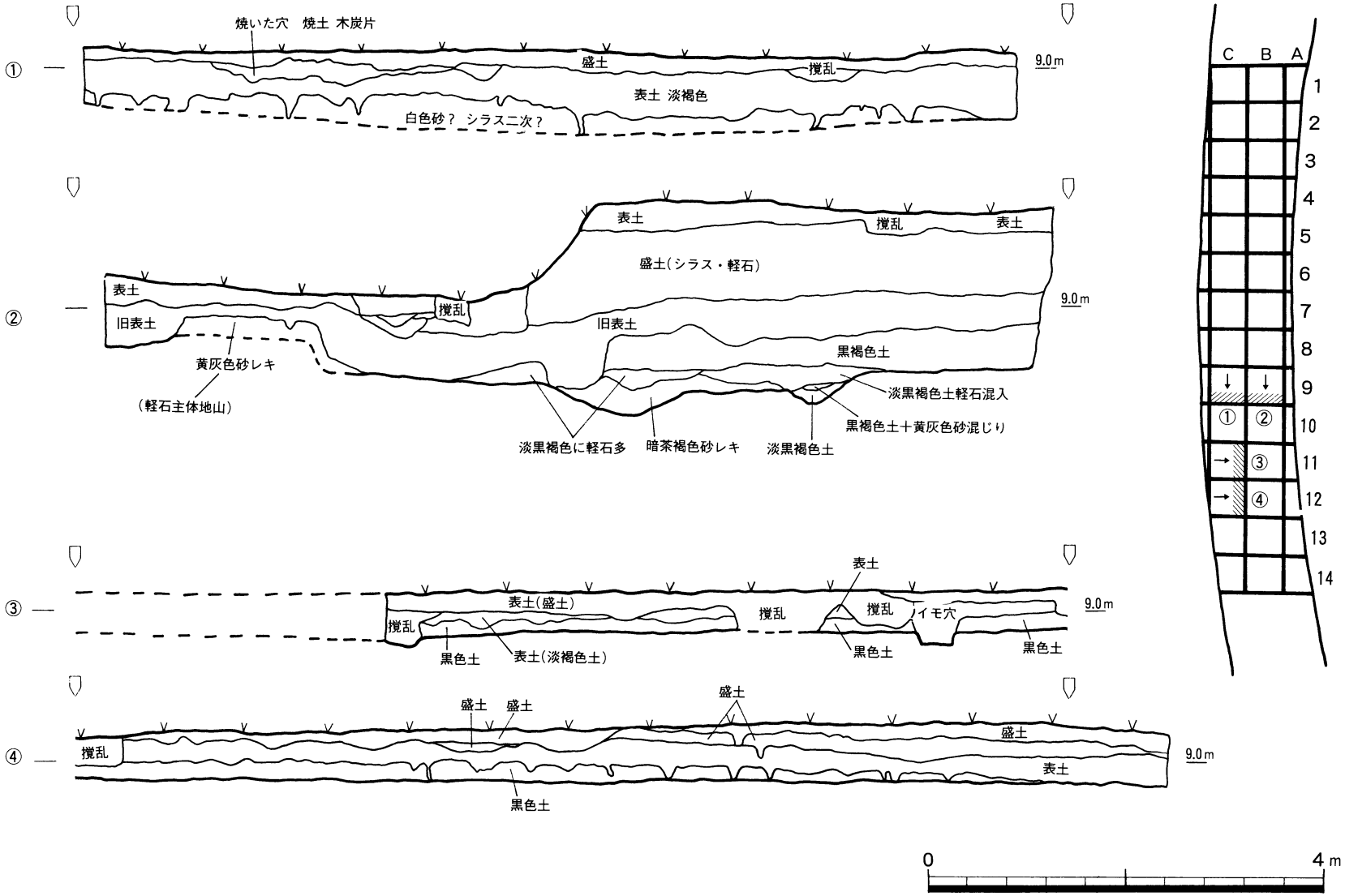
Ⅰ	Ⅰ層	灰茶褐色土	表土。畑として利用される。中･近世の遺物を含む。
Ⅱ	Ⅱ層	暗茶褐色土	中・近世の遺物を含む。
Ⅲ	Ⅲ層	黒色腐植土	撹乱層
Ⅳ	Ⅳ層	暗褐色土	無遺物層
Ⅴ	Ⅴ層	黄橙色砂層	無遺物層。この層以下は砂の層で基盤層として扱った。



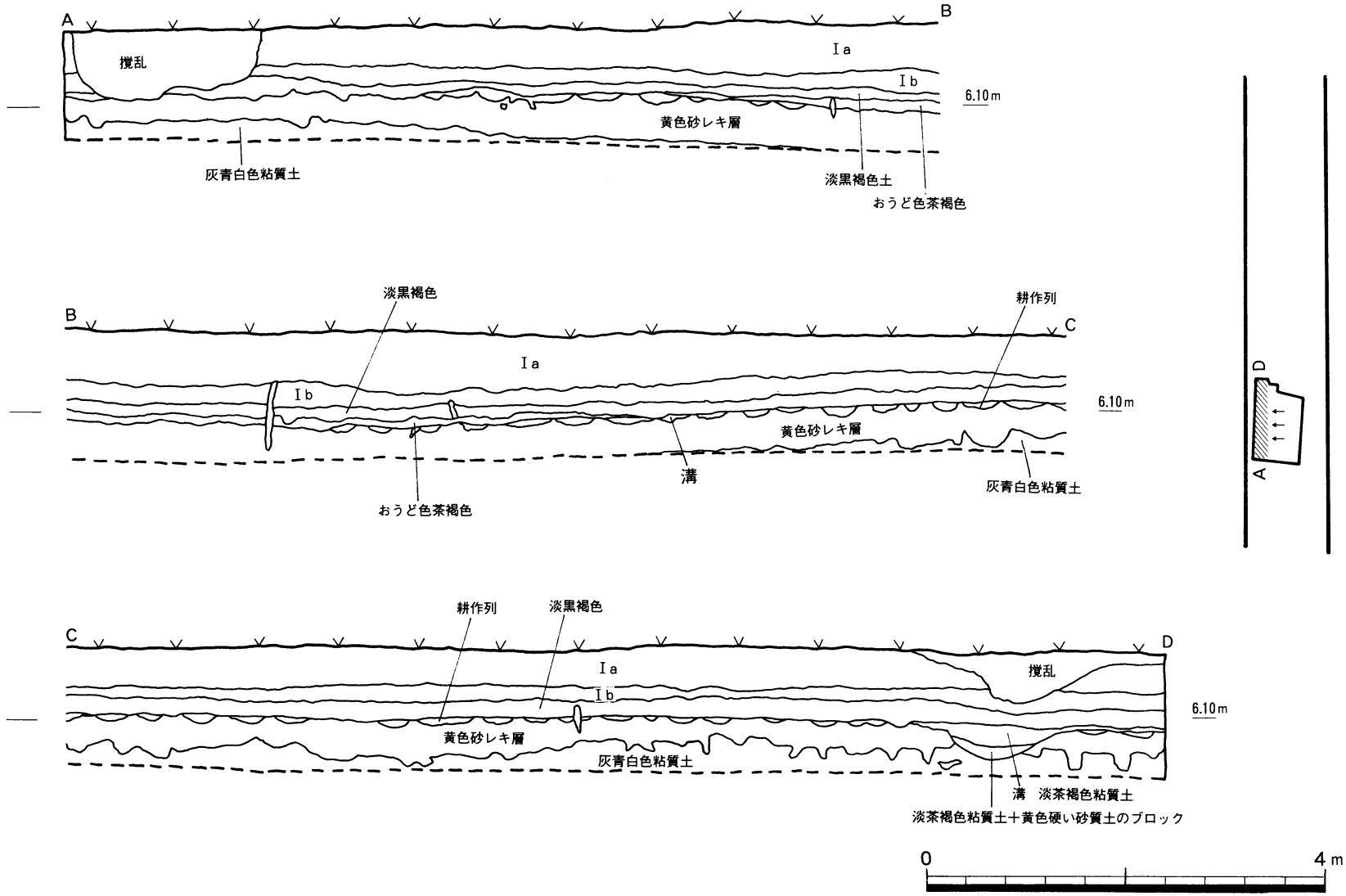
第6図　第1地点土層断面図



第1地点土層観察位置図



第７図　第２地点土層断面図



第8図　白金原遺跡土層断面図

第４章　第１地点の調査の概要

第１節　古墳時代の調査

（１）調査の概要

本遺跡では，古墳時代の包含層は検出されていないが，表土層を掘り下げる際と古代の遺物包含層であるⅡ層中で，古墳時代の成川式土器が出土した。Ⅱ層中からの出土については，出土量が少なくローリングを受けていることから，原位置を保っているとは考え難い。他の土器片は，表土中からの出土であり，本遺跡の周辺に古墳時代の遺跡が存在することを示唆している。

（２）出土遺物（第９図）

出土した土器片は，いずれも小破片であり図化できたものは甕の胴部２点・底部３点，手づくね土器の底部１点の計６点のみであった。

１・２は，甕の胴部である。

１は，幅約2.5cmの粘土紐が１条廻っており，指頭による圧痕が施されている。粘土紐の上部はナデ調整が施され，引き伸ばされている。粘土紐から下部はススが付着している。器壁が約1.2cmと厚く，径は小破片のため不明であるが，大甕の一部である。２は，幅約0.7cmの粘土紐が１条廻っており，爪状の刻み目が施されている。

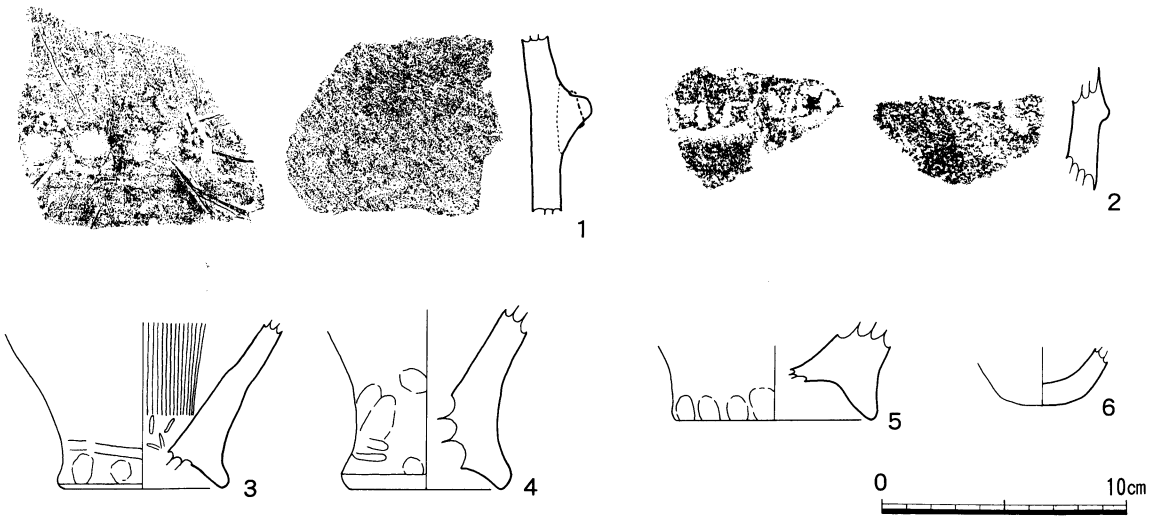
３～５は，甕の底部である。

３・４は，脚部が短いタイプである。脚部の内外面に指頭圧痕が残るようにみえるが，ローリングを受けているために詳細は不明である。３は，胴部内外面に，縦位の粗いハケ目が残る。脚部の先端が比較的細い。４は，脚部が厚く成形されている。

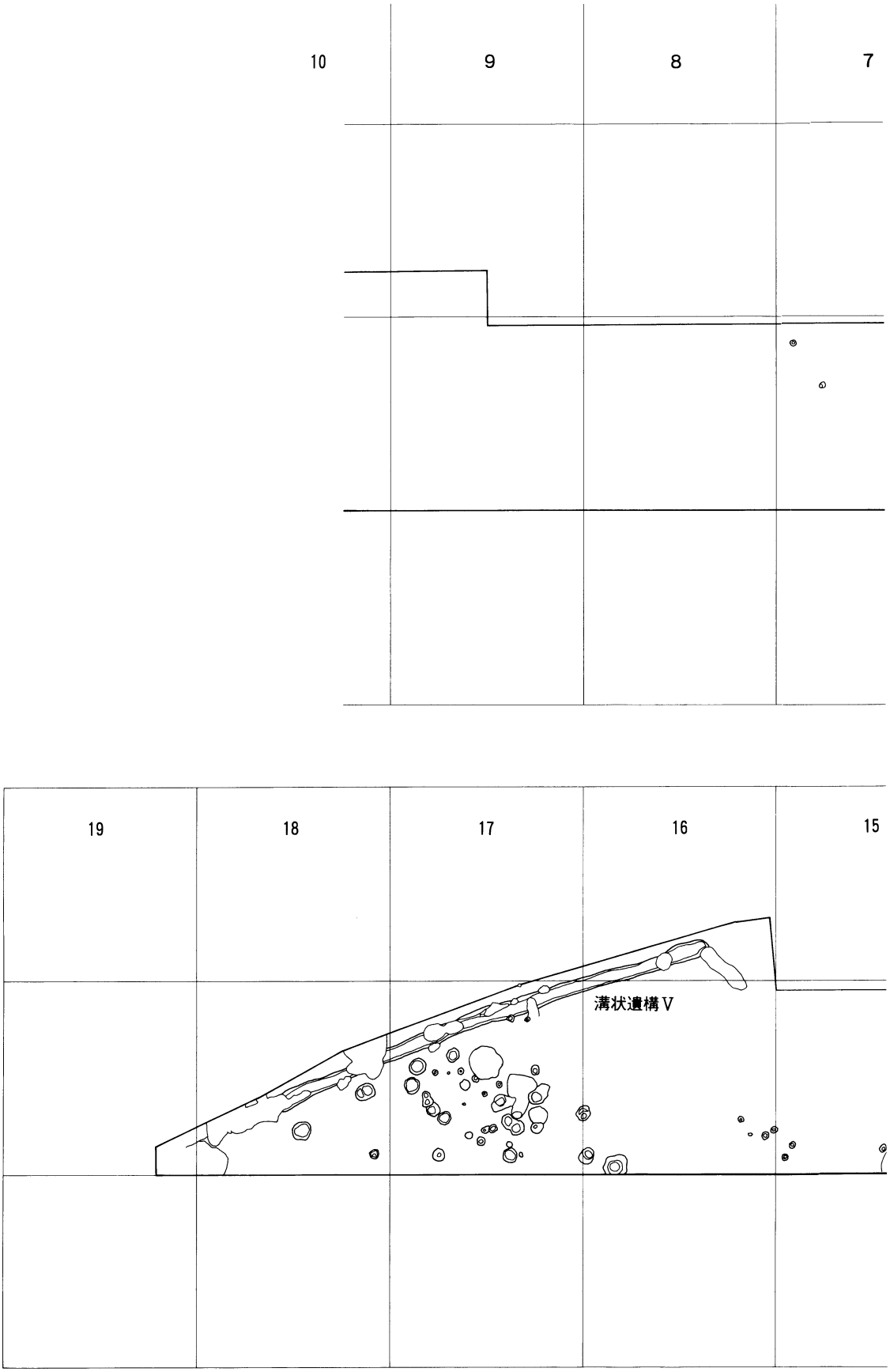
５は，比較的脚部が長いタイプである。底部付近しか残存していないが，器壁は2.2cmとかなり厚い。ローリングを受けている。

３点とも胴部はほとんど残存していないが，底部の形態から胴部が直行するタイプであると考えられ，５世紀以降のものである可能性がある。

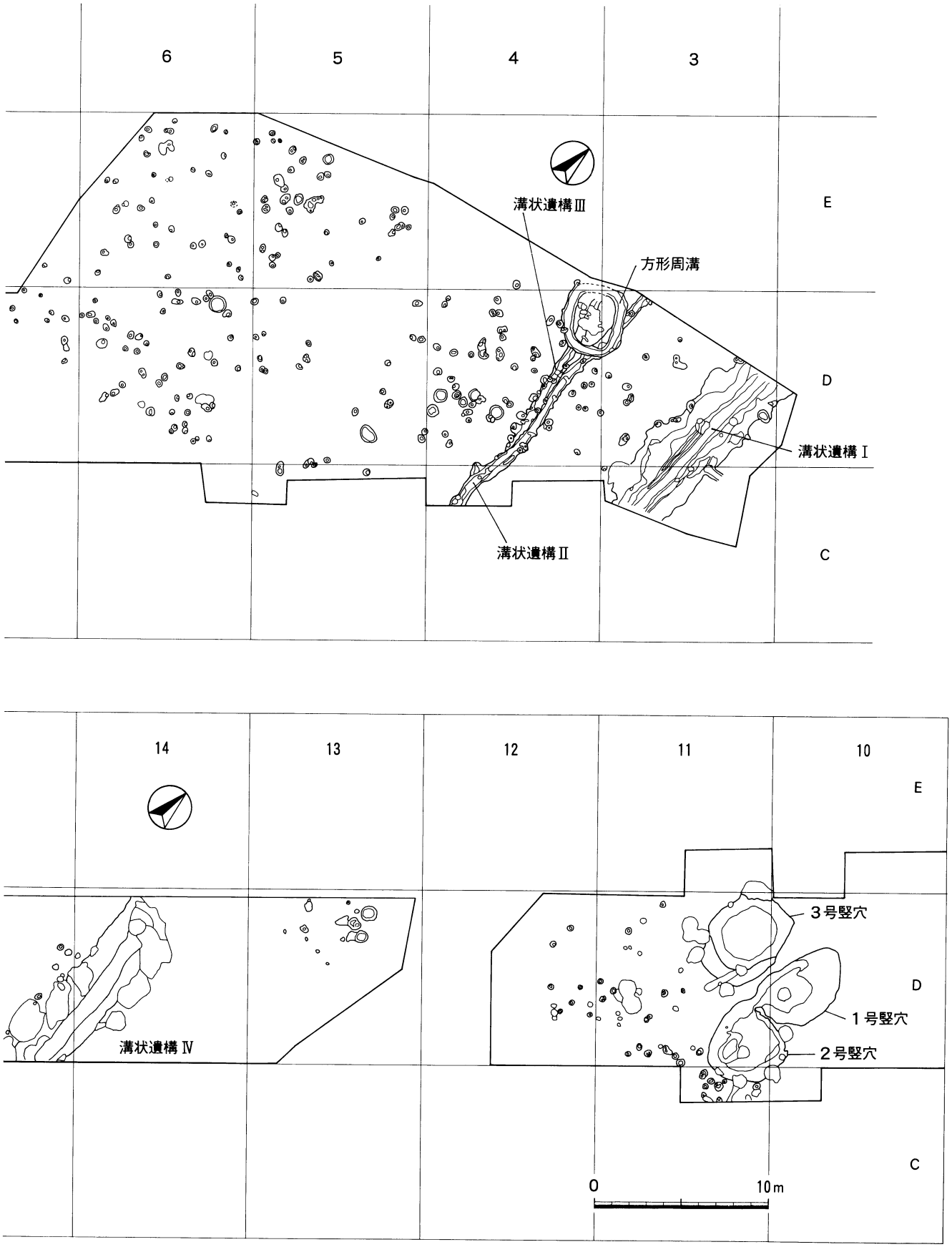
６は，手づくね土器の底部である。



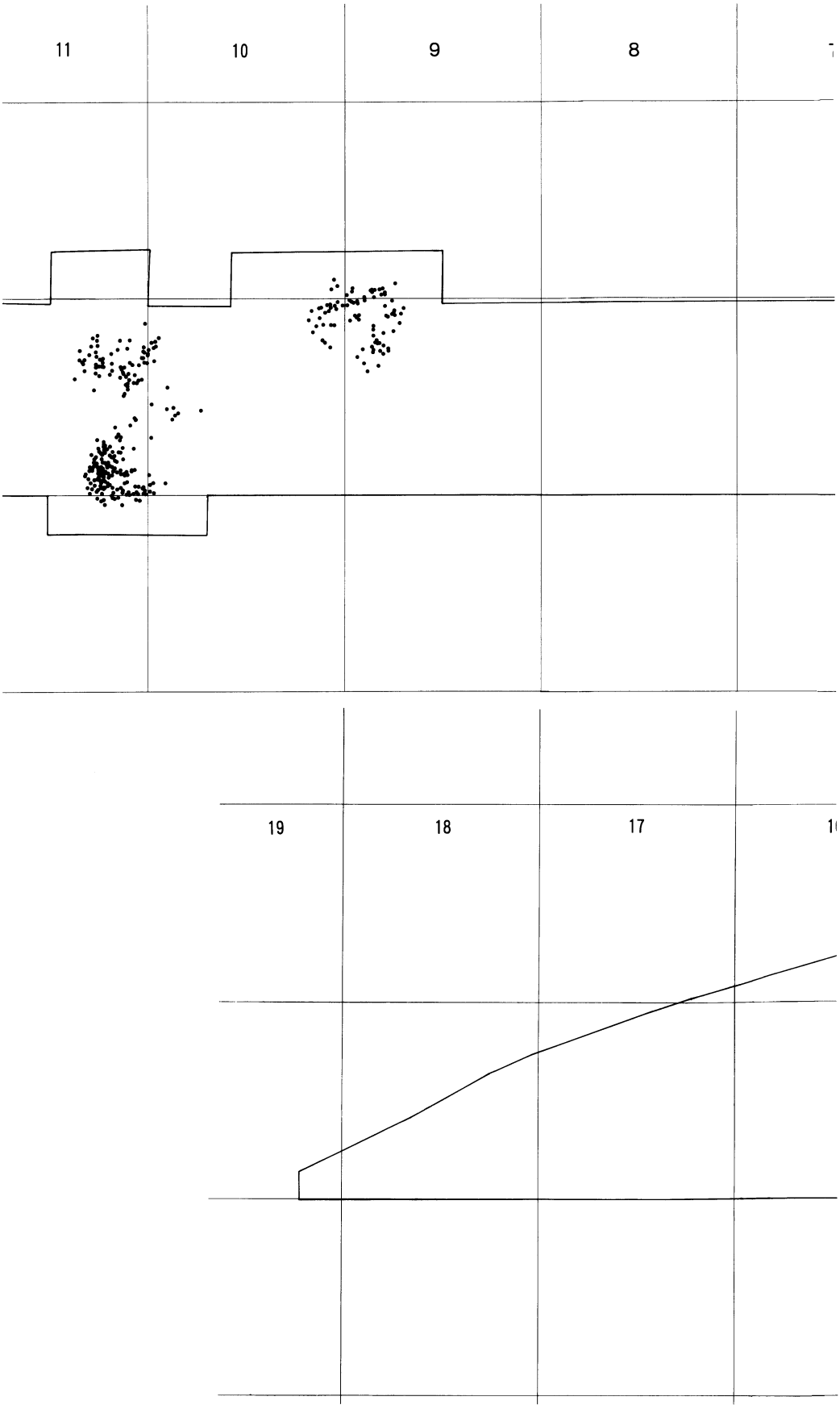
第９図　古墳時代出土遺物



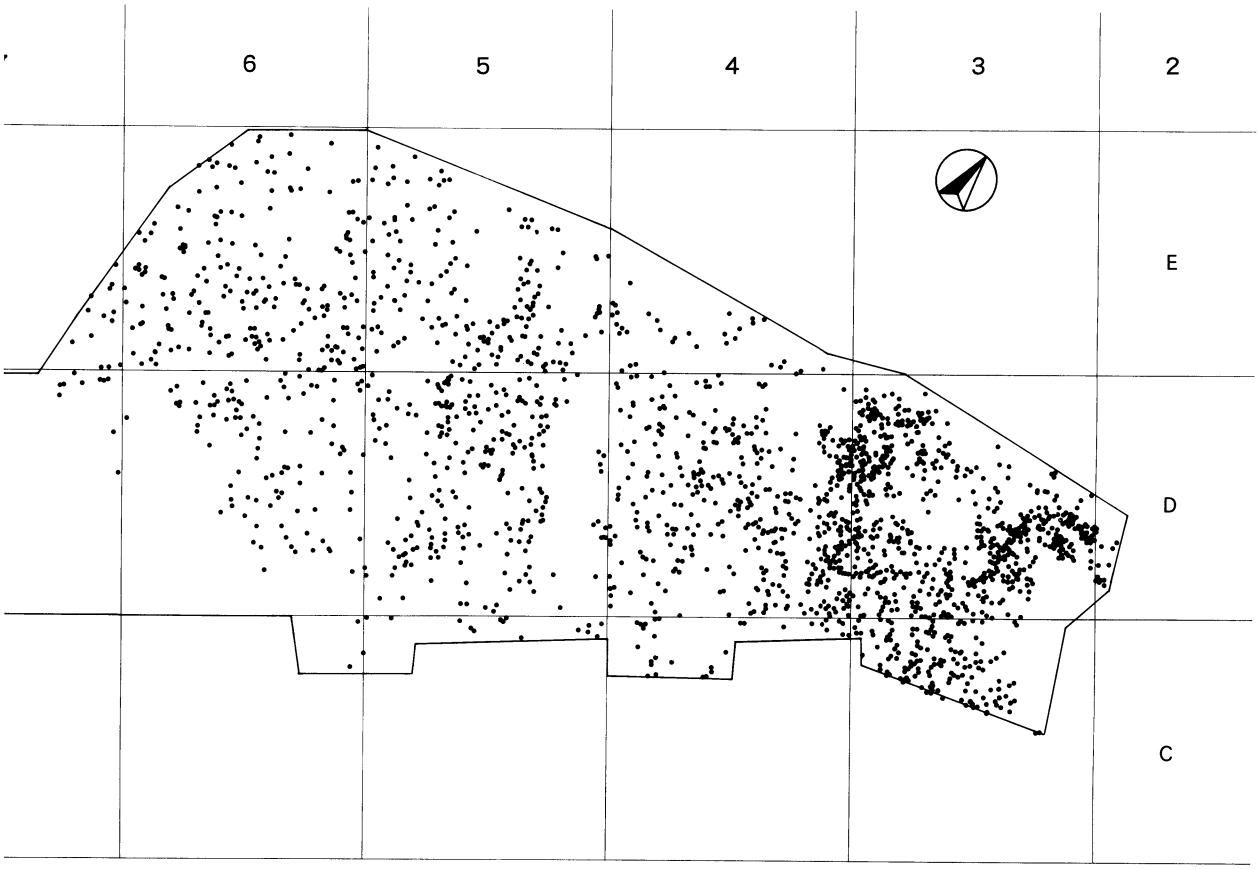
第10図

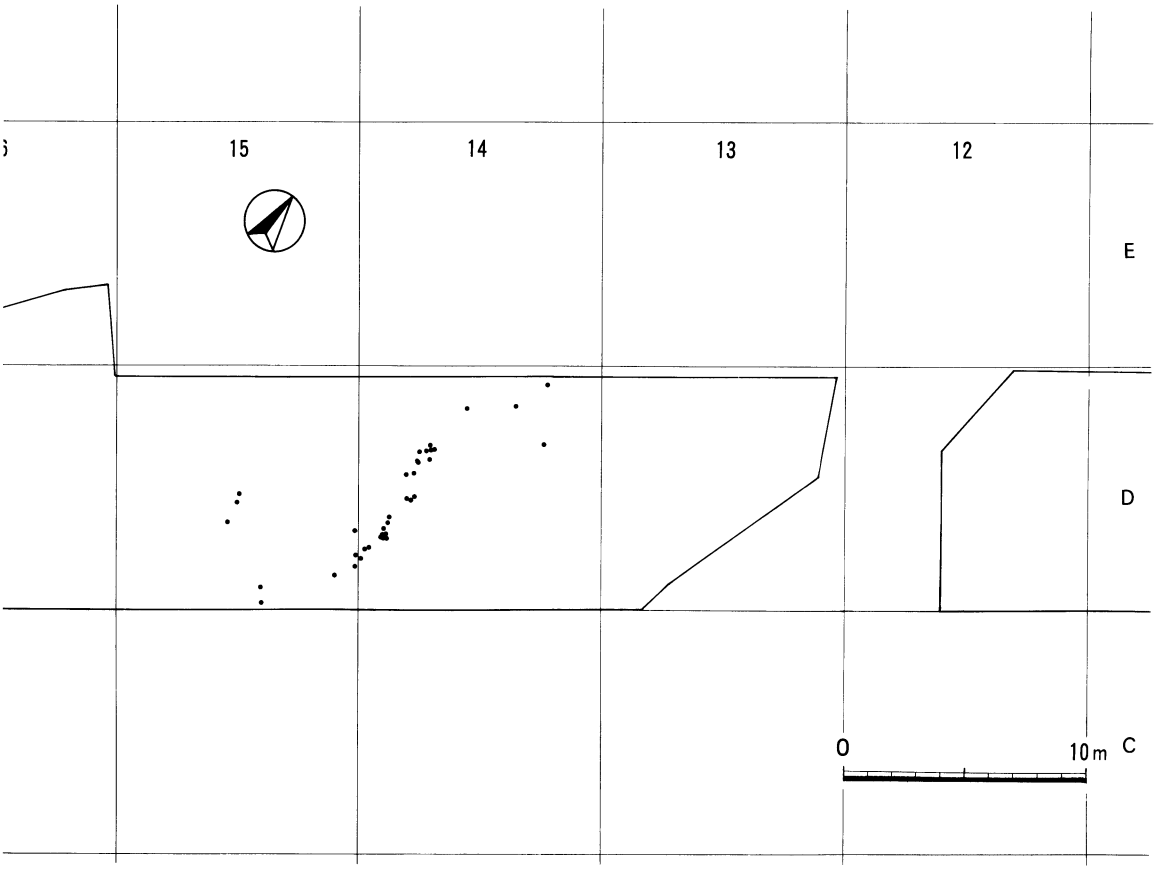


第１地点遺構配置図(古代)



第11図





第１地点遺物出土状況

第２節　古代の調査

（１）調査の概要

本遺跡の主体をなす時代である。遺物の散布が認められた部分を中心に20か所のトレンチ（合計405㎡）を設定し，確認調査を実施した。

その結果，遺物包含層（Ⅱ層）が残存していたのは，Ｃ・Ｄ・Ｅ－３～６区だけであることが判明した。また，Ｄ－７～18区は，遺物包含層は削平されていたものの遺構が存在する可能性があり，遺構確認のための調査を行った。

その結果，遺構として周溝（方形周溝墓の周溝の可能性がある）１基・竪穴（住居跡か）３基・溝状遺構５条・ピット群３か所を検出した。

遺物は，土師器・須恵器等が出土している。遺物包含層が削平されている部分が多いが，表土層の遺物も多数採集してきているため，一括して掲載することとした。

その他の区では，Ⅲ層まで削平されており遺構が存在する可能性はないと判断した。遺物包含層の残存していない部分には，住宅撤去時に生じた住宅の基礎や廃材を埋めた大きな撹乱部分が認められた。

（２）検出遺構及び遺構内出土遺物

古代に属する遺構として，周溝（方形周溝墓の周溝の可能性がある）１基・溝状遺構５条・竪穴（住居跡か）３基・ピット群３か所を検出した。

①周溝（第13図）

Ｄ－３区と４区の境界で，略方形をした周溝が検出された。

周溝は，方形を基本プランとした隅丸方形をしており，主軸方向は，Ｎ－10°－Ｗである。残存部の長径4.1ｍ，短径3.6ｍで，幅は検出面で40～70㎝，床面で20～40㎝，深さは30㎝を残す。

本遺跡と隣接する小倉畑遺跡では，この周溝から北東に約60ｍ離れた地点で，形状のよく似た方形周溝墓１基（径5.2ｍ）が検出されており，この遺構も方形周溝墓の周溝である可能性がある。

中央部は，後世の撹乱により掘り込まれ破壊されており，主体部が存在したと思われる場所は遺存していない。また，周溝の北側は調査時に現生していた楠の樹根によって破壊され遺存していない。

溝状遺構Ⅱ・Ⅲとの切り合い関係については，溝状遺構Ⅱは，周溝と溝状遺構Ⅲによって切られている。周溝と溝状遺構Ⅲの関係は確認できなかった。

周溝出土遺物（第12図）

周溝内からは，土師器の坏２点，小皿５点，皿１点，椀１点，黒色土器５点，須恵器の高台付坏１点，土錘１点，焼塩土器１点等が出土している。そのほかに，約50点の土師器等の破片が出土しているが，小破片のため図化していない。

７・８は，土師器の坏である。周溝内で重なった状態で出土している。いずれも円盤状の底部を有し，体部がやや内湾しながら立ち上がる。７は，口径10.8㎝，底径4.8㎝，器高2.6㎝を測る。８は，口径10.4㎝，底径4.8㎝，器高2.7㎝を測る。７は，ほぼ完形，８も体部の一部を

欠損しているだけの良好な残存状態で出土している。後述する出土遺物の項目の坏Ⅱ類に相当する。

9～12は，土師器の小皿である。いずれも円盤状の底部を有する。9は，体部がやや内湾しながら立ち上がり，口縁部で外反する。内面に一部ススが付着している。ローリングを受けている。10は，体部が横にひろがったあと内湾して立ち上がる。底面の調整が粗くヘラ切りの痕跡が残る。完形で出土している。11は，体部がやや内湾しながら立ち上がる。ローリングを受けている。12は，体部が横にひろがったあと内湾して立ち上がる。完形で出土している。

13は，土師器の皿である。9～12と比べると，口径の割に器高が低い。ローリングを受けており，小破片のため詳細は不明である。

14は，土師器の埦である。高台は横に張り出し，体部は内湾しながら立ち上がる。完形で出土している。埦Ⅰb類に相当する。

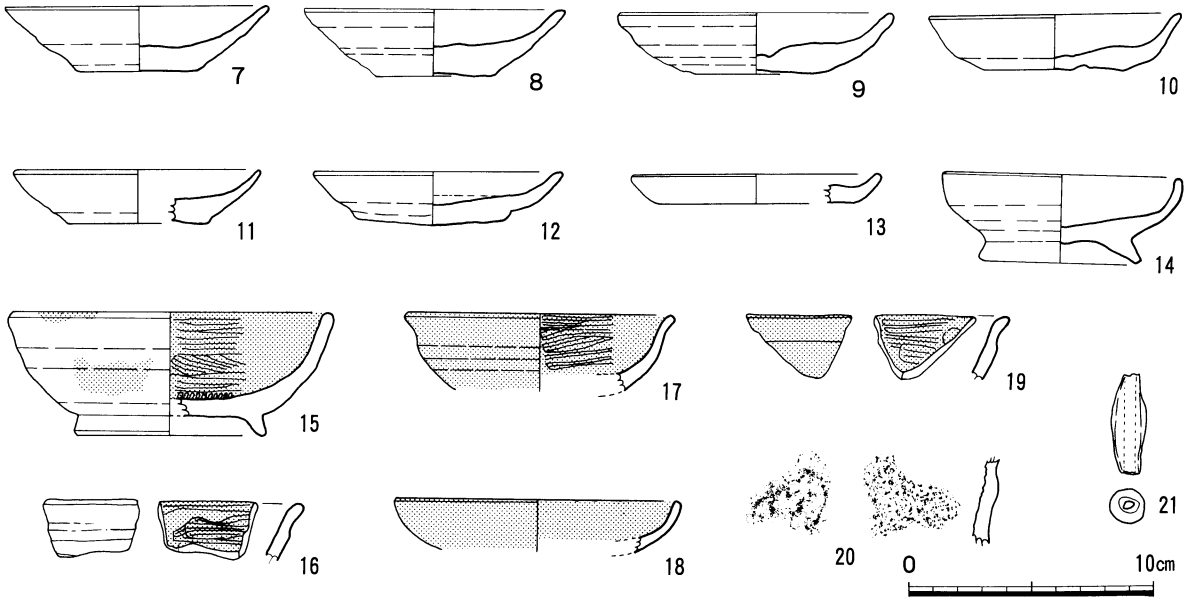
7・8・10・12・14は，周溝内でまとまった状態（約50cm四方以内）で出土しており，いずれも遺存状態が良好である。

15・16は，黒色土器A類の埦である。15は，高台はやや横に張り出し，体部は徐々に内湾しながら立ち上がる。体部内面に横位のミガキがみられ，外面も一部横位のミガキがみられる。16は，口縁部付近の破片である。内面に横位のミガキがみられる。

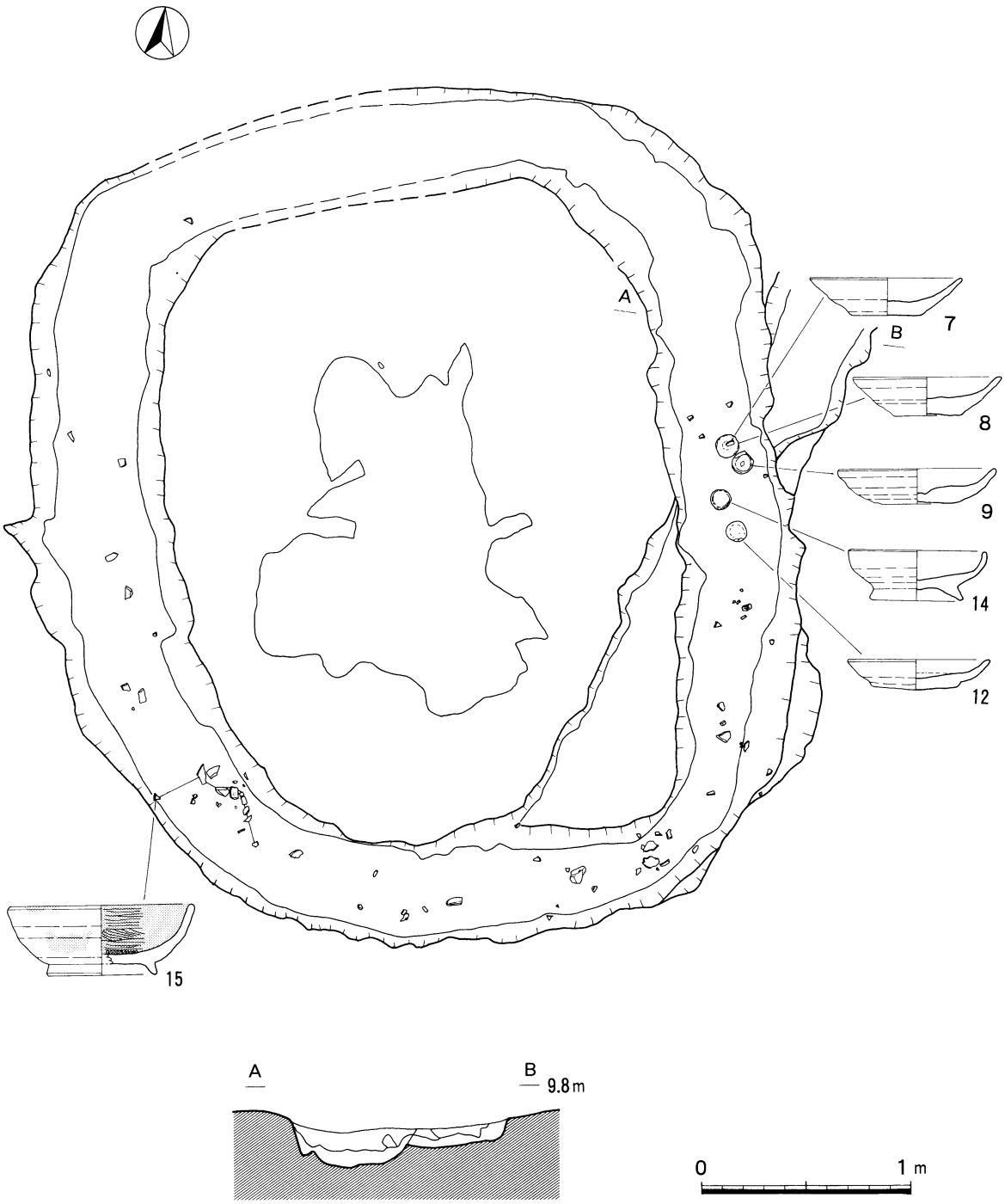
17～19は，黒色土器B類の埦である。17・18は，小埦である。17は，体部が内湾しながら立ち上がり，口縁部付近で外反する。内外面に横位のミガキがみられるが，特に外面はミガキが粗く施されている。18は，内外面にミガキが施されている。19は，口縁部付近の破片である。内面に横位のミガキがみられる。外面も一部横位のミガキがみられるがローリングを受けているため詳細は不明である。

20は，焼塩土器の破片である。内面に布目圧痕が，外面に指頭圧痕が残る。

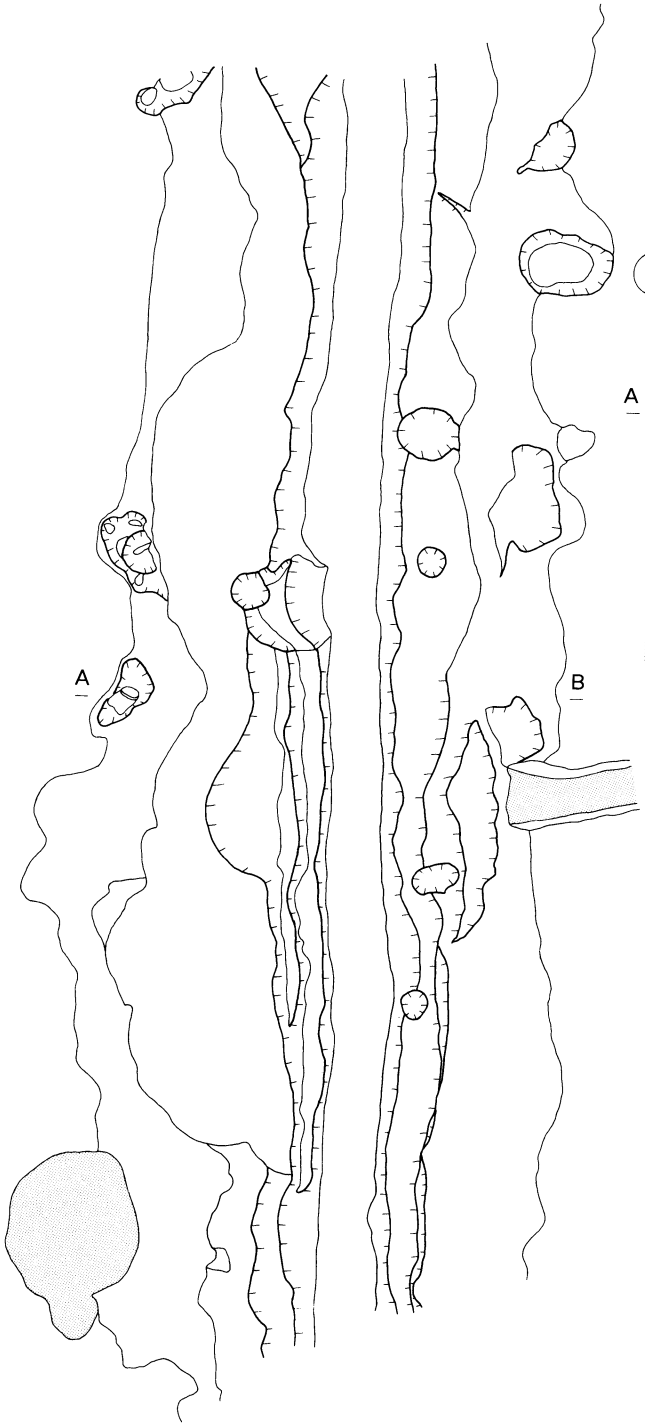
21は，土錘である。紡錘状のものに孔を貫通させた管状土錘である。

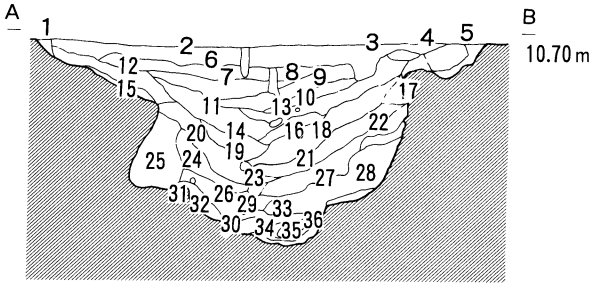


第12図　方形周溝出土遺物



第13図　方形周溝実測図

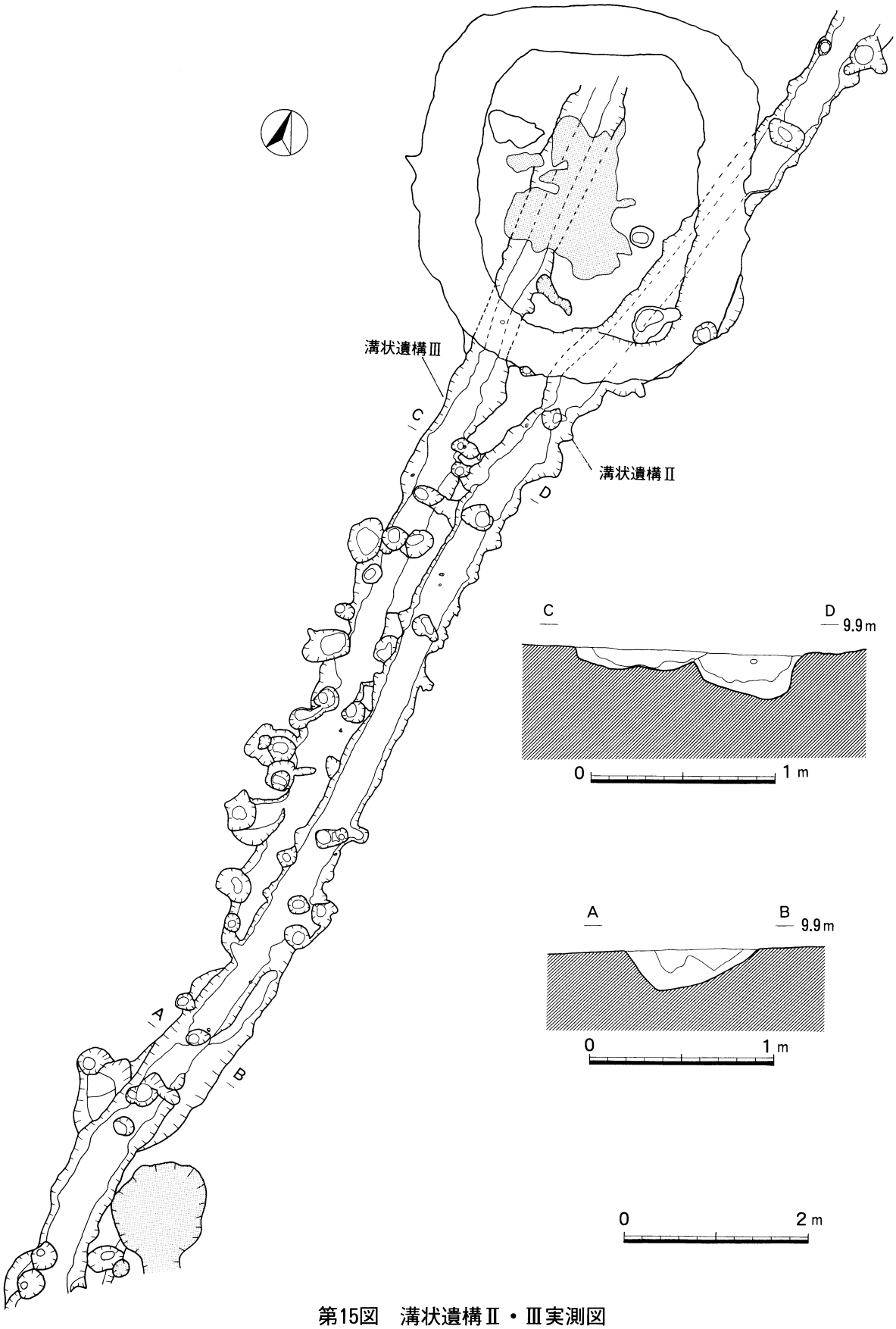




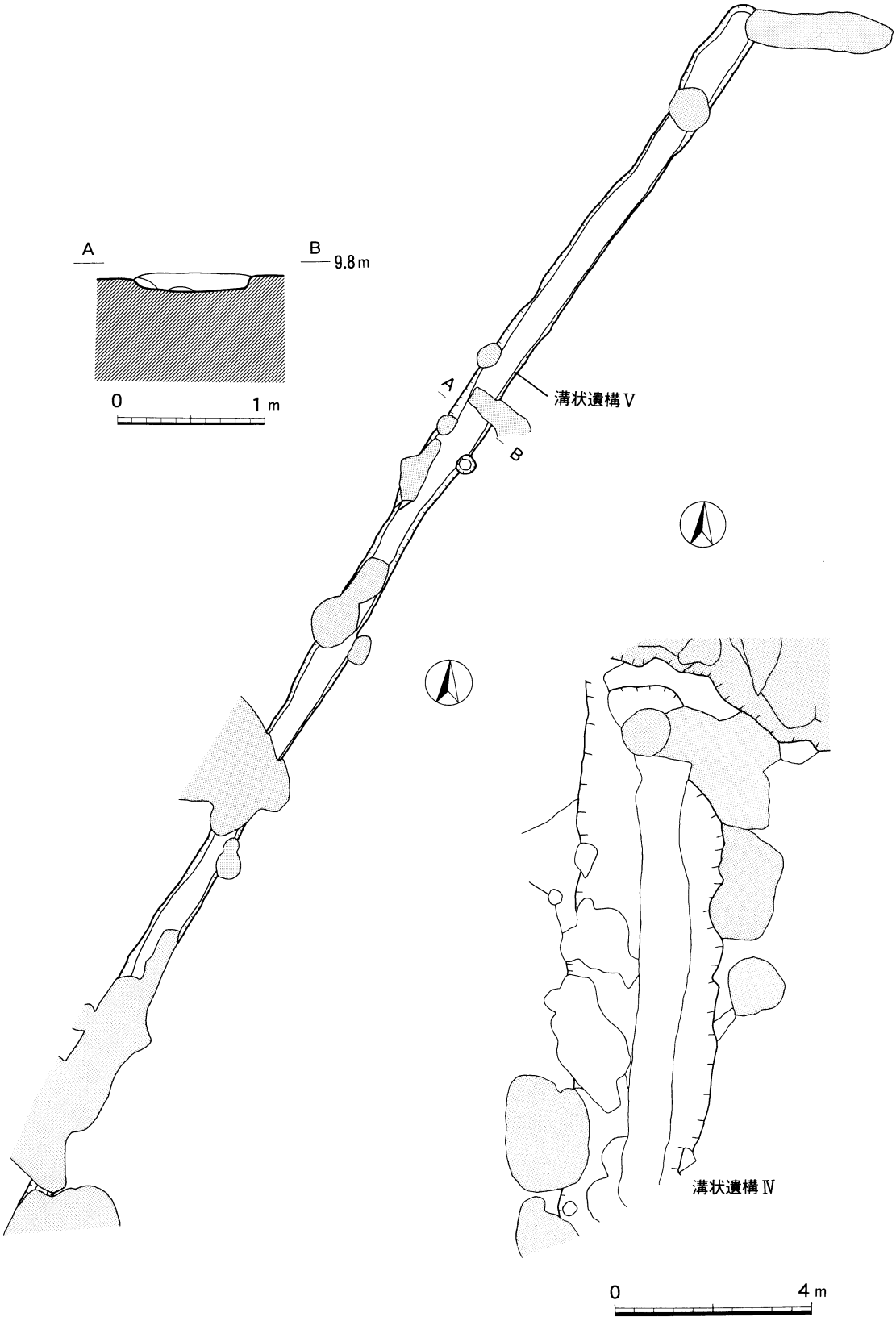
番号	色調ほか	番号	色調ほか
1	褐色・黄色砂混	20	褐色
2	淡黒褐色	21	褐色・黄色砂混
3	黒褐色	22	黄灰色砂
4	褐色・黄色砂少混	23	灰色砂
5	褐色・黄色砂多混	24	灰褐色
6	褐色	25	淡褐色・黄色砂少混・黄灰色砂多黒色土少混・黒褐色ブロック少混
7	褐色・灰色砂混		
8	灰褐色・黄色砂多混 黒褐色土ブロック極少混		
		26	褐色
9	灰褐色・砂質 黒褐色土ブロック少混	27	灰白色砂・黒色土混 軽石混
10	淡褐色・やや砂質	28	灰色砂
11	褐色	29	灰色砂
12	暗褐色	30	褐色
13	褐色・砂質・黄灰色砂混	31	灰褐色 黒色土小ブロック混
14	暗褐色・黄色砂少混 黒褐色小ブロック少混	32	灰白色砂 黄色砂ブロック混
15	褐色・黄色砂少混 黒褐色小ブロック少混	33	灰白色砂
16	褐色・やや砂質	34	黒褐色・粘質
17	淡褐色・灰色砂多混	35	灰褐色・粘質 灰色砂少混
18	淡褐色		
19	黄色砂	36	灰色砂・黄色砂少混

溝状遺構Ⅰの埋土

第14図　溝状遺構Ⅰ実測図



第15図　溝状遺構Ⅱ・Ⅲ実測図



第16図　溝状遺構Ⅳ・Ⅴ実測図

②溝状遺構（第14図～第16図）

溝状の遺構は，大型のものが２条。幅が狭く浅いものが３条検出された。溝の埋土中からは，主に古代の遺物が出土しているが，一部古墳時代や中世の遺物も混入している。

溝状遺構Ⅰ（第14図）

Ｃ・Ｄ－３区で，検出された。ほぼU字状を呈しており，南北方向に調査区を約11m横切り，調査区域外へ続いている。検出面で幅約3.5～４ｍ，下場は幅約50cmを測る。深さは165cmを残す。

溝状遺構Ⅰ出土遺物（第17図）

溝状遺構Ⅰからは，約10点の遺物が出土している。小破片を除き，６点を図化し掲載した。

22は，成川式土器の甕の胴部である。８mm幅の粘土紐を貼り付けており，細いヘラ状の工具で刻み目が施されている。

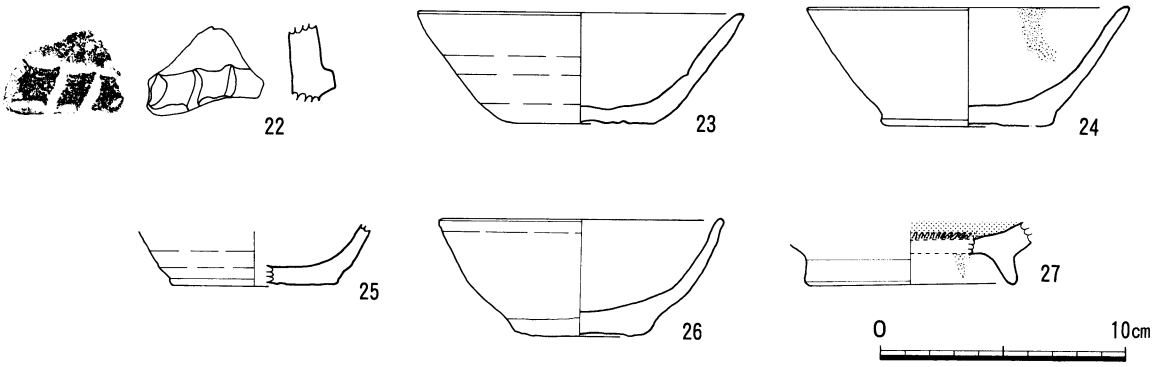
23～26は，土師器の坏である。底部切り離しは，全てヘラ切りである。

23は，体部がほぼまっすぐにのびる。底部周辺の外面にヘラ状の工具で削った痕跡が残る。ローリングを受けている。

24～26は，円盤状の底部を有する。

24は，体部が底部から1.5cmほど上部で段を有し，そこから，ほぼまっすぐにのびる。25は，体部が底部から１cmほど上部で段を有している。ローリングを受けている。26は，体部の立ち上がりに明確な段を有する部分と，なだらかに立ち上がる部分がある。底部周辺の外面にヘラ状の工具で削った痕跡が残る。

27は，黒色土器Ａ類の底部付近である。残存部は丁寧な調整が施されている。ローリングを受けている。



第17図　溝状遺構Ⅰ出土遺物

溝状遺構Ⅱ（第15図）

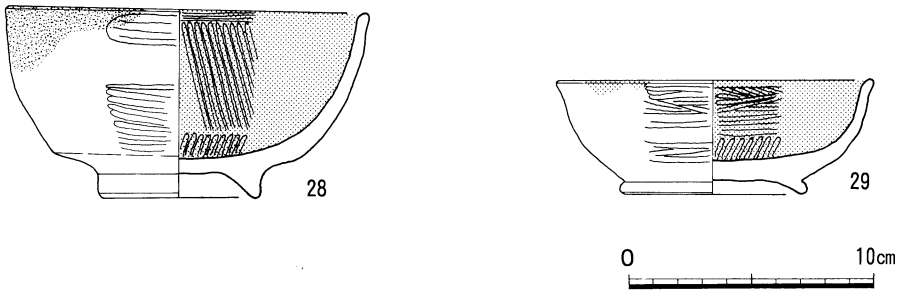
Ｃ－４区とＤ－３・４区で検出された。ほぼ逆台形状を呈しており，南北方向に調査区を約16m横切り，調査区域外へ続いている。ほぼ同一方向に溝状遺構Ⅲが検出されており，南側では，ほぼ重なっている。検出面で幅約40～50cm，下場は幅約30cmを測る。深さは30cmを残す。周溝と溝状遺構Ⅲに切られている。深さ約20～40cmのピットが溝内や溝に沿う形で検出されている。

溝状遺構Ⅱ出土遺物（第18図）

溝状遺構Ⅱから出土した遺物で，図化できたものは黒色土器A類の椀が2点である。

28は，高台が横に張り出す。体部は横に張り出してから屈曲し，ゆるやかに内湾しながらのびる。口縁部付近でわずかに段を有し，外反している。内面は，剥落がはげしい。29は，短い高台が横に張り出す。体部はゆるやかに内湾しながらのびる。内面は底部ではランダムな方向に，上部では横位のミガキが施されている。

28は，溝状遺構Ⅱ内のピットから出土した。29は，小片1点が28と同じピット内から出土し，溝外の出土遺物と接合した。



第18図　溝状遺構Ⅱ出土遺物

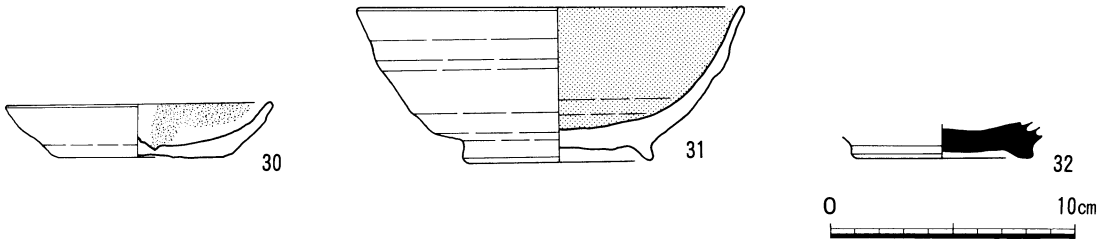
溝状遺構Ⅲ（第15図）

D－3・4区で検出された。南北方向に調査区を約10m横切り，調査区域外へ続いている。南側では溝状遺構Ⅱと重なっている。検出面で幅約40～70cm，下場は幅20～40cmを測る。深さは15cmを残す。溝状遺構Ⅱを切っている。

溝状遺構Ⅲ出土遺物（第19図）

溝状遺構Ⅲから出土した遺物で，図化できたものは土師器皿，黒色土器A類，須恵器高台付坏各1点である。

30は，土師器皿である。円盤状の底部を有しており，体部は内湾しながらのびて，口縁部でやや外反する。内面底部中央部がくぼんでいる。内面にススが付着している。ローリングを受けている。31は，黒色土器A類である。高台は，接地面に斜位のナデ調整が施されている。体部は内湾しながらのびて，口縁部でやや外反する。内面は見込み部分にはランダムな方向からのミガキが施されており，上部は横位を基本とするミガキが施されている。体部外面にもミガキが施されているが，密ではない。32は，須恵器の高台付坏の底部である。高台はやや横に張り出し，接地面は幅5㎜の平坦面を有する。高台と体部の境界に沈線が1条廻っている。



第19図　溝状遺構Ⅲ出土遺物

溝状遺構Ⅳ（第16図）

D－14・15区で検出された。ほぼ逆台形状を呈しており，南北方向に調査区を約10m横切るが，北側で後世の撹乱によって破壊されている。検出面で幅約３ｍ，下場は幅約１ｍを測る。深さは1.1ｍを残す。

溝状遺構Ⅳ出土遺物（第20図）

溝状遺構Ⅳから出土した遺物は，土師器，須恵器，土錘，瓦質や備前系の擂鉢等である。古代の遺構とした時代認定にそぐわない遺物も混入しているが，35以外は，床面から40cm以上高い位置からの出土であり，必ずしも遺構に共伴するものではない。遺構の存続期間をある程度示すと思われるため掲載することとした。

33は，成川式土器の台付鉢である。脚台の基部に貼り付けた際の横位の調整痕が残る。

34・35は，土師器坏である。底部切り離しは，ヘラ切りである。34は，体部がまっすぐにのびる。外面底部付近に５㎜程の幅で削りが施されている。ローリングを受けている。35は，残存部では体部がまっすぐに立ち上がっている。全体に丁寧な調整が施されている。溝状遺構Ⅳの床面近くからの出土である。

36は，土師器埦の底部付近である。高台は，やや横に張り出す。体部は，残存部ではほぼまっすぐに立ち上がる。ローリングを受けている。

37は，土師器の黒色土器Ａ類埦である。底面の中央部が高台貼り付けの際の調整によって盛り上がっている。ローリングを激しく受けている。

38・39は，須恵器甕の胴部である。38は，外面に格子叩き目，内面に同心円状の当て具痕が残る。内面は当て具痕の上からナデ調整が施されている。39は，外面に格子叩き目，内面に同心円状と平行状の当て具痕が混在している。

40は，土錘である。紡錘状のものに孔を貫通させた管状土錘である。

41は，器物の脚部と思われる粘土塊である。上部がひらいており，貼り付けの際に押しひろげられたものと思われる。

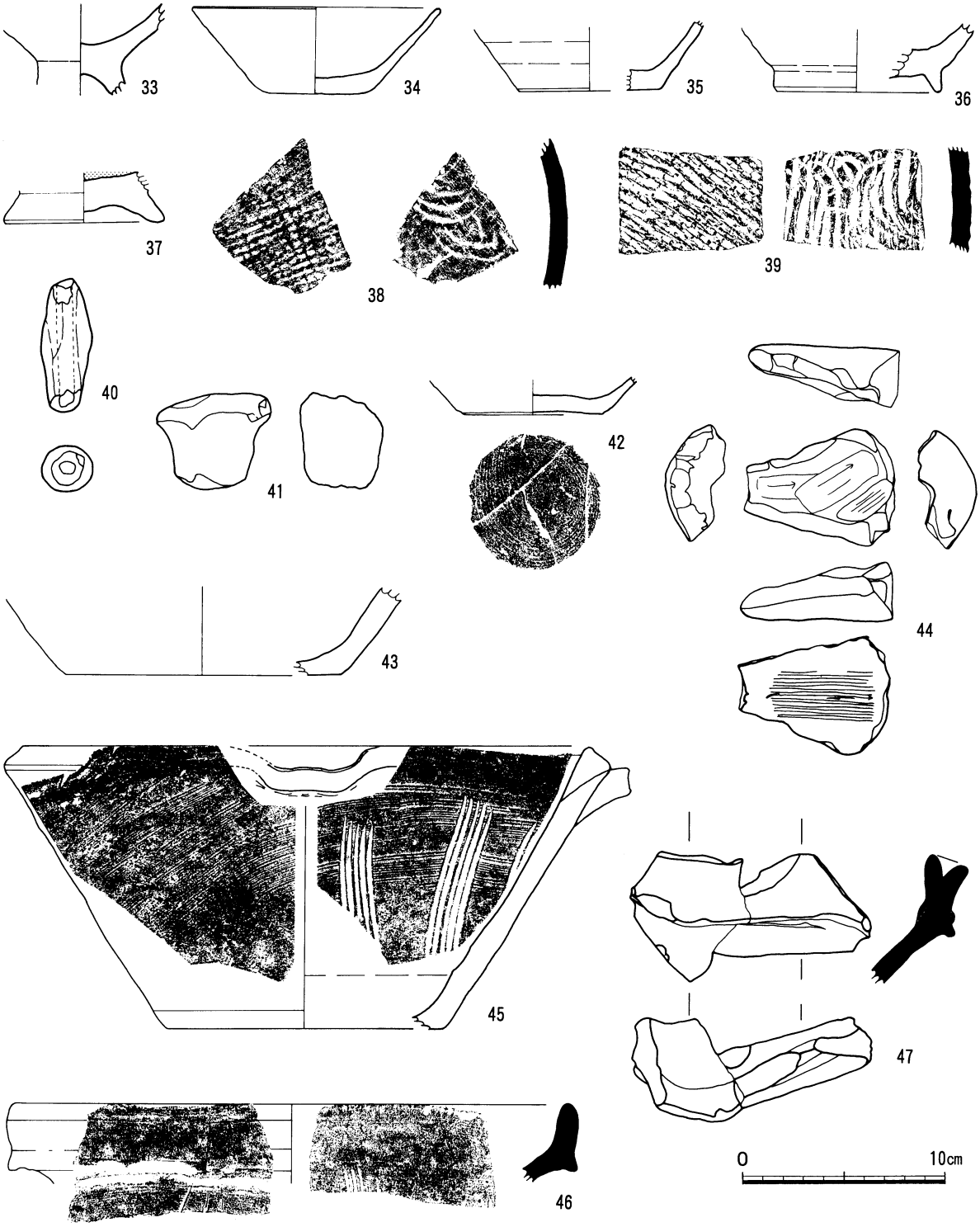
42は，底部切り離しが糸切りの土師器坏である。円盤状の底部を有している。体部はゆるやかに立ち上がったあと外反するようであるが，上部が欠損しているため詳細は不明である。

43は，瓦質の鉢である。内外面にナデ調整が施されている。擂鉢である可能性もあるが，残存部には櫛目がみられない。

44は，鞴の羽口である。

45は，瓦質の擂鉢である。口縁部外面に調整が施され屈曲している。注口は，口縁部をそのままひろげて作り出されている。櫛目は，上部に横方向にハケ目を施し，のちに口唇の下約２～３㎝のところまで施される。外面には斜位のハケ目がみられる。

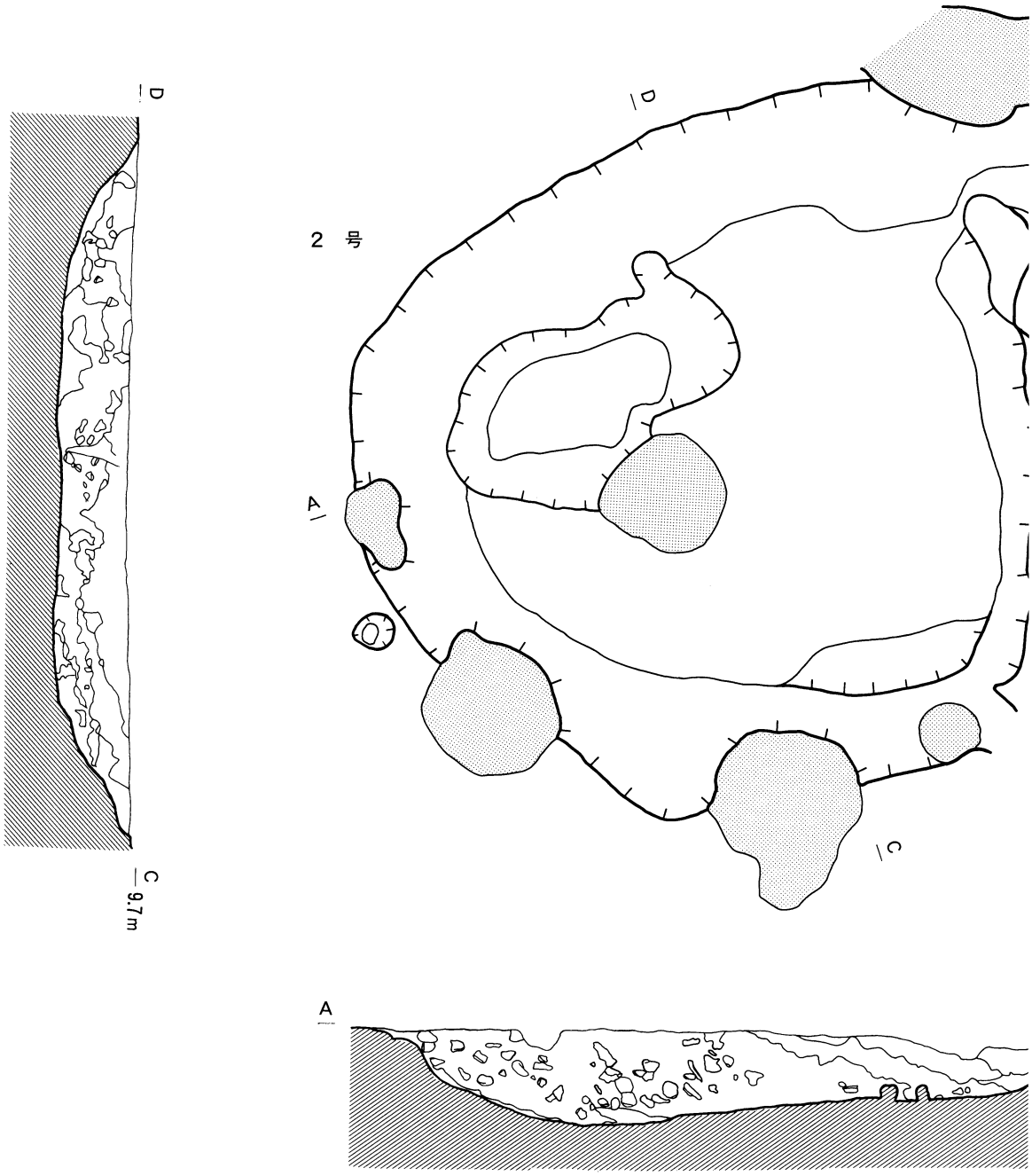
46・47は，備前系の擂鉢である。46は，胴部の上部で屈曲してほぼ直に立ち上がる。屈曲部が紐状に盛り上がり，わずかに下に垂れる。櫛目は1.6㎝の幅に６本施されているのが，確認できる。釉は外面の口唇部から屈曲部まで施されている。47は，注口部である。釉は外面の口唇部から屈曲部までと注口部の内面に施されており，施釉されている部分には黄褐色の灰が付着している。



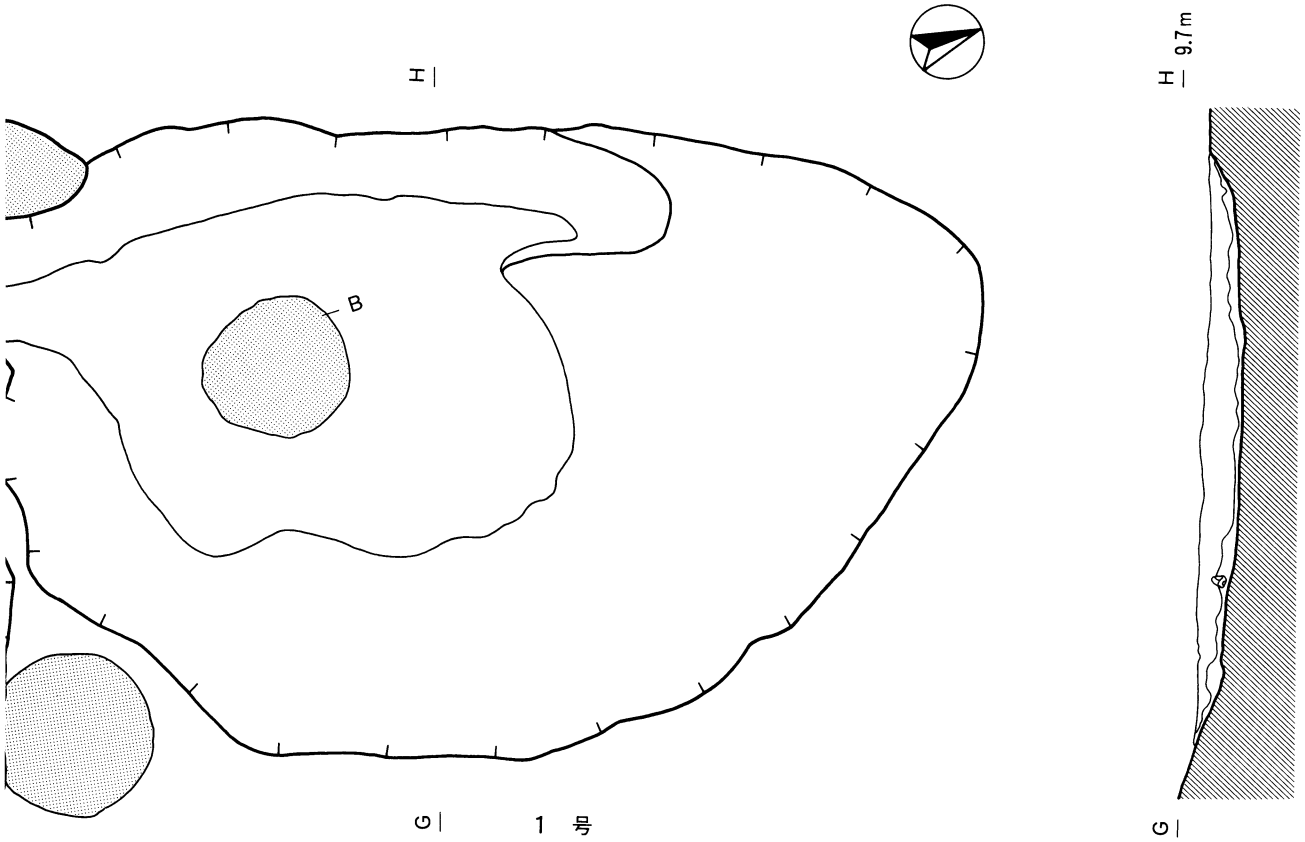
第20図　溝状遺構Ⅳ出土遺物

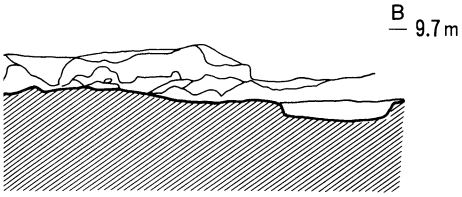
溝状遺構Ⅴ（第16図）

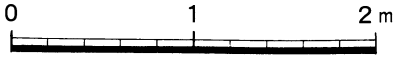
D－16～19区とE－16区で検出された。北東－南西方向に調査区内に約30m残存する。北東側の先端部は深さが15cm残るが，その先は途切れている。南西部は，調査区外へと続いている。検出面で幅約60～70cm，下場は幅約40～60cmを測る。深さは15cmを残す。



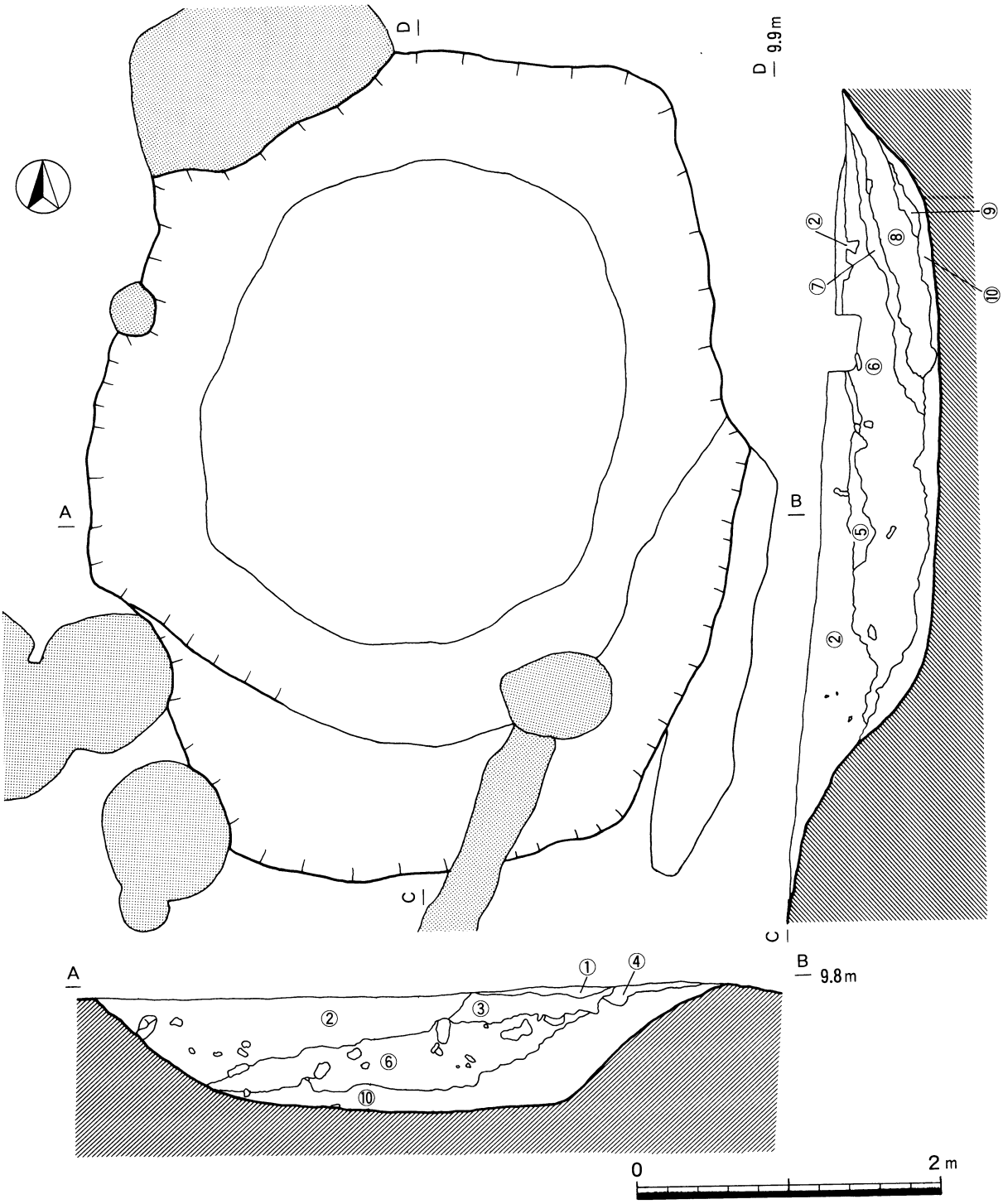
第21図







1・2号竪穴実測図



番号	色　調	備　　考
①	暗黄黒褐色土	2㎜程の黄色の砂を含む。
②	黒 褐 色 土	やや硬くしまり，軽石とブロック状の硬い土を含む。
③	黒 褐 色 土	2㎜程の黄色の砂を含む。ややもろい。
④	黄 褐 色 土	2㎜程の砂を多量に含む。
⑤	暗黄橙色砂層	⑥よりしまっている。
⑥	暗黄橙色砂層	2㎜程の粒子が主体。くずれやすく，サラサラしている。
⑦	暗黄褐色砂層	くずれやすい。
⑧	暗黄橙色砂層	⑥とほぼ同じ。
⑨	暗黄橙色砂層	⑧よりしまっている。
⑩	黒 褐 色 土	やや硬質でしまっている。粘性を帯びている。

3号竪穴の埋土

第22図　3号竪穴実測図

③竪穴（第21図～第22図）

D－10区と11区で竪穴に掘り込まれた遺構が3基検出された。いずれも柱穴等は検出されていないが，その形状から竪穴住居跡の可能性がある。埋土中からは，主に古代の遺物が出土しているが，一部中世の遺物も混入している。

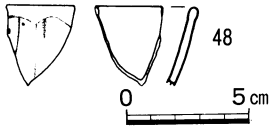
1号竪穴（第21図）

1号竪穴は，南北方向に長軸を有する略楕円形を呈している。検出時に北側の傾斜がゆるやかであったため，遺構認定が遅れてしまい一部断面を残すことができなかった。床面のほぼ中央部は後世の撹乱のために破壊されている。南側で2号竪穴を切っている。

1号竪穴出土遺物（第23図）

1号竪穴からは，青磁が出土している。

48は，青磁碗である。体部外面に蓮弁文が施されている。



第23図　1号竪穴出土遺物

2号竪穴（第21図）

2号竪穴は，北側が長く南側が短い台形がややふくらんだプランを有する。長軸はほぼ南－北である。床面南西部に1.9×1.3m程の不定形な掘り込みがある。検出面では，長径約4.2m，短径は北側で約4.1mを測り，床面では，長径約3.2m，短径は北側で約2.4mを測る。深さは約60cmを残す。2号竪穴は北側壁面の立ち上がりの途中で1号竪穴に切られている。

2号竪穴出土遺物（第24図）

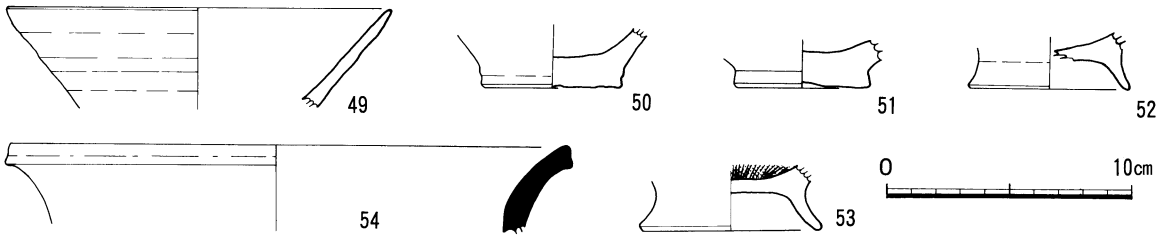
2号竪穴の出土遺物で図化できたものは，土師器，須恵器等である。

49は，土師器坏である。底部付近は欠損しているが，残存部の体部はほぼまっすぐに立ち上がっている。

50・51は，充実高台を有する土師器埦の底部である。底部切り離しはヘラ切りである。

52は，土師器埦の底部である。高台は横に張り出している。ローリングを受けている。53は，土師器の黒色土器A類埦である。高台は比較的長く，横に張り出している。ローリングを受けている。

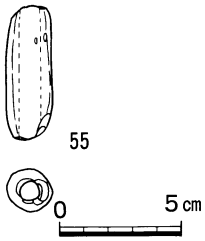
54は，須恵器甕の口縁部である。口唇部直下を調整により盛り上がらせている。



第24図　2号竪穴出土遺物

3号竪穴（第22図）

3号竪穴は，長方形を基本プランとして少々ふくらむ楕円形を呈している。長軸はほぼ南－北である。検出面では，長径約5.4m，短径約4.2mを測り，床面では，長径約3.2m，短径約2.7mを測る。深さは約80cmを残す。



第25図　3号竪穴出土遺物

３号竪穴出土遺物（第25図）

３号竪穴では，約20点の土師器の破片等が出土しているが，いずれも小片のため，図化できたのは土錘１点のみであった。

55は，紡錘状のものに孔を貫通させた管状土錘である。

ピット群（第10図）

ピット群がD・E－４～７区，D－11・12区，D－17区の３か所で検出された。建物の柱穴とも考えられるが，規則性を見出すことができなかった。

（３）出土遺物

古代の遺物としては，９世紀～10世紀のものと思われる土師器・須恵器等が出土している。包含層は削平されている部分が多いが，表土層中からの遺物も多数採集しているので，報告することとした。

①土師器（第26図～第32図）

土師器の坏，埦，皿，甕，黒色土器等が出土している。

ａ）坏（第26図・第27図）

平底の土師器を「坏」として分類した。南九州に独特な円盤状の底部を持つ土師器も坏に分類した。円盤状の底部を持つ坏と形態上類似しているものに充実高台の埦があるが，両者を分類するについては，高台を作り出そうという意図が観察されるかどうかを基準とした。

坏は，完形に復元できたものは56・57の２点のみであり，口径が復元できる大きさの口縁部等の破片も出土していない。そのため底部の形態（円盤状の底部の有無）によって２種類に分類した。

・**坏Ⅰ類**　円盤状の底部を有していないもの。

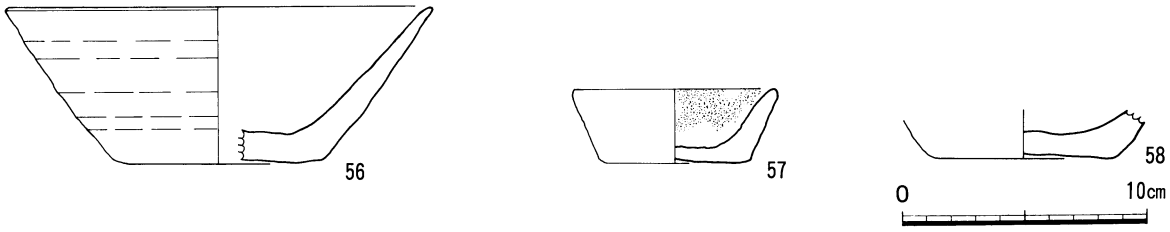
・**坏Ⅱ類**　円盤状の底部を有するもの。

底部の切り離しは，全てヘラ切りであると思われるが，底面が調整されているものや，一部についてはローリングを激しく受けているものがあるために確認できないものもある。ローリングは程度の差はあるが，全ての坏にみられる。

・坏Ⅰ類

56～58は，円盤状の底部を有していないタイプである。56・58は，表土からの出土である。

56は，底部側面をヘラ状の工具で調整しており，ケズリ痕が残る。ケズリの後に底面の調整を行っており，胎土が底部側面にはみ出している。体部が直線的に立ち上がる。57は，いわゆる箱型を呈している。内面にススが付着している。58は，ナデ調整のみで成形されている。上部が欠損しており詳細は不明である。



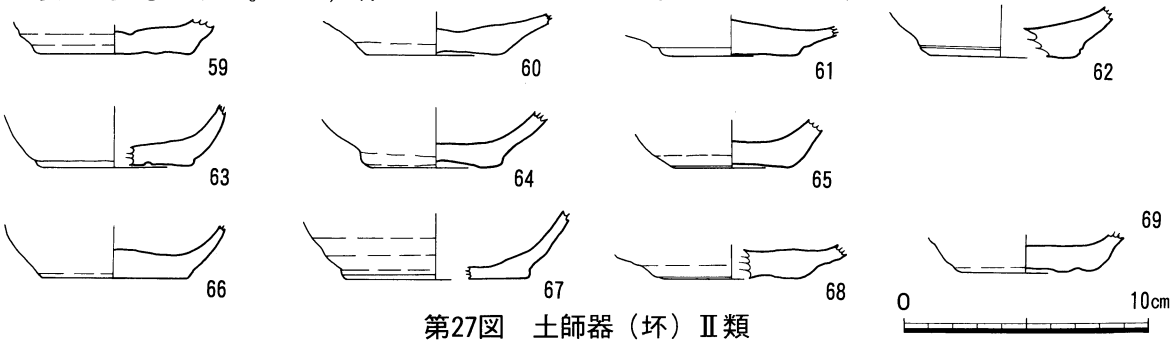
第26図　土師器（坏）Ⅰ類

・坏Ⅱ類

59～69は，円盤状の底部を有するタイプである。いずれも体部が欠損しているため上部が不明瞭である。66～69は，表土層中からの出土である。

59は，底面の調整が粗く回転ヘラ切りの痕跡が残る。見込みの中心部が若干くぼんでいる。60は，底面の調整が粗く施されており，植物繊維の圧痕が残っている。見込み中心部が盛り上がり，そこから右回りで引き出されたことを示す渦状のくぼみが残る。61は，底面がくぼみ，その分見込みの中央部が盛り上がっており，ヘラ切りの際にゆがんだものと思われる。体部の立ち上がり部分をヘラ状の工具で調整しており，段を有している。62は，体部の立ち上がり部分に沈線が廻っている。63は，底部付近や底面の調整が，比較的丁寧に施されている。64は，内外面に植物繊維の圧痕が残っている。65は，体部の立ち上がり部分をヘラ状の工具で調整しており，ケズリ痕が残る。

66は，内面に一部橙色の濃い部分があり，顔料が付着していた可能性がある。67は，体部の立ち上がり部分を丁寧にナデ調整しており，段を有する。68は，体部が円盤状の底部からふくらんで立ち上がる。69は，特にローリングが激しい。66・68・69は，底面の調整が粗い。



第27図　土師器（坏）Ⅱ類

b）椀（第28図・第29図）

高台を有する土師器を「椀」として分類した。南九州に独特な充実高台を有する土師器も椀として分類した。ただし，黒色土器については，別に分類している。

椀は，完形に復元できるものは出土していない。口径が復元できる大きさの口縁部等の破片も出土していない。そのため底部の形態（高台・充実高台）によって2種類に分類し，高台の形態によって3種類に細分した。

・椀Ⅰａ類　比較的短くどっしりとした高台を有する。

・椀Ⅰｂ類　比較的長く「ハ」の字にひらいた高台を有する。

・椀Ⅰｃ類　短くつまみだしたような高台を有する。

・椀Ⅱ類　充実高台を有する。

76以外のものは，全てローリングを受けている。

・椀Ⅰａ類

70～74は，短いどっしりとした高台を有するタイプである。72～74は，表土層の遺物である。

70は，高台内側の基部が調整によってくぼんでいる。71は，高台内側の基部から底面になだらかに接続している。72は，高台内側の基部が調整によってくぼんでいるようであるが，欠損部が多いため詳細は不明である。73は，高台内の中央部が無調整で，回転ヘラ切りの痕跡が残

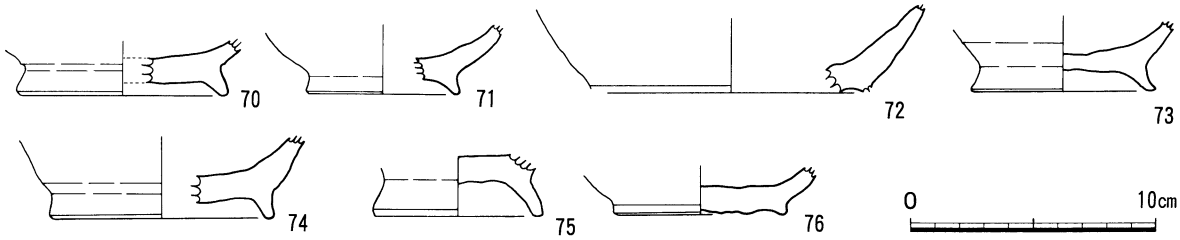
る。外面は丁寧な調整が施されている。74は，高台外面をナデ調整しており，段を有する。

・椀Ⅰb類

75は，比較的長く「ハ」の字にひらいた高台を有するタイプである。高台内側中央部が盛り上がり，回転ヘラ切りの痕跡が残る。表土層中からの出土である。

・椀Ⅰc類

76は，短い高台を有する椀である。貼り付けを施している痕跡はみられるが，高台内側の基部がナデ調整でくぼんでいるためかろうじて高台と認識できる。高台中央部は，粗い調整が施され高台とほぼ同程度に盛り上がっている。表土層中からの出土である。

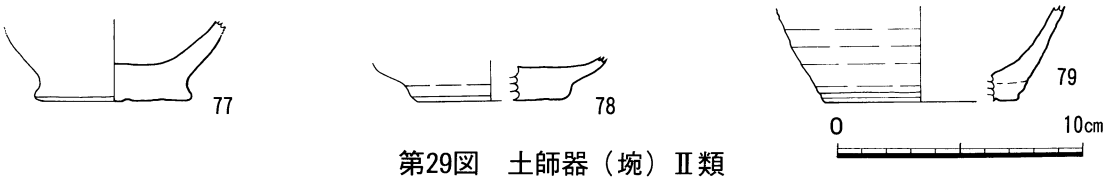


第28図　土師器（椀）Ⅰ類

・椀Ⅱ類

77～79は，充実高台を有するタイプである。79は，表土層中からの出土である。

77・78は，いずれも底面に回転ヘラ切りの痕跡が残る。77は，充実高台部の下部が広がっている。高台側面にナデ調整の痕跡が認められることから，意識的に成形されている。78は，充実高台がほぼ垂直に立ち上がる。79は，底部側面に強いナデ調整が施され，段を有する。体部は，上部が欠損している。残存部は，まっすぐにのびる。



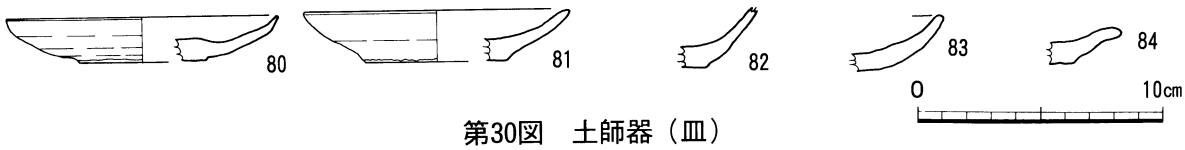
第29図　土師器（椀）Ⅱ類

c）皿（第30図）

口径に対して，器高の低いものを「皿」として分類した。底部切り離しは回転ヘラ切りである。84は，表土層中からの出土である。

皿は，２点については口径の復元を行っているが，残存率は最大で１／６程であるため誤差が生じていると思われる。

80は，体部が横にひらいて口縁部付近で立ち上がる。底部が円盤状を呈しているようにみえるが，底部切り離しの際の調整が粗いためはみだした胎土の可能性もある。小破片のため詳細は不明である。81は，体部が横にひらき中央付近でやや立ち上がる。ローリングが激しい。82は，体部が緩やかに立ち上がる。底部周辺は丁寧に調整が施されている。83は，体部が回転のたびに徐々に立ち上げられている。84は，体部が口縁部で外反する。

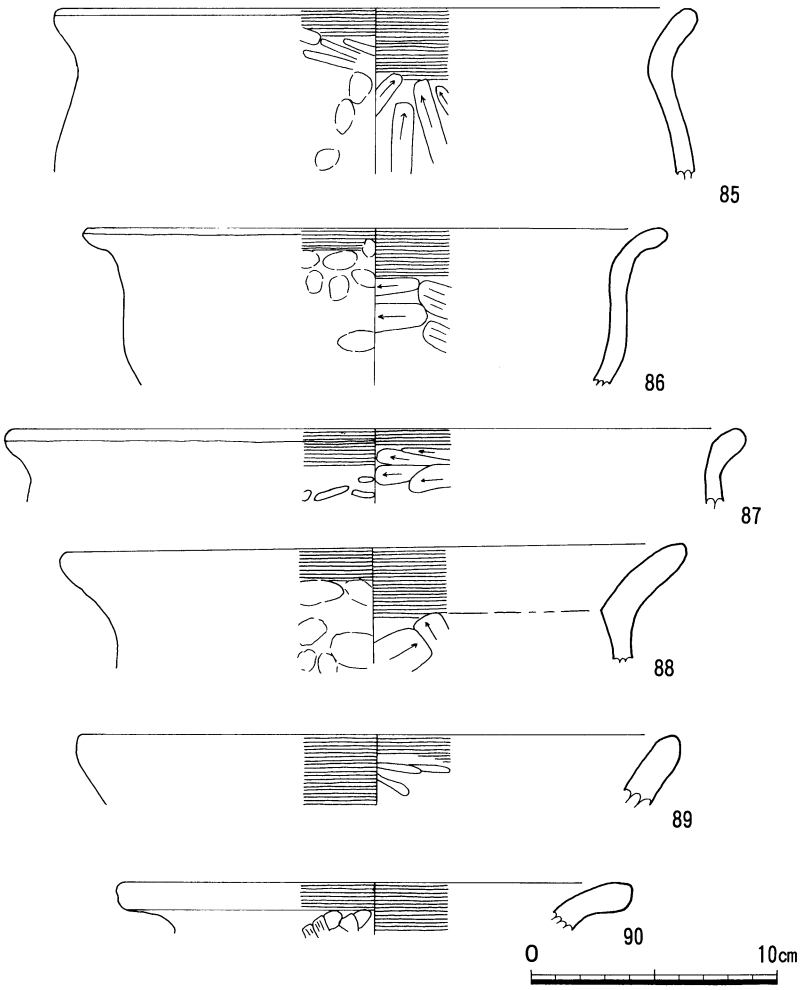


第30図　土師器（皿）

d）甕（第31図）

甕については，底部まで復元できるものは出土していない。全てについて口径を復元しているが，残存率は最大で１／９程であるため誤差が生じていると思われる。85・86は，胴部がわずかに残存しているが，他は小破片のため詳細は不明である。

85は，胴部が口縁部の下で内湾し，口縁部で外反している。内面は，屈曲部より下位は縦位のケズリが施され，上位は横位のナデ調整が施されている。外面は，屈曲部より下位は横位の刷毛目が施され，上位は横位のナデ調整が施されている。外面にススが付着している。86は，胴部がひらきながらのびて，口縁部で外反する。短い胴部になると推定される。内面は，屈曲部より下位は横位のケズリが施され，上位は横位のナデ調整が施されているが，一部ミガキが施されている。外面は，横位のナデ調整が施されている。屈曲部の外面に指頭圧痕が残る。外面に一部ススが付着している。87は，内面は，横位のミガキが施されている。外面は，横位のナデ調整が施されている。外面にススが付着している。88は，内面は，屈曲部より下位はランダムな方向のケズリが施され，上位は横位のナデ調整が施されている。外面は，横位のナデ調整が施されている。89・90は，内外面とも横位のナデ調整が施されている。90は，口縁部で大きく外反し，口唇部で直に立ち上がる。



第31図　土師器（甕）

e）黒色土器（第32図）

黒色土器は，A類の椀が出土している。完形に復元できたものは101のみであるが，底部や体部の形態から以下の5種類に分類した。

Ⅰ類　充実高台を有しているもの。

Ⅱ類　高台が短く丁寧な調整が施され，接地面に安定感がある。体部は丸みをもっているもの。

Ⅲ類　高台が長く「ハ」の字にひらくもの。

Ⅳ類　高台が長く「ハ」の字にひらくもの。口径が小さいものである。

Ⅴ類　高台が短く「ハ」の字にひらく，接地面が丸みを帯びているもの。

Ⅰ類（91）

91は，充実高台を有しているタイプである。高台が，ほぼ直に約0.8cm立ち上がり，体部がひらいていく。底部側面には，切り離しの際にはみでた胎土が残る。底面には粗いナデ調整が施されている。ランダムな方向のミガキが施されている。

Ⅱ類（92・93）

高台が短く丁寧な調整が施され，接地面に安定感がある。体部は丸みをもっているタイプである。

92は，高台がほぼ直に立ち上がり，丁寧な調整が施されている。内面は剥落が激しく，ミガキの方向は不明である。93は，高台がほぼ直に立ち上がり，周辺には丁寧な調整が施されている。器壁が，底部中央部付近で0.4cmと薄い。内面には放射状のミガキが施されている。

Ⅲ類（94～100）

高台が長く「ハ」の字にひらくタイプである。95・99・100は，高台が欠損しているが，体部の形状から判断して分類した。

94は，体部が緩やかに内湾しながらのびる。内面には，横位を基本とするミガキが施されている。ローリングが激しい。Ⅱ層と表層から出土した土器片が接合している。95は，体部がゆるやかに内湾しながらのびて，口縁部付近でわずかに外反する。内面には，横位のミガキが施されている。外面も一部横位のミガキが施されている。96・97は，高台内面は丁寧な調整が施されているのが認められるが，ローリングを受けており，内面の剥落が激しいため詳細は不明である。98は，高台内側の基部が調整によってくぼんでいる。中央部は粗い調整が施され，盛り上がっている。ローリングを激しく受けており，内面の剥落が激しいため詳細は不明である。99は，上部の破片である。内面は横位のミガキが施されている。外面も口唇部から1.5cm程下までは黒色を呈している。それより下部もススが付着しているが，色調がやや赤みがかっており，付着時期が異なると思われる。100は，口縁部でわずかに外反する。内面は，横位のミガキが施されている。

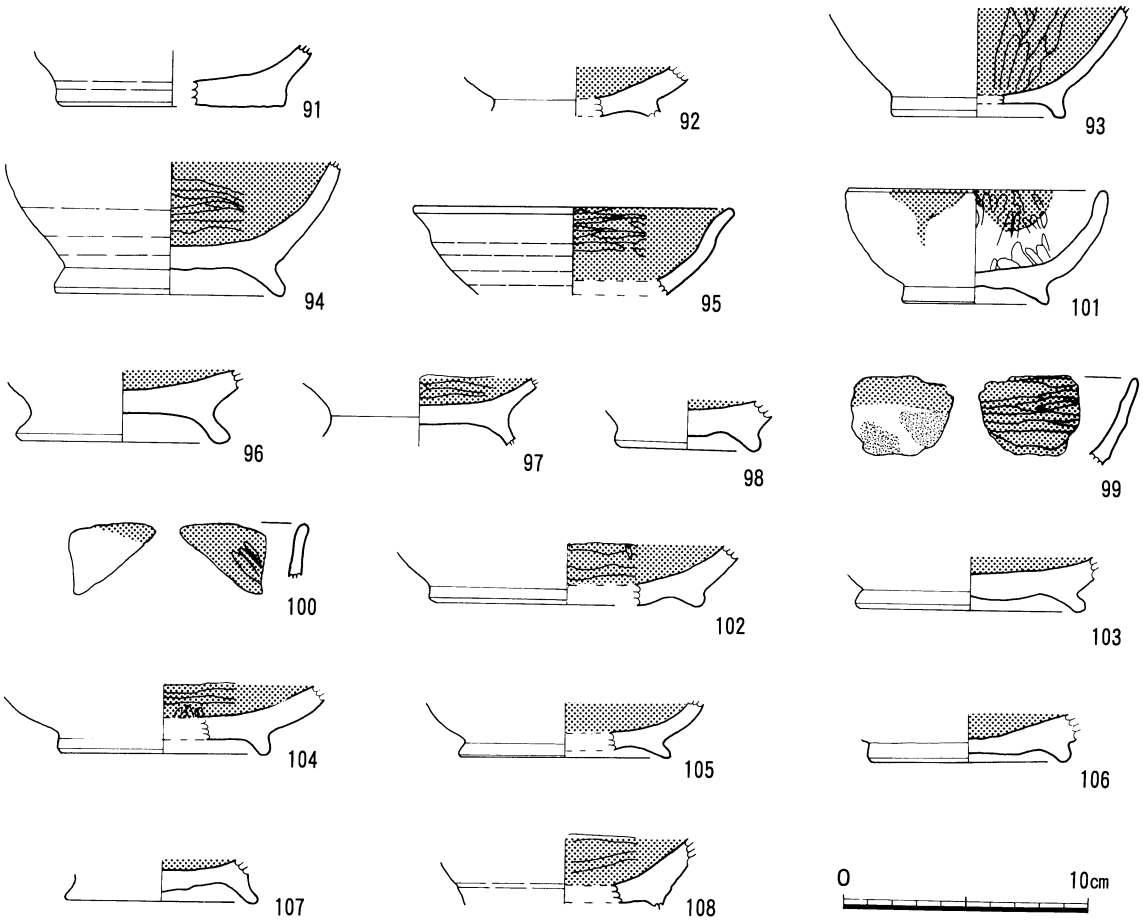
Ⅳ類（101）

101は，高台が長く「ハ」の字にひらくもの。口径が小さいタイプである。「小椀」である。体部は，ゆるやかに内湾しながらのびる。内面は，放射状にミガキが施されている。外面には，赤色顔料が施されていた痕跡が残り，ススが付着している。

V類（102～108）

高台が短く「ハ」の字にひらく，接地面が丸みを帯びているタイプである。口縁部まで復元できたものはない。

102は，高台内側の調整が粗く凹凸がみられる。高台は先端がローリングを受けており摩滅している。103は，高台内側の調整が粗く凹凸がみられる。外面の高台基部は，幅0.3cm程の工具で削り，形を整えている。内面の剥落が激しくミガキの方向は不明である。104は，高台内側は丁寧に調整が施されている。内面は見込み中央部は一方向のミガキが，周辺部は横位のミガキが施されている。105は，ローリングが激しい。外面の高台基部の調整に工具を用いている。106は，高台内の中央部は調整が粗く，ヘラ切りの際の痕跡が残る。高台周辺は丁寧に調整が施されている。内面は，ほぼ一方向へのミガキが施されている。107は，底面中央部が盛り上がっている。108は，内面の一部に横位のミガキが施されている。107・108は，ローリングが激しく，詳細は不明である。



第32図　黒色土器

②須恵器（第33図～第36図）

須恵器の坏，坏蓋，高坏，甕，壺等が出土している。

なお，須恵器については，Ⅱ層中から出土した遺物と表層中から出土した遺物を区別して掲載していない。出土遺物観察表に出土層位を記載しているので，参照願いたい。

a）坏（第33図）

109～111は平底の坏である。いずれも小破片で，底部周辺のみ残存している。

109は，底面に植物繊維の圧痕が残る。小壺の一部である可能性もある。110は，底面中央部に回転ヘラ切りの痕跡が残る。底面の縁辺部は調整が施され，若干くぼんでいる。111は，体部の立ち上がり部分に，底部切り離しの際にはみでた胎土が付着している。

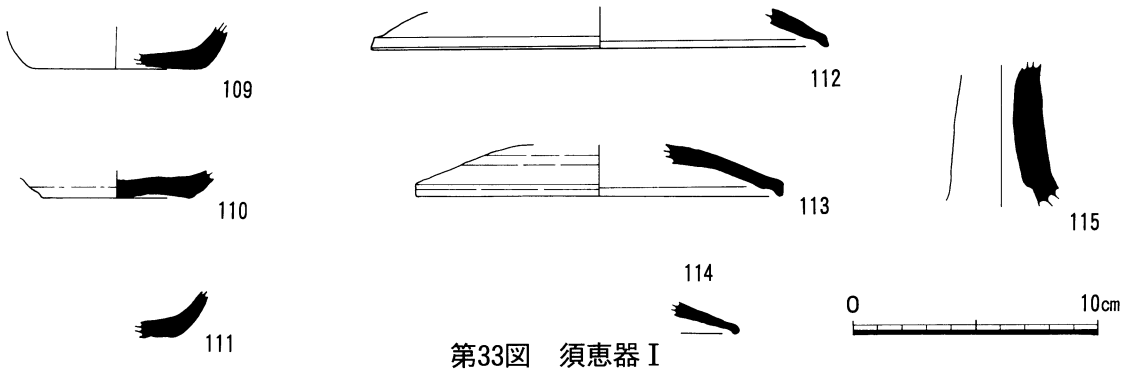
b）坏蓋（第33図）

112～114は，坏蓋である。いずれも小破片である。

112は，いわゆる「生焼け」の須恵器である。口縁部で外反し，口縁端の屈曲部は，やや外側にひらいている。113は，中心から約3㎝のところからゆるやかに下り，口縁部でやや外反し，屈曲する。内面の口縁端部が幅約0.4㎝の工具で調整されており，平坦になっている。114は，内面に黒色を呈するガラス質の粒が多数付着している。外面にはみられないので，焼成時に付着したものと考えられる。

c）高坏（第33図）

115は，高坏の脚部の一部である。褐色の表面の半分ほどが灰をかぶって白くなっている。



第33図　須恵器Ⅰ

d）甕（第34図・第35図）

116～134は，大甕の胴部である。小破片のため詳細な器形や部位は不明である。成形時の外面の叩き目と内面の当て具痕によって，以下のタイプに分類した。

・**格子－同心円タイプ**（116・117）

外面に格子叩き目，内面に同心円状の当て具痕が残るものである。

・**平行－同心円タイプ**（118～122）

外面に平行叩き目，内面に同心円状の当て具痕が残るものである。

・**格子－中間（同心円・平行）タイプ**（123～125）

外面に格子叩き目，内面に同心円状と平行状の当て具痕が混在しているものである。

・**平行－中間（同心円・平行）**タイプ（126・127）

外面に平行叩き目，内面に同心円状と平行状の当て具痕が混在しているものである。

・**格子－平行タイプ**（128～130）

外面に格子叩き目，内面に平行状の当て具痕が残るものである。

・**平行－平行タイプ**（131～134）

外面に平行叩き目，内面に平行状の当て具痕が残るものである。

・**格子－同心円タイプ**（116・117）

外面に格子叩き目，内面に同心円状の当て具痕が残るタイプである。胴部の中では比較的上部にあたると思われる。

116は，外面に4×2㎜程の格子叩き目，内面に2～3㎜の幅でくぼむ同心円状の当て具痕が，密に残る。断面は生焼けである。117は，外面は格子叩き目であるが，焼成時に白色の灰が目に詰まっている。内面は，1～2㎜幅でくぼむ同心円状の当て具痕が残る。

・**平行－同心円タイプ**（118～122）

外面に平行叩き目，内面に同心円状の当て具痕が残るタイプである。胴部の中では比較的上部にあたると思われる。

118は，外面に横位の平行叩き目，内面に半径約2.1㎝の当て具痕が残る。119は，外面にほぼ縦位の平行叩き目，内面に半径約2.0㎝の当て具痕が残る。生焼けである。120は，外面の下部に暗緑色の釉がかかり，黄褐色の灰がゴマ塩状に付着している。内面は，2～3㎜幅でくぼむ同心円状の当て具痕が残る。121は，外面に横位の平行叩き目が残るが，4条の縦位の凸線が残る。内面に半径約1.9㎝の当て具痕が残る。122は，外面に横位の平行叩き目が残り，一部叩き目に直交する方向にナデ消している。内面に半径約2.0㎝の同心円状の当て具痕が残る。生焼けである。

・**格子－中間（同心円・平行）タイプ**（123～125）

外面に格子叩き目，内面に同心円状と平行状の当て具痕が混在しているタイプである。胴部の最大径を示す部分の周辺にあたると思われる。

123は，外面に4×2㎜程の格子叩き目が残る。内面は，同心円状と平行状の当て具痕が混在しているが，密に入っているため切り合いがはっきりしない。124は，外面に5×2㎜程の比較的大きい格子叩き目が，1㎜程の深さで残る。内面には，上部に平行状の当て具痕を切って，同心円状の当て具痕が残る。125は，外面に黒褐色の釉がかかり，黄褐色の灰がゴマ塩状に付着している。内面は，上部に平行状の当て具痕を切って半径約1.6㎝の，同心円状の当て具痕が残る。

・**平行－中間（同心円・平行）タイプ**（126・127）

外面に平行叩き目，内面に同心円状と平行状の当て具痕が混在しているタイプである。胴部の最大径を示す部分の周辺にあたると思われる。

126は，外面にランダムな方向からの叩き目が残る。内面は，上部に平行状の当て具痕を切って半径約2.3㎝の，同心円状の当て具痕が残る。127は，外面は縦位を基本とした平行叩き目が残る。内面は，上部に平行状の当て具痕を切って，同心円状の当て具痕が残る。

・**格子－平行タイプ**（128～130）

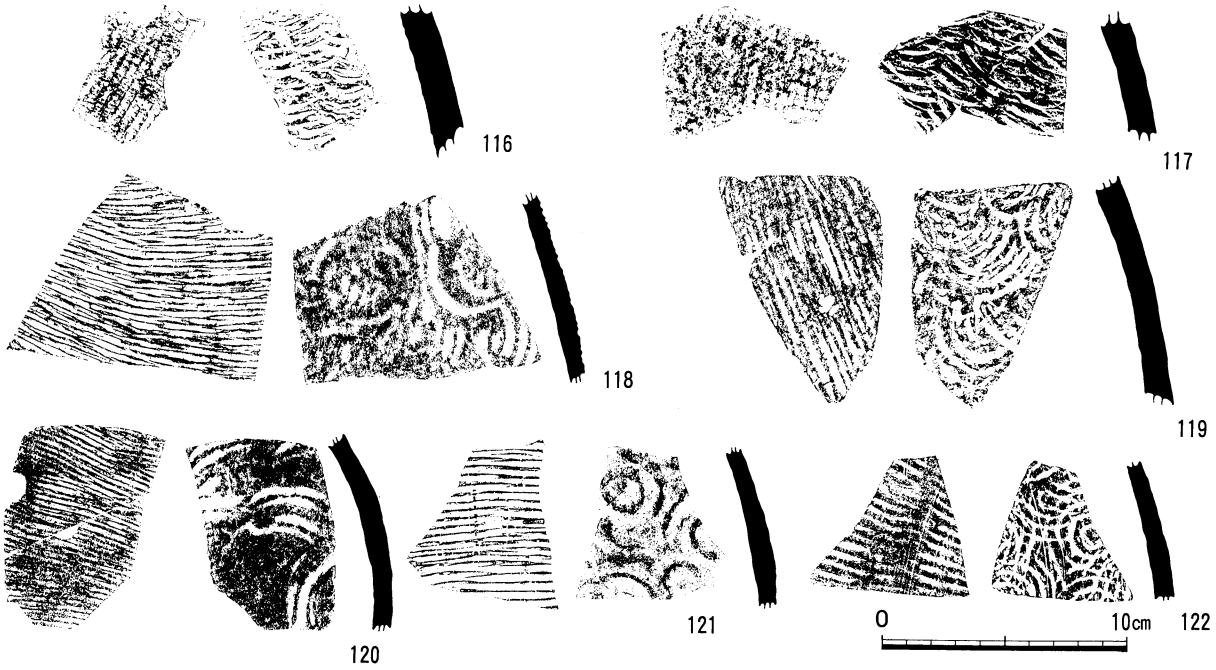
外面に格子叩き目，内面に平行状の当て具痕が残るタイプである。胴部の中では比較的下部にあたると思われる。

128は，外面に2×2㎜程の格子叩き目が残る。内面は，幅5～6㎜の平行状の当て具痕が残る。129は，外面に2～6×2～4㎜程の大きさが不揃いの格子叩き目が残る。内面は幅約4㎜の平行状の当て具痕が残る。130は，外面に2～3×2㎜程の格子叩き目が浅く残る。内面は，幅3～4㎜の平行状の当て具痕が残る。

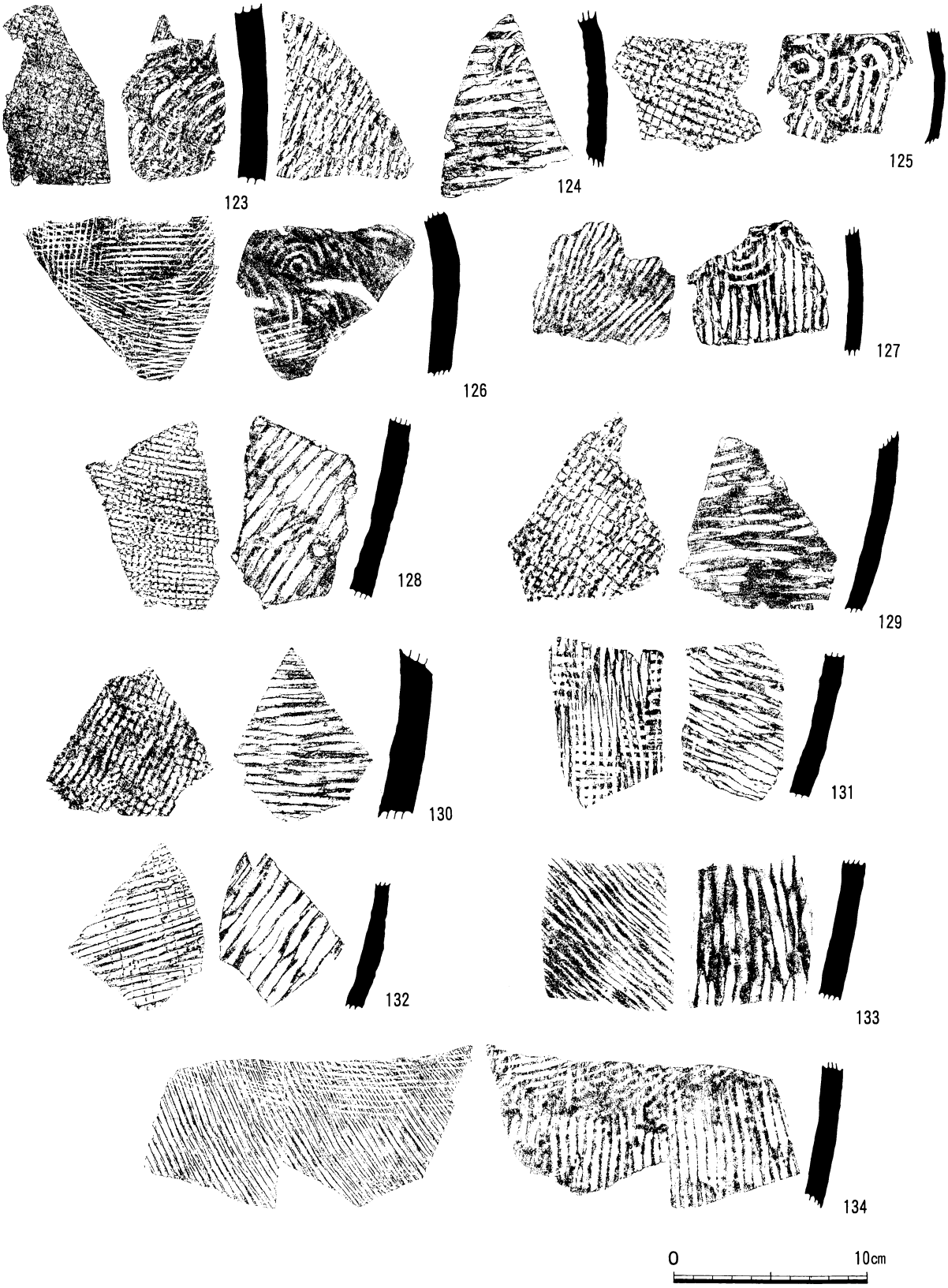
・**平行－平行タイプ**（131～134）

外面に平行叩き目，内面に平行状の当て具痕が残るタイプである。胴部の中では比較的下部にあたると思われる。

131は，外面には直交する平行叩き目が残る。内面は一方向の平行状の当て具痕が残る。132は，外面に基本的には平行叩き目であるが，一部格子となる叩き目が残る。褐釉がかかり，一部ゴマ塩状に白色の灰が付着している。内面は，幅5～6㎜の平行状の当て具痕が残る。叩きが足りずに器壁が膨らんでいる。133は，外面に幅2～3㎜の平行叩き目が残る。内面には幅4～5㎜の平行状の当て具痕が残る。134は，外面に2方向からの平行叩き目が残り，内面にはそれと呼応する位置で方向の変わる平行状の当て具痕が残る。



第34図　須恵器Ⅱ

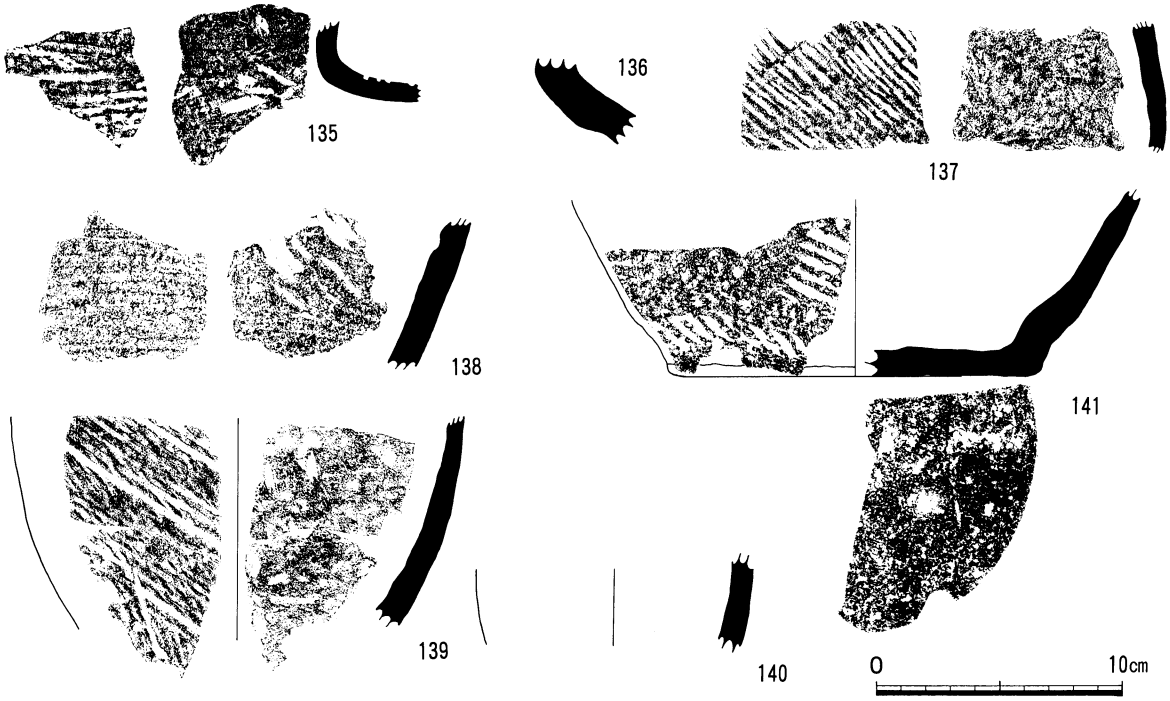


第35図　須恵器Ⅲ

e）壺（第36図）

135～141は，壺である。完形に復元できたのものはない。

135は，肩部の屈曲部である。外面は屈曲部より上部はナデ調整が施されており，下部に格子叩き目が残る。内面は屈曲部より上部は比較的丁寧なナデ調整が施されており，下部は比較的粗いナデ調整が施されている。内外面は灰白色を呈しているが，断面は生焼けである。136は，壺の肩部である。内外面ともナデ調整が施されているが，内面下部は粗い調整である。137は，胴部の破片である。外面は，斜位の平行叩き目が施され，内面は，ナデ調整が施されている。138は，胴部の破片である。内外面ともナデ調整が施されているが，内面の調整は粗い。139は，胴部の破片である。外面は平行叩き目が残り，内面はナデ調整が施されているが粗く，粘土紐の輪積みの痕跡や，指頭圧痕がみられる。140は，内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。内面はナデ調整の細かい筋が見られるが，外面にはみられない。141は，底部を含む比較的大きな破片である。底部の側面に長さ約1.5～2.5cmの平行叩き目が廻り，くぼんでいる。それより上部は長い平行叩き目が残る。底面はナデ調整が施されている。内面は調整が粗く，底部には指頭圧痕が残り，胴部は凹凸が残る。



第36図　須恵器Ⅳ

③その他（第37図）

その他の古代の遺物として，香炉蓋・丹塗り土師器・紡錘車（？）・線刻土師器・メンコ（？）・焼塩土器・土錘・転用硯（？）が出土している。出土量が少ないので，一括して掲載した。

a）香炉蓋（142）

142は，香炉の蓋である。鈕の部分は若干欠損しているが，中央部がわずかにくぼみ，爪形の圧痕が残る略円形のつまみ状の塊が載せられている。つまみ状の塊の周囲には2重の円形の沈線が廻る。内面はススが付着している。現存部には円孔がない。

b）丹塗り土師器（143）

143は，内外面丹塗りの土師器である。内面はミガキが施されているようであるが，ローリングのため詳細は不明である。

c）紡錘車（？）（144）

144は，円盤状の底部を有する土師器坏の底部である。底部中心部に穿孔されたような痕跡が残る。断定はできないが，紡錘車に転用されたか，製作過程で廃棄された可能性がある。

d）線刻土師器（145）

145は，土師器坏の底部である。底部内面に幅約1㎜，長さ1.5㎝の線刻がみられる。

e）円盤型土製加工品（？）（146）

146は，土師器埦の底部である。2～4㎝程の間隔で破損しており，人為的な可能性がある。

f）焼塩土器（147）

147は，焼塩土器の口縁部である。口唇部から内面にかけて布目の圧痕が残る。

g）土錘（148～156）

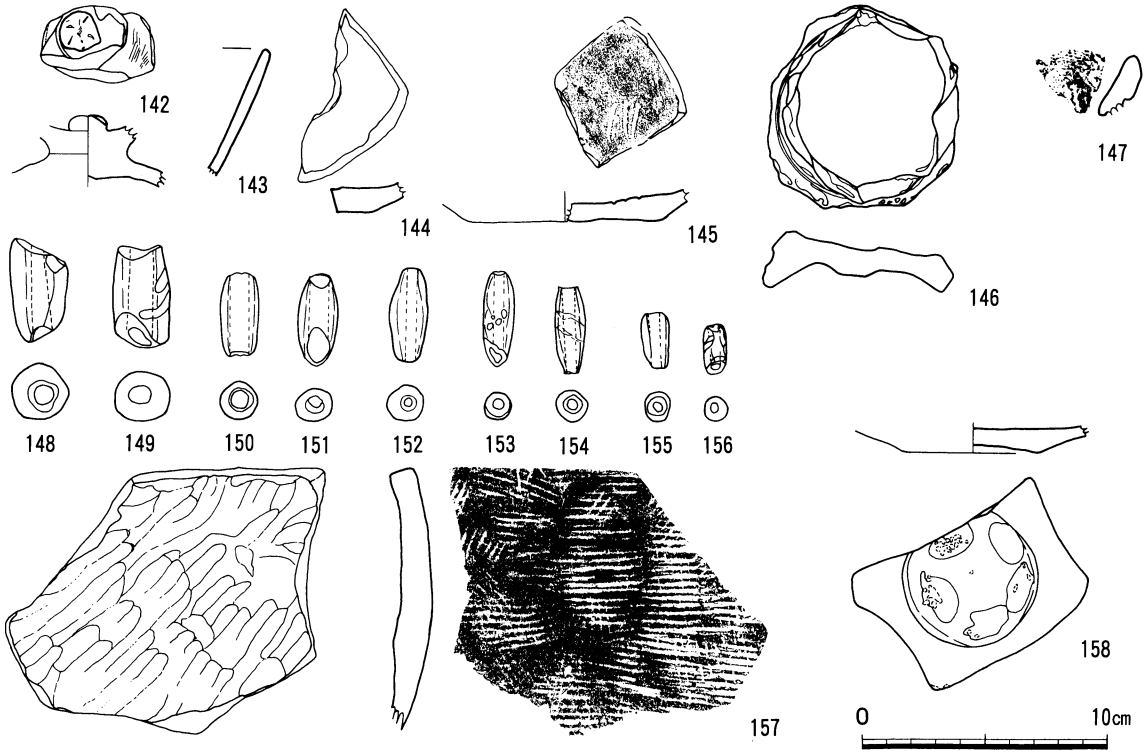
148～156は，土錘である。全て紡錘状のものに孔を貫通させた管状土錘である。

h）転用硯（？）（157）

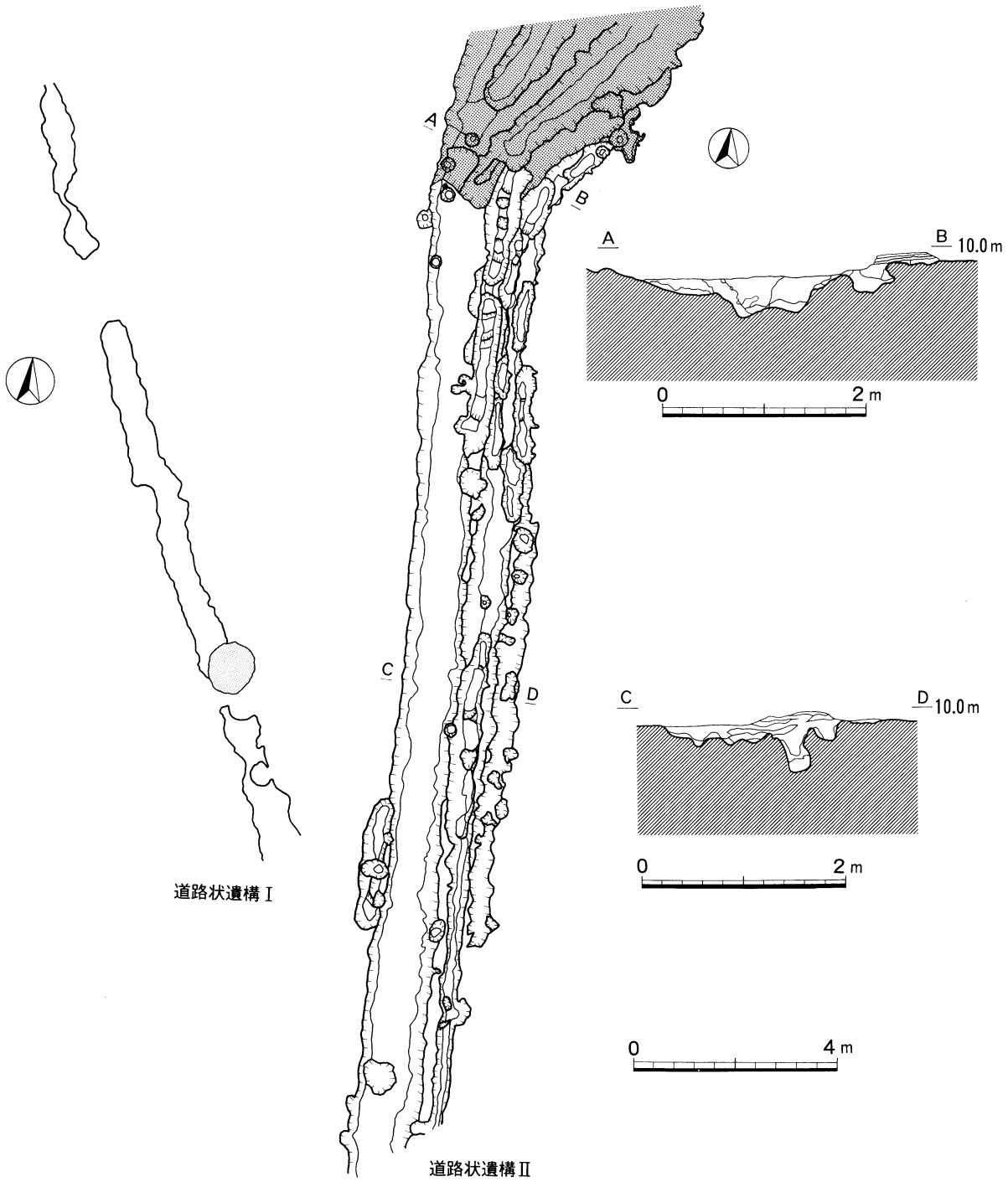
157は，須恵器甕の胴部の破片である。外面は平行叩き目，内面には平行状の当て具痕がみられる。内面が磨耗しており，硯として転用されていた可能性がある。生焼けである。

i）青磁（158）

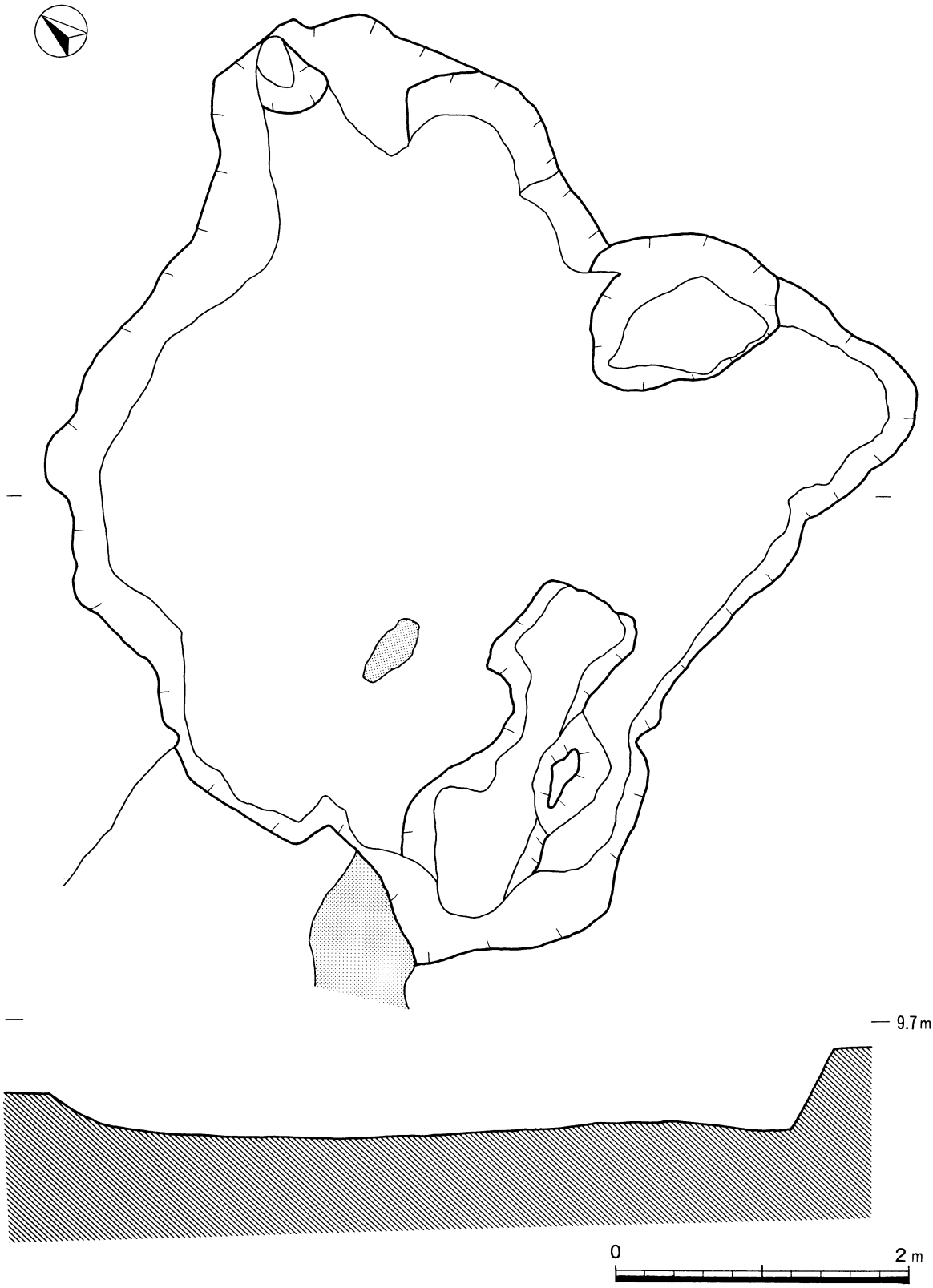
158は，越州窯系の坏である。底面は，中央部へ向かってわずかにくぼむ。畳付部は，幅約2㎜で釉剥ぎが施されている。底面に目跡が残っている。内外面に細かい貫入がはいっている。



第37図　その他の古代遺物



第38図　道路状遺構Ⅰ・Ⅱ実測図



第39図　竪穴遺構実測図

第３節　中・近世の調査

（１）調査の概要

中・近世については，道路状遺構２条，竪穴遺構１基が検出された。遺物は，遺構内遺物を除きⅠ層（表土層）中からの出土である。

（２）検出遺構及び遺構内出土遺物

中・近世の遺構として，道路状遺構２条，竪穴遺構１基が検出された。

①道路状遺構（第38図）

Ｃ・Ｄ・Ｅ－４区とＣ・Ｄ－５・６区・Ｅ－４・５区で，古道跡と思われる遺構が２条検出された。埋土中から遺物が少量出土したものの時期を明確に特定することはできない。近世の遺構と思われるが，あるいは遡る可能性もある。

道路状遺構Ⅰ（第38図）

Ｃ・Ｄ・Ｅ－４区で，検出された。北西－南東方向に調査区を約16m横切り，調査区域外へ続いている。埋土上面がやや硬化しており，道跡の可能性があると判断した。検出面で幅約50～70cmを測る。深さは15cmを残す。

道路状遺構Ⅱ（第38図）

Ｃ・Ｄ－５・６区・Ｅ－４・５区で，検出された。南北方向に調査区を約20m横切り，北側は，後世の撹乱によって破壊されており，南側は，調査区域外へ続いている。硬化面が存在するために，道跡の可能性があると判断した。３条の窪みが検出されており，多少の時期差を有する道跡の複合体と思われる。検出面で東から幅約50cm・70cm・110cmを測る。

②竪穴遺構（第39図）

Ｄ・Ｅ－９・10区で検出された。約4.5×4.5mの略方形を成し，深さは50cmを残す。目的や性格は不明である。

竪穴遺構出土遺物（第40図）

竪穴遺構内からは，近世陶磁器，砥石，石臼などが出土している。

159は，肥前系の陶器碗である。透明釉が施され，畳付部は無釉。貫入が見られる。

160は，在地の陶器碗である。やや緑かかった透明釉が施され，畳付部は無釉。見込みに蛇の目釉剥ぎが施されている。

161は，唐津系の陶器大碗か鉢である。内面全体と外面の上部に灰釉が施されている。

162は，肥前系の磁器皿である。透明釉が施され，見込みに蛇の目釉剥ぎが施されている。

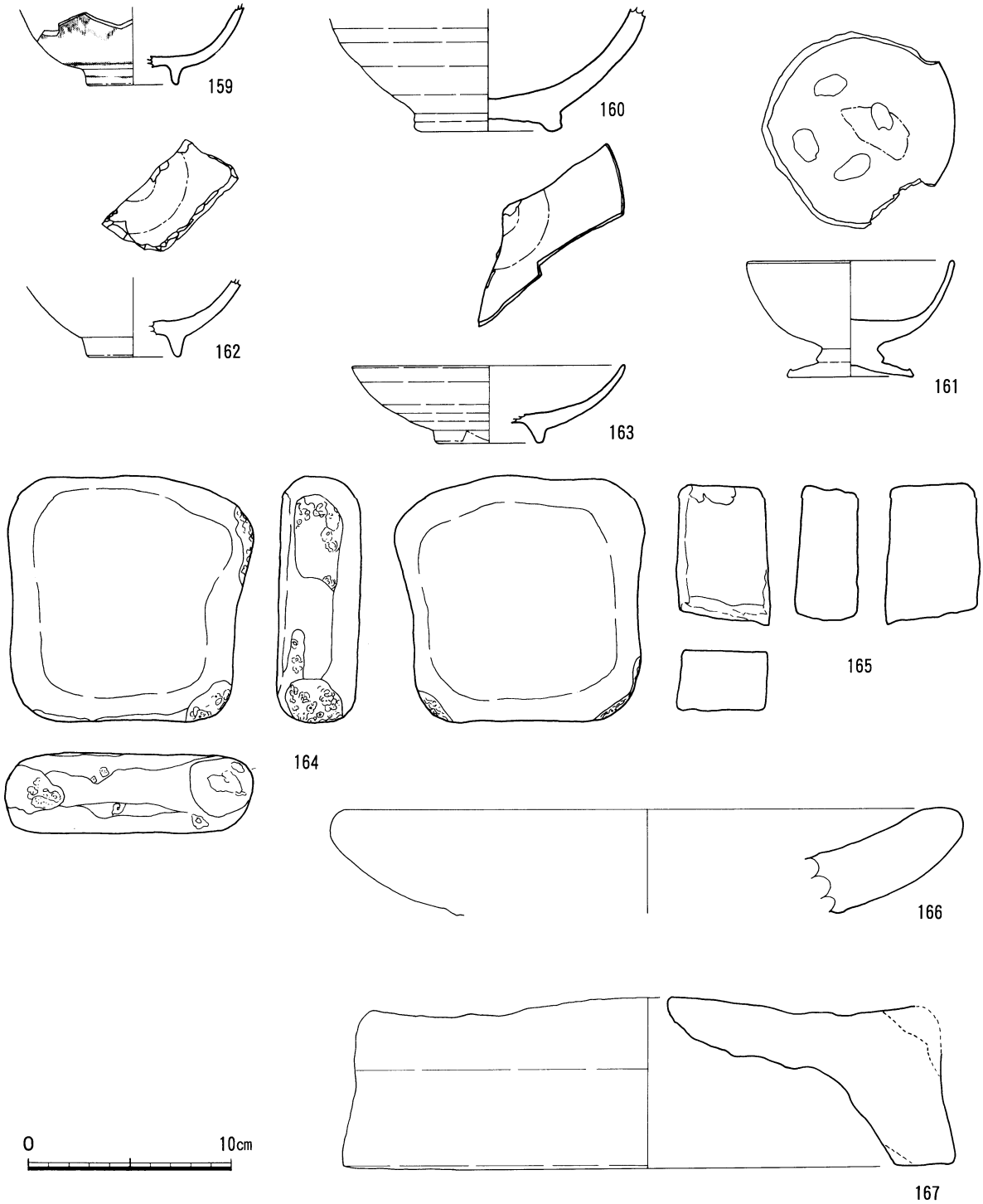
163は，加治木・姶良系の陶器仏飯具である。黒褐色の鉄釉が施され，高台下部は無釉である。見込みに４か所の目跡が残る。胎土が灰白色を呈している。

164は，輝石や角閃石を含む安山岩製の砥石である。上下両面が使用され，側面も使用されている。

165は，砂岩製の砥石である。直方体に加工され，上面と側面の３面が使用されている。

166は，凝灰岩製の石臼か捏鉢の破片である。内外面とも比較的丁寧に成形されている。外面は，欠損部から外反しており，内面は，欠損部のところに段を有している。碾臼の粉の受け部か，石製の捏鉢の破片であると考えられる。

167は，凝灰岩製の石臼の破片である。3段式碾臼の粉の受け部である。脚部のみが残存し，受けの部分は破損している。



第40図　竪穴遺構出土遺物

（3）出土遺物

中・近世の遺物としては，土師器，羽釜，捏ね鉢，擂鉢，火舎，青磁，染付，焙烙，硯などが出土している。

①中世の遺物（第41図・第42図）

土師器，羽釜，捏ね鉢，擂鉢，火舎，青磁，染付などが出土している。中世と思われる染付は，１点のみの出土であったため，近世の陶磁器と一括して第43図に掲載した。

a）土師器（第41図）

168～172は，糸切り底を有する土師器である。168～170は，坏である。171・172は，皿である。

168は，底面の糸切りの跡が縁辺部で一部６～９㎜程の幅で，段を有する。段差は約２㎜の厚さである。169は，ローリングが激しく，詳細は不明である。170は，底面の糸切りの跡が縁辺部で一部１～２㎜程の幅で，段を有する。段差は約0.5㎜の厚さである。内面は，見込み中心部がくぼんでいる。171は，見込み中心から約２㎝の部分と，体部が立ち上がる部分で輪状のくぼみを有する。内面にススが付着しており，灯明皿として使用された可能性がある。172は，小皿の小破片である。

b）羽釜（第41図）

173は，素焼きの羽釜である。庇部より下部は，ススが付着している。庇部の付け根から先端までの間で帯状にススの付着が他の部分より薄くなっているが，出土後の処理によるものか不明である。

c）捏ね鉢（第41図）

174は，東播系の捏鉢の底部付近である。内外面とも青紫色を呈している。

d）摺鉢（第41図）

175は，備前系の擂鉢である。176・177は，瓦質の擂鉢である。

175は，体部がゆるやかに内湾しながらのびて，口縁部で内湾する。内面には口唇部から約１㎝下まで幅約2.0㎝で８条の櫛目が間隔をあけてはいる。外面の口唇部から屈曲部にかけて白色の灰がゴマ塩状に付着している。

間壁忠彦氏の編年を使用すると175はⅣ期（略15世紀）にあたると思われる。

176は，体部がほぼまっすぐにのびて，口縁部で屈曲する。内面には，口唇部の約１㎝下まで幅約2.7㎝で11条の櫛目がはいる。177は，小破片で外面は剥落部が多く詳細は不明である。内面は横位の細い櫛目が全体的に施されており，その後比較的太い縦位の櫛目がはいっている。内外面とも黒色を呈している。

e）火舎（第41図）

178～181は，瓦質の火舎である。

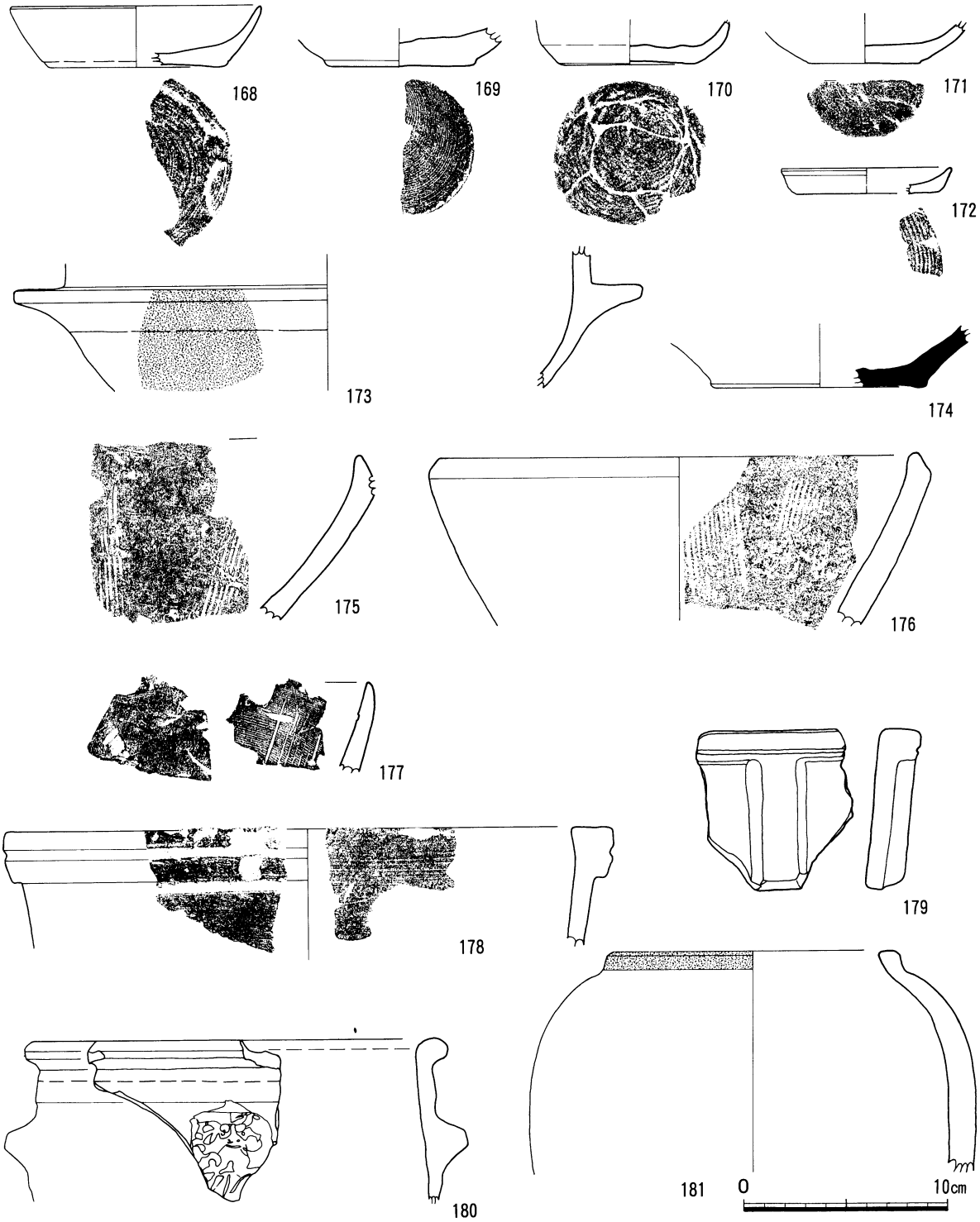
178は，口唇部に幅約1.9㎝の平坦面を有している。口縁部外面に幅約2.4㎝の粘土帯が貼り付けてあり，最大幅約４㎜のＵ字型の沈線が１条廻っている。179は，口唇部に幅約1.7㎝の平坦面を有している。口縁部外面に幅約1.5㎝・厚さ８㎜の粘土紐が貼り付けてあり，最大幅約1.5㎜のＵ字型の沈線が１条廻っている。口縁部の粘土帯から幅約2.7㎝・長さ6.3㎝の台形状に

調整された粘土帯が1条縦位に貼り付けてある。その下部は平坦に調整されおり，透かしになっていたと思われるが，周囲が欠損しているため詳細は不明である。内面に薄くススが付着している。180は，玉縁状の口唇部を有する。胴部に顔面のようにもみえる粘土塊が，貼り付けてあるが，調整が粗く単なる取っ手状のものである可能性もある。内面に一部ススが付着している。181は，体部が曲線的に内湾しながらのびて，口縁部でほぼ直に立ち上がる。内面全面と外面の口縁部付近は，厚くススが付着しており，外面胴部は薄くススが付着している。

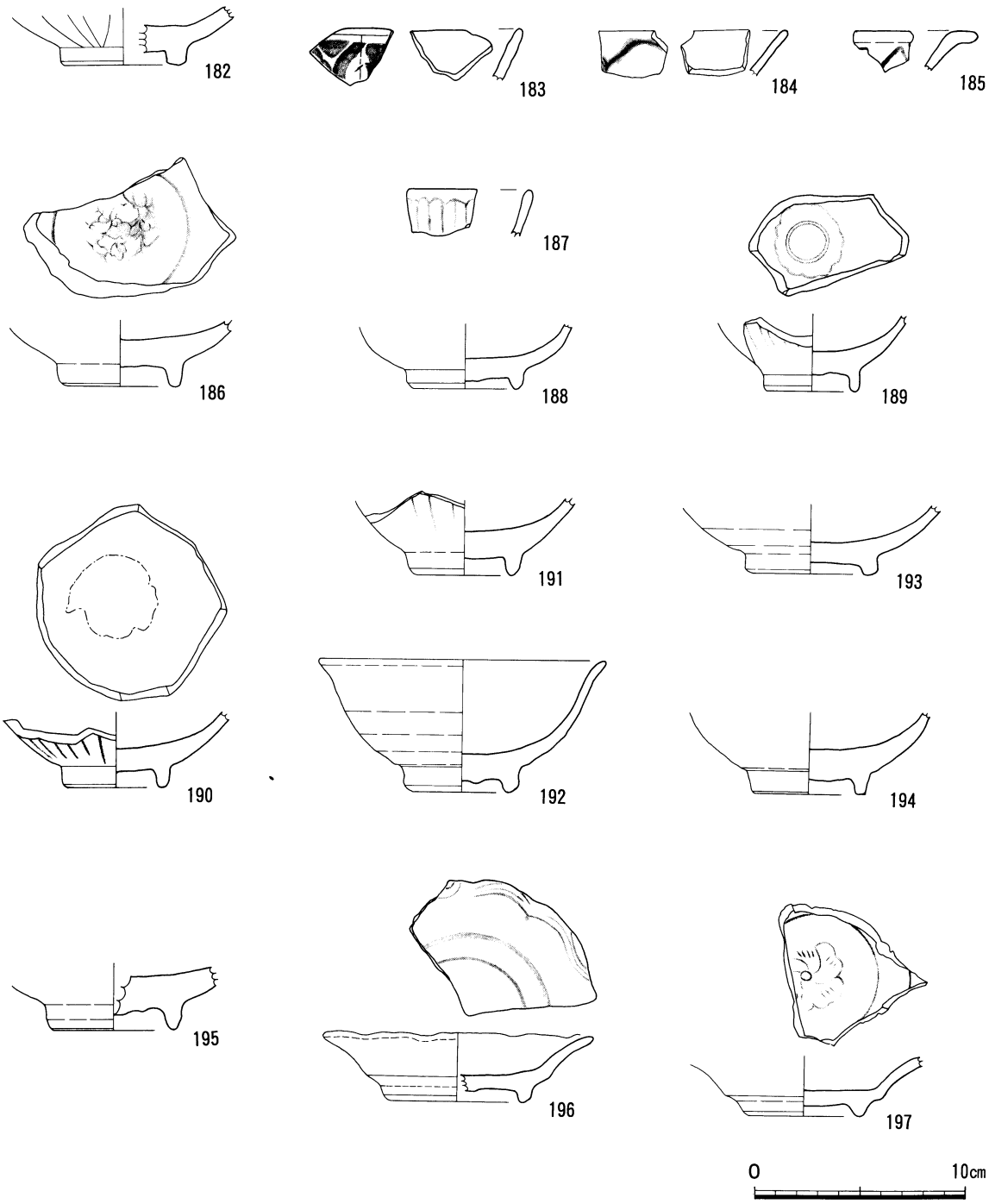
ｆ）青磁（第42図）

182～197は，青磁である。

182は，龍泉窯系の碗である。体部外面に蓮弁文が施され，底部は厚くどっしりとした断面四角形の高台を有する。畳付から高台内面は無釉である。183は，龍泉窯系の碗の口縁部付近である。体部外面に鎬蓮弁が施されている。184は，龍泉窯系の碗の口縁部付近である。体部外面に蓮弁文が施されている。185は，坏の口縁部である。体部外面に蓮弁文が施されている。貫入がみられる。186は，碗の底部である。見込みに花のスタンプが施され，体部外面にラマ蓮弁と思われる削りがみられることから，雷文帯を有する碗である可能性が高い。外底は蛇の目状に釉剥ぎが施されているが，薄く釉が付着しており褐色を呈し，橙色の粒が付着している。187は，碗の口縁部付近である。外面にヘラ先による細線の線描蓮弁文が施されている。細かい貫入がみられる。188は，碗の底部付近である。釉が高台内面の途中までかかる。外底は茶褐色を呈している。貫入がみられる。189は，碗の底部付近である。見込みに花のスタンプが施されている。体部外面に線描蓮弁文の一部と思われる細線が施されている。釉が高台内面の途中までかかる。外底は黄褐色を呈している。貫入がみられる。190は，碗の底部付近である。体部外面に線描蓮弁文の一部と思われる細線が施されている。見込みは略円形に釉剥ぎが施されている。畳付から高台内面は無釉である。細かい貫入がみられる。191は，碗の底部付近である。畳付から高台内面は無釉である。貫入がみられる。無釉の部分は白色を呈している。192は，碗である。体部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり，口縁部で外反する。畳付から高台内面は無釉である。貫入が見られる。無釉の部分は茶褐色を呈している。193は，碗の底部付近である。畳付部まで灰白色の釉がかかり，内面は無釉である。外面に比較的大きい貫入がみられる。194は，碗の底部付近である。高台と体部の境界に幅約2㎜の沈線が1条廻っている。高台内まで釉がかかっているが，畳付部は釉剥ぎが施されている。貫入がみられる。195は，碗の底部付近である。高台の調整が粗く，凹凸がみられる。畳付を越して，外底まで釉がかかっている。細かい貫入がみられる。196は，稜花皿である。体部外面は，横に開いたあと内側に屈曲し，徐々に外反しながらのびる。見込みに圏線が2条廻っている。口縁部内面に3条の波状の沈線が廻る。畳付部に粗く釉剥ぎが施されている。貫入がみられる。197は，口縁部が欠損しているが，稜花皿であると思われる。体部外面は，横に開いたあと内側に屈曲し，徐々に外反しながらのびる。見込みに花のスタンプ文が施されている。外面は高台と体部の境界に2条の圏線が廻る。畳付を越えて高台内まで釉がかかる。



第41図　中世遺物Ⅰ


182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
0
10cm

第42図　中世遺物Ⅱ

②近世の遺物（第43図・第44図）

陶磁器，土師質土器，焙烙，硯などが出土している。

a）陶磁器（第43図）

198～211は，陶磁器である。205は陶器，他は磁器である。203は，中世の遺物である。

・**碗**（198～202）

198～202は，白磁の碗である。

198は，肥前系染付の丸碗である。高台畳付の釉が剥がされているが，白い粒が付着している。文様は，内面口縁部に1本の圏線，見込みに2本の圏線がはいる。見込みの銘は一部欠損しているが，「太明嘉靖年製」と推定される。外面は，口縁部と高台に2本ずつの圏線がはいる。高台内に「太」の銘がはいる。

199は，肥前系染付であるが，上部が欠損しており口径が不明である。鉢になる可能性がある。文様は，見込みに2本の圏線がはいり，五弁花文がはいる。外面は草花文が施され，高台に2本，高台内に1本の圏線がはいる。

200は，清朝青花の端反小碗である。文様は，見込みに2本の圏線がはいり，中央部に文様がみられるが，モチーフは不明である。外面は仙芝祝寿文がはいり，高台内に2本の圏線がはいる。高台内銘は，判読できない。

201は，肥前系染付の端反碗である。文様は，見込みに1本の圏線がはいり，草花文がはいる。外面は，鳳凰文が施され，高台に2本の圏線がはいる。

202は，在地産染付の端反碗である。文様は，外面に草花文が施されている。全面に貫入がはいっている。

・**皿**（203～211）

203～211は，皿である。205は陶器，他は磁器である。203は，中世の遺物である。

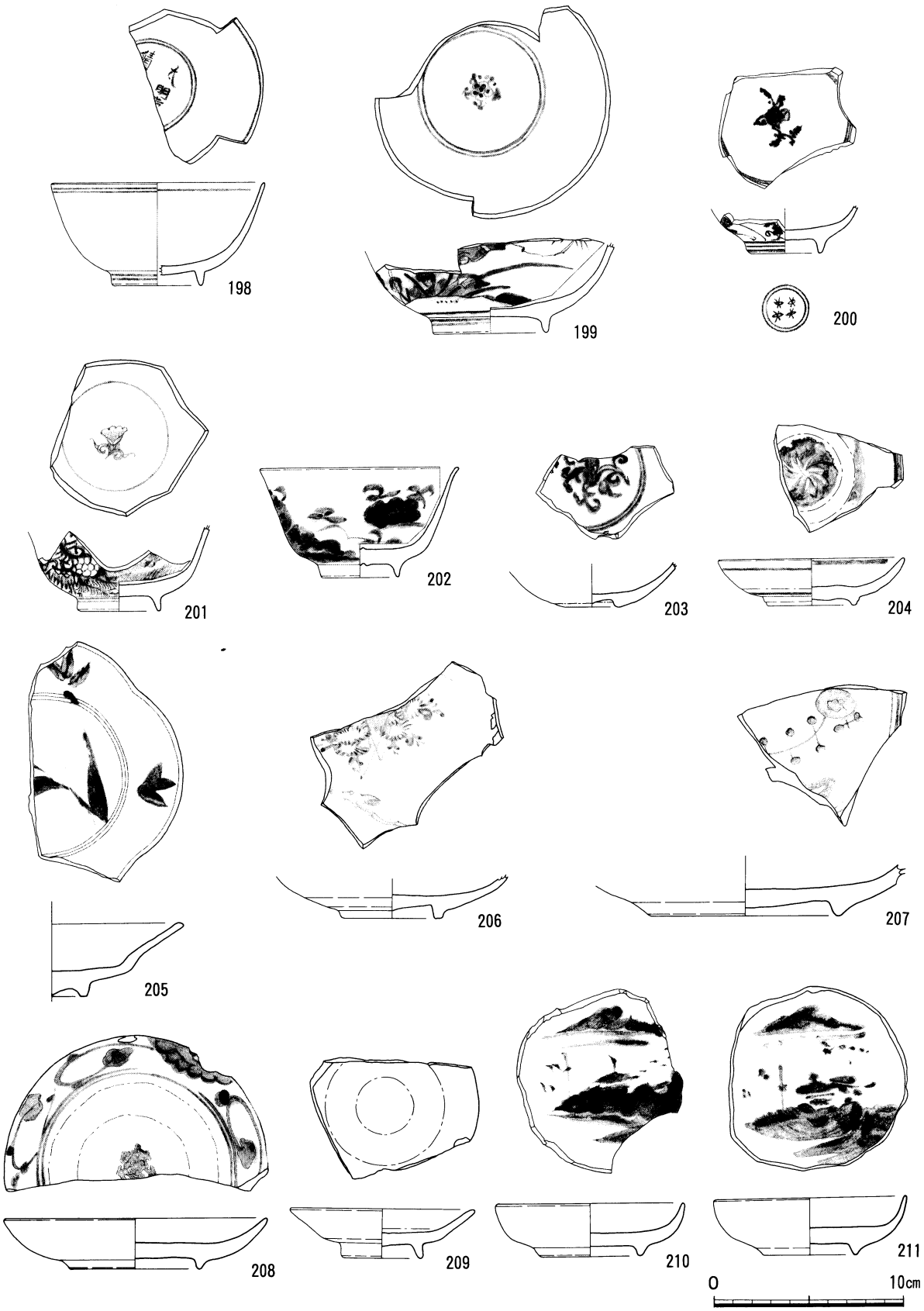
203は，景徳鎮窯系青花の碁笥底皿である。文様は，見込みに2本の圏線がはいり，草花文が施されている。底部には，半径約2cmほどの無釉部分があるが，くぼみの中は一部釉が入り込んでいる。

204は，漳州窯系青花の皿である。文様は，見込みに花文が施され，外面は1本圏線がはいっている。内面は蛇の目釉剥ぎが施され，外面は中心から半径約3cmにわたって，釉剥ぎが施されている。

205は，唐津系陶器の稜花皿である。文様は，鉄釉を使用して植物文様が施されている。

206は，肥前系染付の皿である。文様は見込みに草花文が施されている。畳付に白色の粒が付着している。見込みに目跡がみられる。207は，肥前系染付の皿である。文様は，見込みに圏線が2本はいり，芙蓉手が施されている。畳付部は無釉である。断面が橙色を呈している。208は，肥前系染付の皿である。文様は見込みにコンニャク印判による五弁花文，周囲に草花文が配してある。蛇の目釉剥ぎが施され，畳付には白色の粒が付着している。

209は，在地産白磁の皿である。蛇の目釉剥ぎが施され，畳付部は無釉である。210・211は，在地産染付の皿である。文様は見込みに山水文が施してある。青くてかる透明度の高い釉が施してある。



第43図　近世遺物Ⅰ

b）焙烙ほか（第44図）

陶磁器以外の近世の遺物は，出土量が少ないので一括して掲載した。

・**土師質土器**（212）

212は，土師質土器の坏である。体部はゆるやかに外反しながら立ち上がるようであるが，上部が欠損しているので詳細は不明である。底面は丁寧に調整が施され，切り離しの痕跡が消されている，

・**焙烙**（213～219）

213～219は，焙烙である。全て土師質の土器である。

213～215は，身の部分である。外面にはススが付着している。

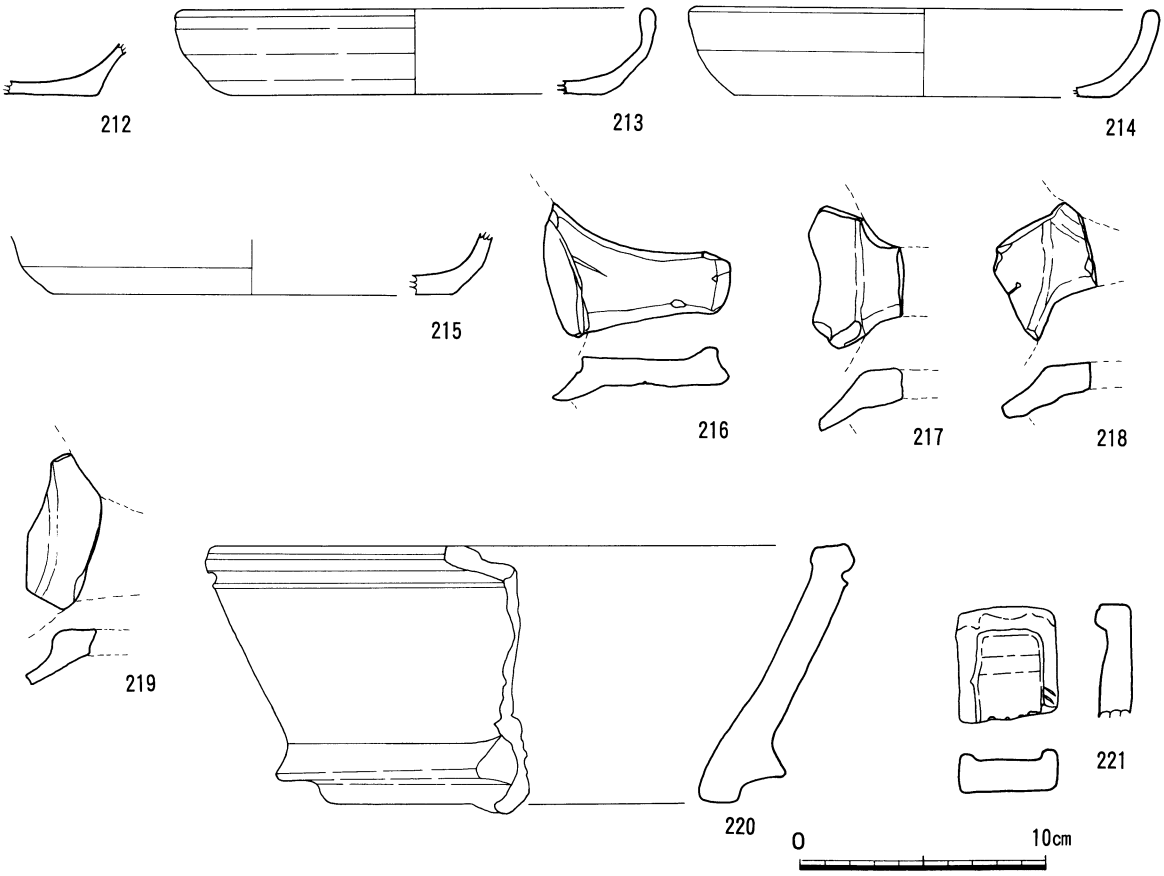
216～219は，取っ手の部分である。下部にススが付着している。

・**調理器具**（220）

220は，調理用の加熱器具の一部である。底面には，漆喰のような灰色の物質が付着しており，何かと接着していた痕跡がある。内外面とも厚くススが付着している。

・**硯**（221）

221は，砂岩製の硯である。



第44図　近世遺物Ⅱ

第４節　近代の調査

（１）調査の概要

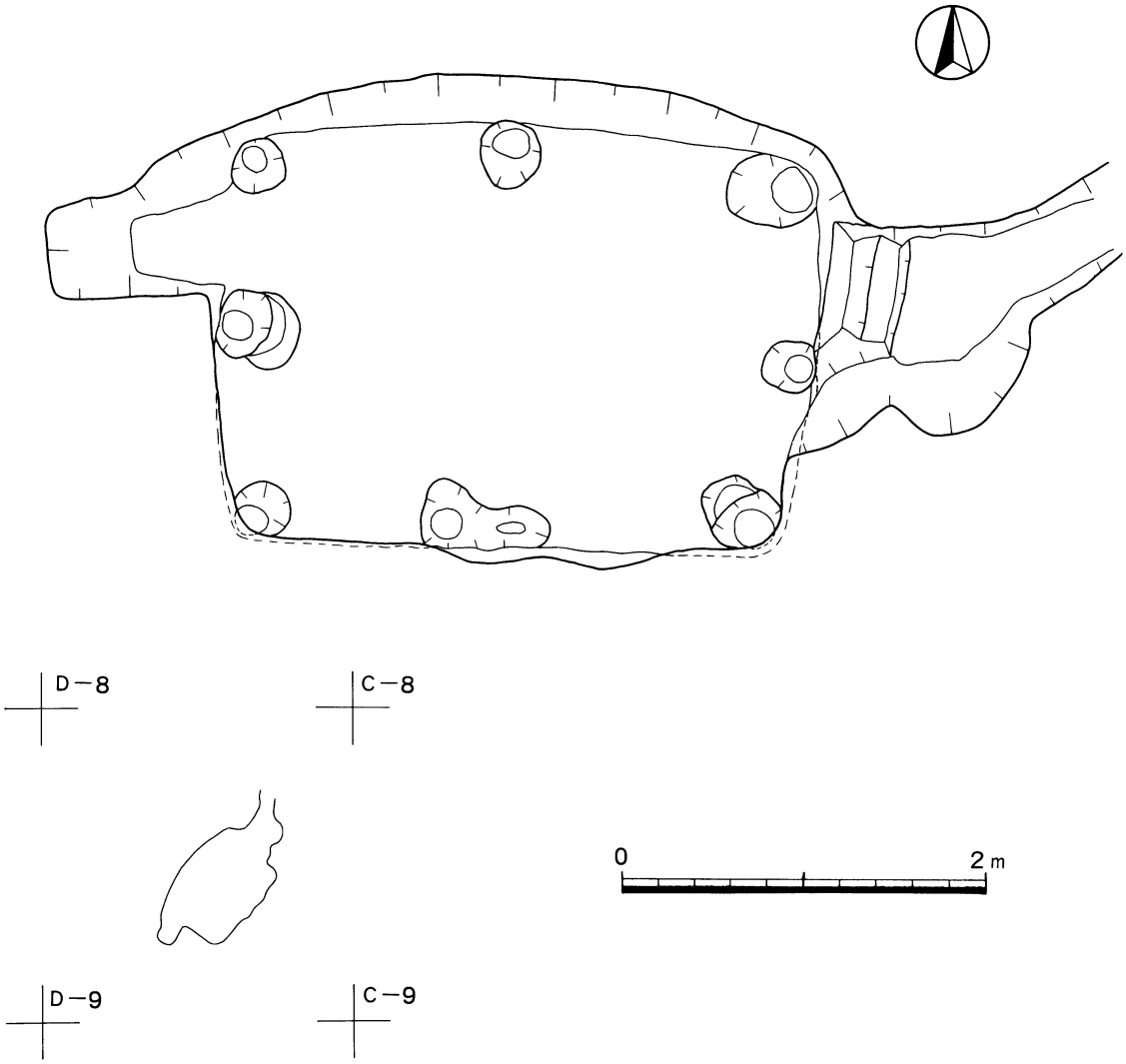
Ｄ－９区で，第２次世界大戦中の防空壕跡と思われる竪穴を検出した。

（２）防空壕跡（第45図）

Ｄ－９区で，長径3.2m，短径2.6mの方形の竪穴を検出した。竪穴下場の周囲に，直径約30～40cmで２間×２間の柱穴を持つ。竪穴の東側に地面を掘り込んだ階段があり，直近の段から床面までの距離は約60cmである。検出面からの深さは1.4mを残す。

埋土の状況と地元の方からの聞き取りによって，第２次世界大戦中に作られた防空壕の跡であると認定した。

104頁に図化したが，隣接するＤ－10区からは，ニッキ水などを入れたと思われるビンが４点出土した。球状の胴部が上部から小さいものから大きいものへ３個連なるものが１点と５個連なるものが３点である。５個連なるビンの表に「肉弾三勇士」の文字，裏に３人の陸軍兵の顔が陽刻されている。これは1932年の上海事変の際に中国軍の鉄条網へ爆弾を抱えて飛び込み戦死した三兵士を戦意高揚のために軍部が美談化したもので，当時は歌にまでうたわれたようである。



第45図　防空壕跡実測図

第５節　時期不詳の遺物・古銭

（１）調査の概要

出土遺物の中で，時期が特定できないものを時期不詳の遺物とした。鞴の羽口と性格不明の粘土塊である。

（２）出土遺物（第46図）

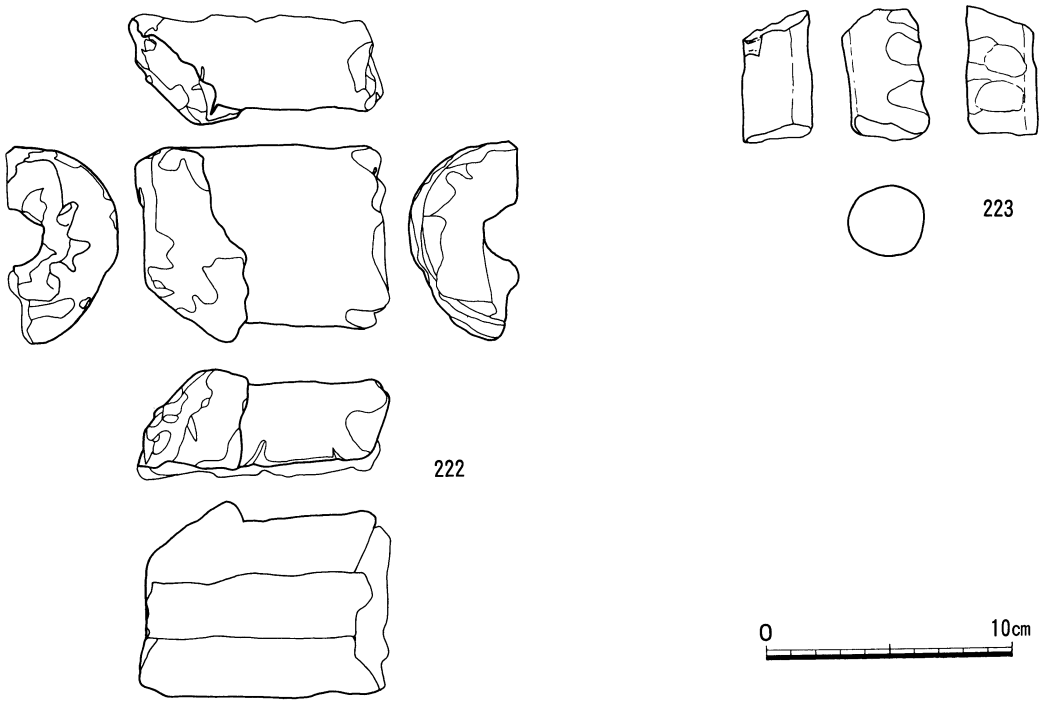
鞴の羽口と粘土塊が，出土している。

・**羽口**（222）

鞴の羽口である。直径約2.7cmの円形の空気孔がほぼ中心に穿孔されている。先端部が溶解して黒色を呈するガラス質化している。その周囲は器壁が溶解したのち再凝固したものらしく，空気が抜けてできた細かな孔が多数みられる。

・**粘土塊**（223）

略円柱状の粘土塊である。図の天地方向にあたる部分は上下とも欠損しており，全体の形状は不明である。２か所に指の圧痕が残る。加熱を受けているが，焼成状態が良好とはいえない。性格は不明であるが，土器製作の際に作成されたものである可能性がある。



第46図　時期不詳の遺物

・**古銭**（224～235）

古銭が25点出土しているが，そのうちの12点を図化した。

224は，治平元寳である。書体は真書で，北宋の治平元年（1064年）初鋳である。

225は，政和通寳である。書体は篆書で，北宋の政和元年（1111年）初鋳である。

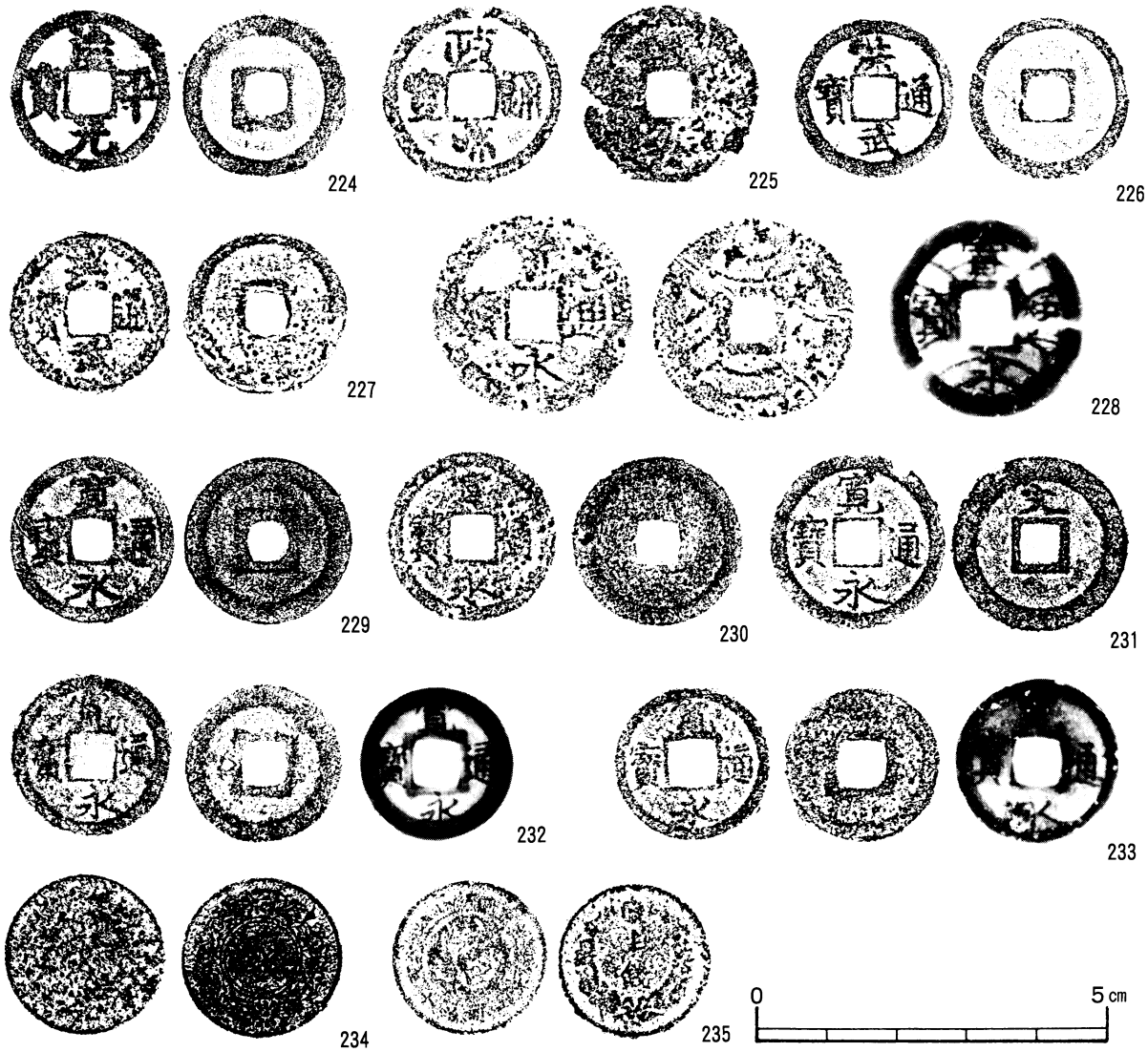
226・227は，洪武通寳である。無背，重点・マ頭通で，明の洪武元年（1368年）初鋳である。

228は，寛永通寳である。波紋が11波の四文銭で，明和六年（1769年）初鋳である。

229～233は，寛永通寳の一文銭である。鋳造期間によって１期（229・230）（1636年～1659年），２期（231）（1668年～1683年），３期（232・233）（1697年～1747年・1767年～1781年）に分類した。このうち３期のものは出土点数13点中２点のみ掲載した。１期は，古寛永ともよばれ，「寛」の字の「儿」の頭が近接し，「寳」の字の「ハ」の頭が近接している。２期は，背面に「文」の字が配される。３期のものは，未掲載のものも含め全て無背であった。

234は，一銭銅貨である。鋳造年は風化が激しいため確認できない。

235は，半銭銅貨である。明治十年（1877年）鋳造である。



第47図　古　　銭

第５章　第２地点の調査の概要

第１節　古代の調査

（１）調査の概要

森遺跡第２地点は，分布調査の際には，水田と住宅地であり，分布調査が不可能だった部分である。確認調査の結果，Ｂ・Ｃ－10～13区で古代の遺物包含層であるⅡ層の黒色腐植土が確認され，土師器等の遺物が出土した。Ａ・Ｂ・Ｃ－１～９区では，多量の土師器片や須恵器片が出土したが，近世以降の開田のために地下げした後の盛土中からの出土であったため，遺物の採集のみを行った。

古代については，掘立柱の建物跡４棟，土坑３基を検出した。遺物は，土師器や須恵器等が，出土している。

（２）検出遺構

古代の遺構として，掘立柱の建物跡４棟，土坑３基が検出された。

①掘立柱建物跡（第50図・第51図）

Ｂ－11・12区，Ｃ－10・11区で，掘立柱建物跡が４棟検出された。

掘立柱建物跡１号（第50図）

Ｂ・Ｃ－12区で検出された。２間×３間であるが，南側の梁間に柱穴が検出されなかった。梁間２間（2.84m）×桁行３間（4.02m）を測る。建物の桁行は，N-15°-W方向である。１間の平均は，梁間間が1.45m，桁行間が1.34mとなる。柱穴の掘り方は，円形ないし楕円形を呈し，柱穴の平均径は29cmを測る。深さの平均は検出面より35cmである。

掘立柱建物跡２号（第50図）

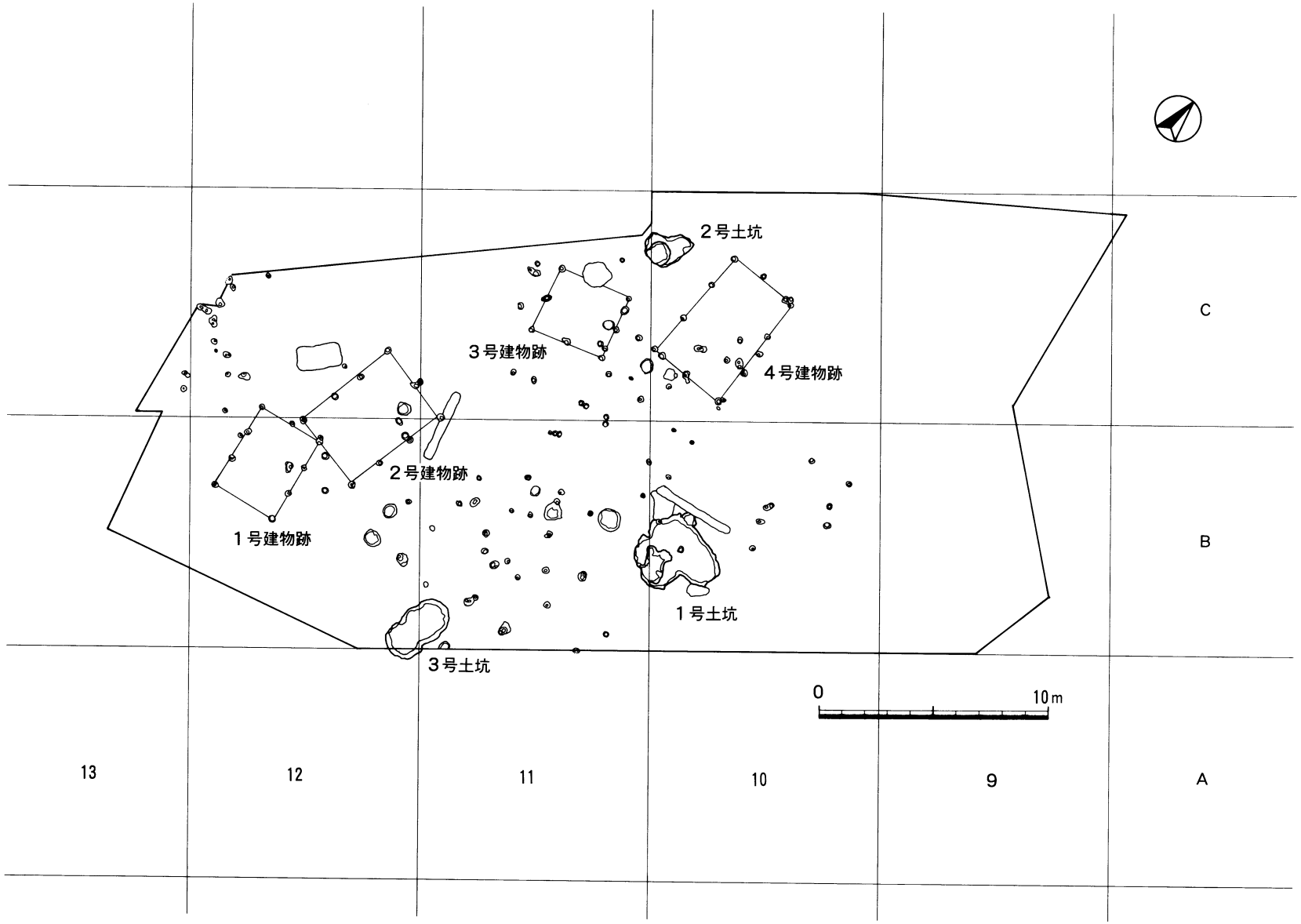
Ｂ・Ｃ－11・12区で検出された。梁間２間（3.61m）×桁行３間（4.81m）を測る。建物の桁行は，N-4°-E方向である。１間の平均は，梁間間が1.83m，桁行間が1.61mとなる。柱穴の掘り方は，円形ないし楕円形を呈し，柱穴の平均径は34cmを測る。深さの平均は検出面より52cmである。

掘立柱建物跡３号（第51図）

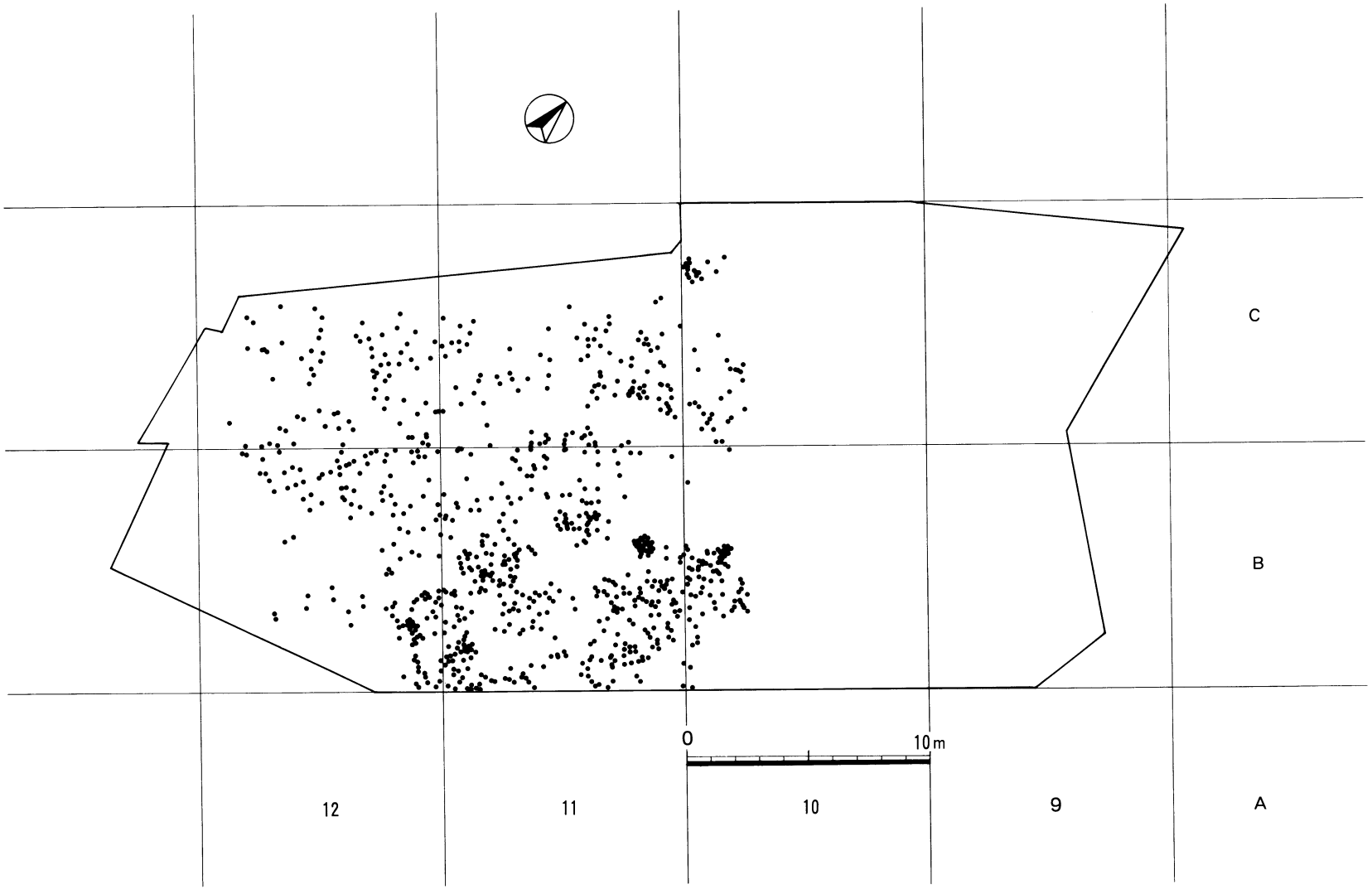
Ｃ－11区で検出された。２間×２間であるが，北側の梁間の柱穴が存在したと思われる位置は後世の撹乱のために破壊されており，柱穴を検出できなかった。２間×２間のため，梁間と桁行を設定することは困難であるが，便宜上，短い方を梁間，長い方を桁行とした。このため，他の３棟とほぼ直交する形となる。梁間２間（2.87m）×桁行２間（3.22m）を測る。建物の桁行は，N-67°-E方向である。１間の平均は，梁間間が1.44m，桁行間が1.65mとなる。柱穴の掘り方は，円形ないし楕円形を呈し，柱穴の平均径は31cmを測る。深さの平均は検出面より26cmである。

掘立柱建物跡４号（第51図）

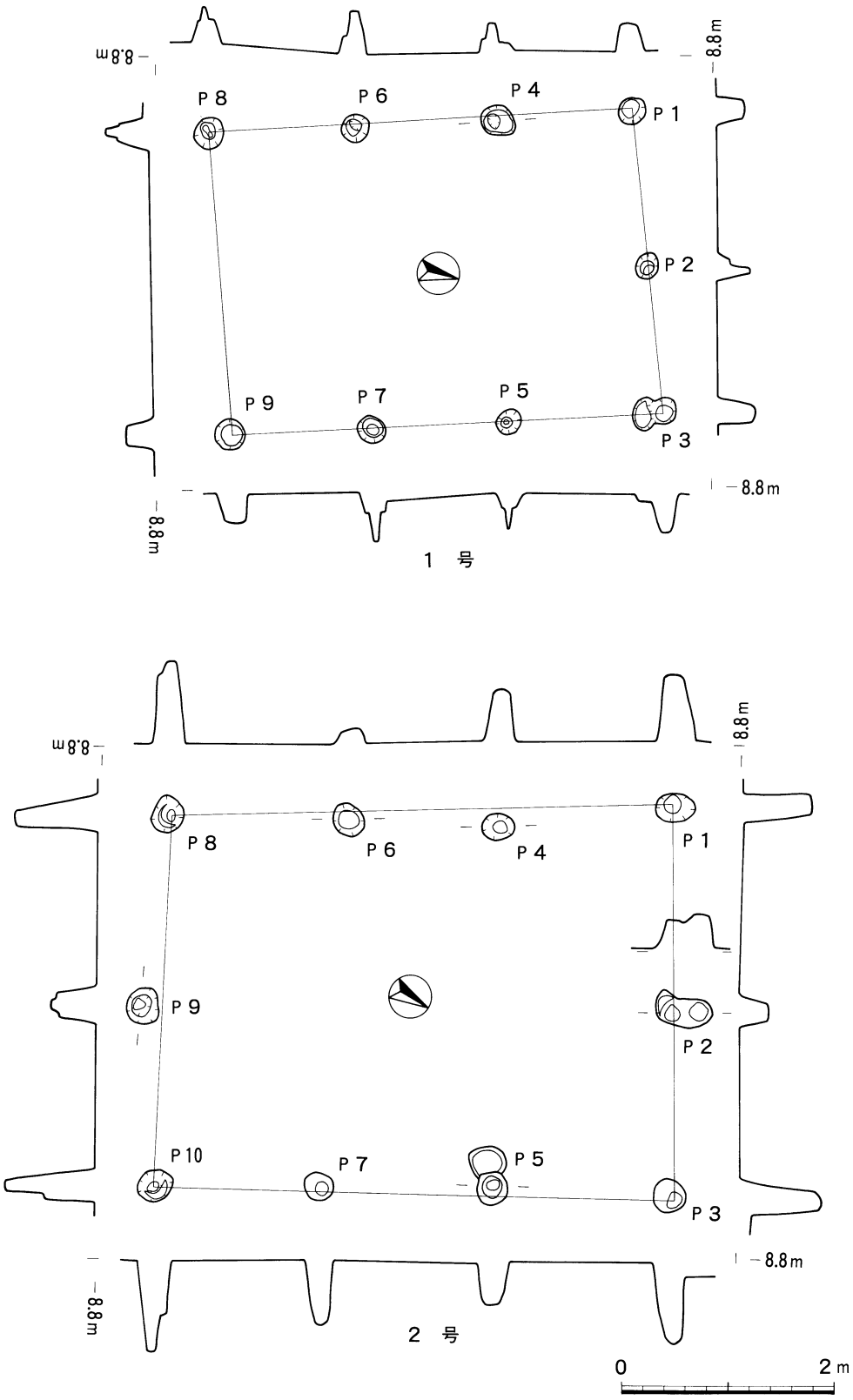
Ｃ－10区で検出された。梁間２間（3.27m）×桁行３間（5.31m）を測る。建物の桁行は，N-5°-Wである。１間の平均は，梁間間が1.64m，桁行間が1.77mとなる。柱穴の掘り方は，円形ないし楕円形を呈し，柱穴の平均径は30cmを測る。深さの平均は検出面より40cmである。



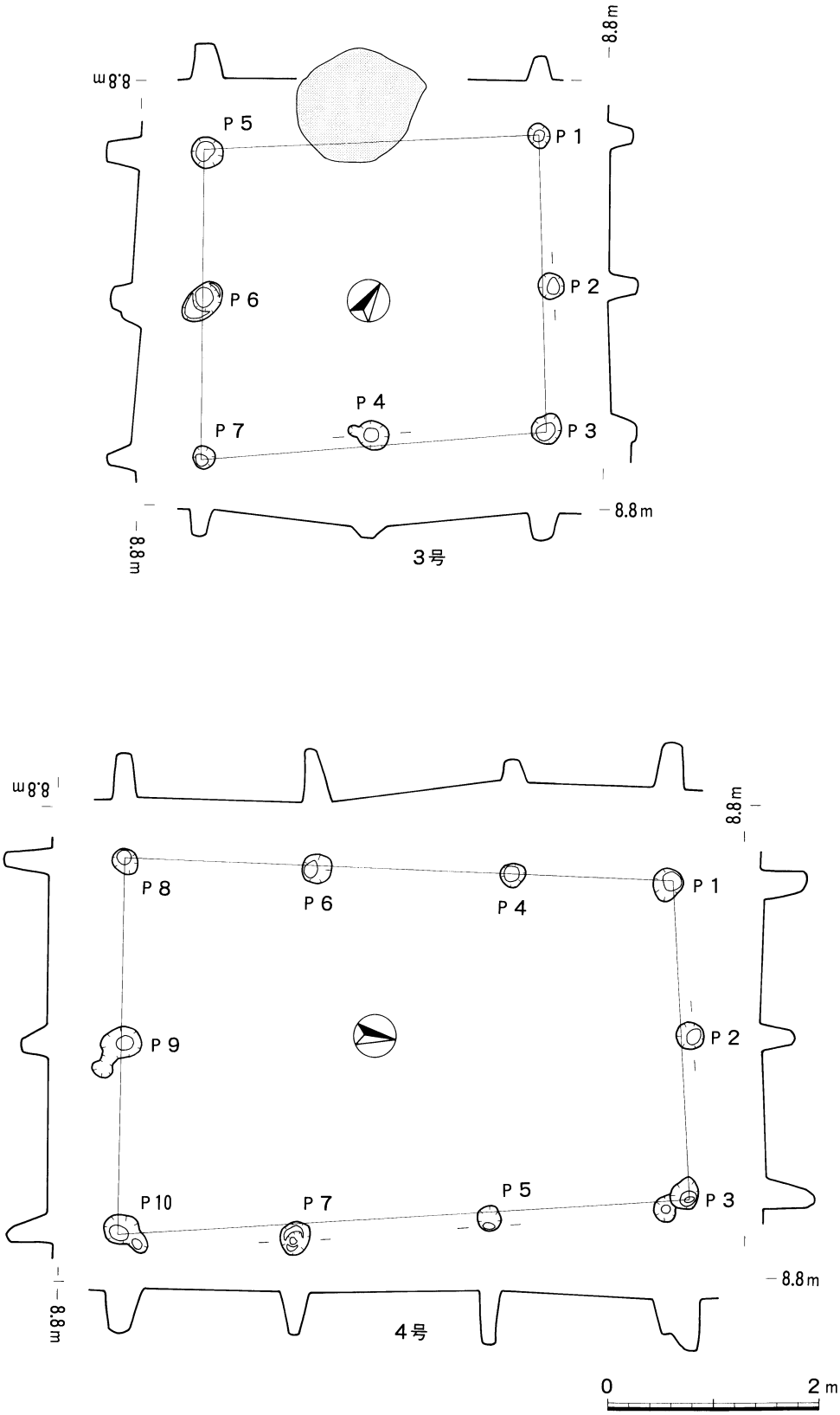
第48図　第２地点遺構配置図



第49図　第２地点遺物出土状況



第50図　掘立柱建物跡１・２号実測図



第51図　掘立柱建物跡３・４号実測図

掘立柱建物跡１号計測表

梁間間（cm）		梁間柱間（cm）		桁行間（cm）		桁間柱間（cm）	
Ｐ１－Ｐ３	２８０	Ｐ１－Ｐ２	１５３	Ｐ１－Ｐ８	３９８	Ｐ１－Ｐ４	１２９
		Ｐ２－Ｐ３	１３７			Ｐ４－Ｐ６	１３０
Ｐ８－Ｐ９	２８７					Ｐ６－Ｐ８	１３９
				Ｐ３－Ｐ９	４０５	Ｐ３－Ｐ５	１４７
						Ｐ５－Ｐ７	１２６
						Ｐ７－Ｐ９	１３３
平均	２８３.５	１４５		４０１.５		１３４	

Ｐｉｔ	深さ（cm）	長径（cm）	短径（cm）	堀り方
Ｐ１	２７	２５	２４	円形
Ｐ２	３２	２６	２０	楕円形
Ｐ３	３５	４０	２５	楕円形
Ｐ４	２９	３４	２８	楕円形
Ｐ５	３５	２４	２３	円形
Ｐ６	４０	２６	２６	円形
Ｐ７	４５	２７	２５	円形
Ｐ８	４０	３０	２８	円形
Ｐ９	２８	２９	２８	円形
平均	３４.６	２９	２５.２	

掘立柱建物跡２号計測表

梁間間（cm）		梁間柱間（cm）		桁行間（cm）		桁間柱間（cm）	
Ｐ１－Ｐ３	３７２	Ｐ１－Ｐ２Ａ	１９６	Ｐ１－Ｐ８	４７２	Ｐ１－Ｐ４	１６３
		Ｐ１－Ｐ２Ｂ	１９７				
		Ｐ２Ａ－Ｐ３	１７５			Ｐ４－Ｐ６	１４４
		Ｐ２Ｂ－Ｐ３	１７８				
Ｐ８－Ｐ10	３５０	Ｐ８－Ｐ９	１８０			Ｐ６－Ｐ８	１６７
		Ｐ９－Ｐ10	１７３	Ｐ３－Ｐ10	４９０	Ｐ３－Ｐ５	１７２
						Ｐ５－Ｐ７	１６０
						Ｐ７－Ｐ10	１５９
平均	３６１	１８３.２		４８１		１６０.８	

Ｐｉｔ	深さ（cm）	長径（cm）	短径（cm）	堀り方
Ｐ１	６４	３８	２７	楕円形
Ｐ２Ａ	２８	５２	２７	楕円形
Ｐ２Ｂ	３２			
Ｐ３	７８	３２	３０	円形
Ｐ４	５０	３０	２５	楕円形
Ｐ５	４１	３０	２８	円形
Ｐ６	１５	３２	２７	楕円形
Ｐ７	６２	２８	２６	円形
Ｐ８	７８	３３	３１	円形
Ｐ９	４４	３４	３２	円形
Ｐ10	８４	３２	３０	円形
平均	５２.４	３４.１	２８.３	

掘立柱建物跡３号計測表

梁間間（cm）		梁間柱間（cm）		桁行間（cm）		桁間柱間（cm）	
Ｐ１－Ｐ３	２８０	Ｐ１－Ｐ２	１４４	Ｐ１－Ｐ５	３１６		
		Ｐ２－Ｐ３	１３８				
Ｐ５－Ｐ７	２９３	Ｐ５－Ｐ６	１４０				
		Ｐ６－Ｐ７	１５３	Ｐ３－Ｐ７	３２７	Ｐ３－Ｐ４	１６６
						Ｐ４－Ｐ７	１６３
平均	２８６．５	１４３．８		３２１．５		１６４．５	

Ｐｉｔ	深さ（cm）	長径（cm）	短径（cm）	堀り方
Ｐ１	２４	２４	２２	円形
Ｐ２	２８	２５	２５	円形
Ｐ３	２７	３０	２８	円形
Ｐ４	１２	４０	２７	楕円形
Ｐ５	３５	３１	３０	円形
Ｐ６	３０	４５	２８	楕円形
Ｐ７	２６	２４	２３	円形
平均	２６	３１．３	２６．１	円形

掘立柱建物跡４号計測表

梁間間（cm）		梁間柱間（cm）		桁行間（cm）		桁間柱間（cm）	
Ｐ１－Ｐ３	３０３	Ｐ１－Ｐ２	１４７	Ｐ１－Ｐ８	５２０	Ｐ１－Ｐ４	１５３
		Ｐ２－Ｐ３	１５２			Ｐ４－Ｐ６	１８９
Ｐ８－Ｐ９	３５０	Ｐ８－Ｐ９	１７５			Ｐ６－Ｐ８	１７６
		Ｐ９－Ｐ10	１８０	Ｐ３－Ｐ10	５４１	Ｐ３－Ｐ５	１９０
						Ｐ５－Ｐ７	１８８
						Ｐ７－Ｐ９	１６５
平均	３２６．５	１６３．５		５３０．５		１７６．８	

Ｐｉｔ	深さ（cm）	長径（cm）	短径（cm）	堀り方
Ｐ１	４５	３０	２５	楕円形
Ｐ２	３４	２６	２５	円形
Ｐ３	４８	３０	２７	楕円形
Ｐ４	２２	２３	２３	円形
Ｐ５	５０	２４	２３	円形
Ｐ６	５０	２９	２８	円形
Ｐ７	４１	３１	２７	楕円形
Ｐ８	４２	２６	２２	楕円形
Ｐ９	２６	３８	３０	楕円形
Ｐ10	４３	４７	２８	楕円形
平均	４０．１	３０．４	２５．８	

②土坑（第52・第53図）

B－10～12区，C－10区で，土坑が3基検出された。いずれも浅く，プランも不整形で，遺物の出土も少量であった。したがって，土坑の性格等は不明である。

1号土坑（第52図）

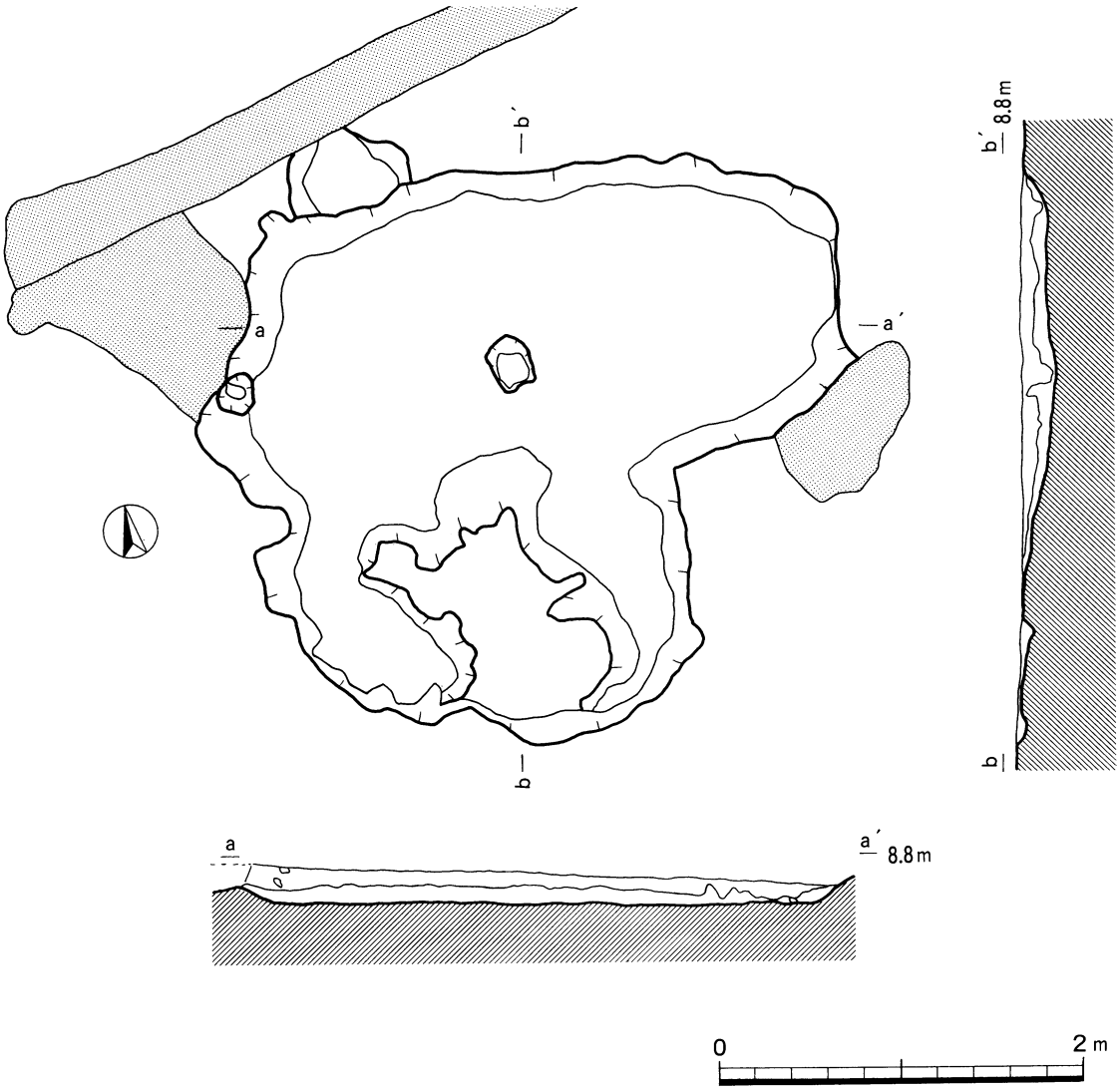
B－10・11区で検出された。中央部と西壁にピットがみられるが，土坑に伴うものではない。深さは，20cmを残す。

2号土坑（第53図）

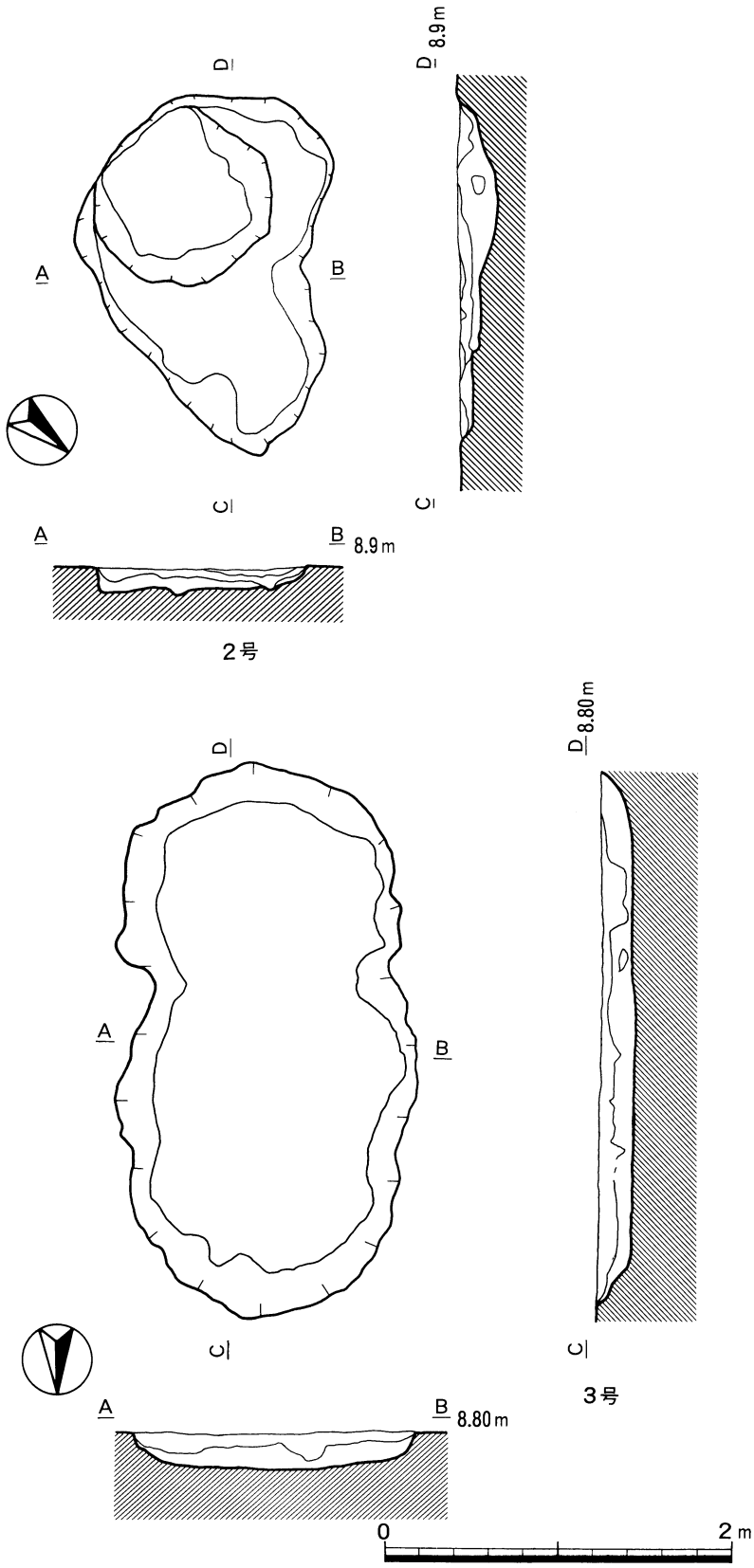
C－10区で検出された。長軸方向には2段の平坦面を有し，壁面がゆるやかに立ち上がる。短軸方向では，壁面の立ち上がりが急である。深さは，20cmを残す。

3号土坑（第53図）

B－11・12区で検出された。3.2×1.6mのほぼ楕円形を呈するが，南側の一部で幅が狭くなる。壁面はゆるやかに立ち上がる。深さは，20cmを残す。



第52図　1号土坑実測図



第53図　2・3号土坑実測図

（3）出土遺物

第2地点では，古代を中心とする多量の土師器や須恵器が出土したが，ほとんどは近世以降の盛土中からの出土である。しかしながら，本遺跡周辺から持ち込まれたと考えられるため，良好に復元できたものを中心に掲載することとした。

①土師器（第54図）

土師器の坏，埦，甕，黒色土器等が出土している。

a）坏（236～239）

236～239は，坏である。全て底部切り離しは，ヘラ切りである。分類の基準は，第1地点と共通している。

・**坏Ⅰ類**　円盤状の底部を有していないもの。

・**坏Ⅱ類**　円盤状の底部を有するもの。

・**坏Ⅰ類**（236・237）

236は，体部が直線的に立ち上がる。底面の調整は粗く，植物繊維の圧痕が残る。237は，体部がほぼ直線的に立ち上がる。体部の立ち上がり部分をヘラ状の工具で削って調整している。ローリングを受けている。

・**坏Ⅱ類**（238・239）

238は，体部が横に開いたあとゆるやかに内湾しながらのびて，口縁部近くで内湾し，ほぼ直に立ち上がる。239は，体部がゆるやかに内湾しながらのびる。ローリングを受けている。

b）埦（240～247）

240～247は，埦である。分類基準は，第1地点と共通するが，埦Ⅰa類は出土していない。

・**埦Ⅰa類**　比較的短くどっしりとした高台を有する。

・**埦Ⅰb類**　比較的長く「ハ」の字にひらいた高台を有する。

・**埦Ⅰc類**　短くつまみだしたような高台を有する。

・**埦Ⅱ類**　　充実高台を有する。

・**埦Ⅰb類**（240～245）

240は，高台が非常に長く横に張り出し体部が直線的にのびる。口径は，17cmを測り比較的大きい。241は，高台は途中で破損している。体部は，やや横に張り出したのち，ほぼまっすぐにのびる。242は，体部が丸みを帯びてのびている。243は，細長く横に張り出す高台を有し，体部が丸みを帯びている。244は，体部はほぼ直線的にのびるが，口縁部付近で内湾する。ローリングを受けている。245は，体部がかなり丸みを帯びており，口縁部で外反する。ローリングを激しく受けている。

・**埦Ⅰc類**（246）

246は，短い高台が貼り付けられている。体部は丸みを帯びており，口縁部でやや外反する。

・**埦Ⅱ類**（247）

247は，充実高台を有する。体部は，ほぼ直線的にのびる。

c）甕（248・249）

248は，胴部がほぼまっすぐにのびて，口縁部で「く」の字に外反する。外面の調整が粗く，

粘土紐の輪積みの痕跡が残る。内面にはヘラ削りの痕跡が残る。口唇部に指頭圧痕が残る。胎土に軽石などの不純物が多量に混ざっており，もろい。ローリングを受けている。249は，ひろがりながら立ち上がり，口縁部でゆるやかに外反する。ローリングを激しく受けているが，内面胴部にヘラ削り，外面口縁部にナデ調整の痕跡が残る。

d）黒色土器（250～252）

黒色土器は，3点を図化した。250・251は，A類である。252は，B類である。

250は，埦の底部付近である。高台が長く横に張り出し，体部はほぼ直線的にのびる。見込みの周辺部にくぼみが廻っている。高台を貼り付けたあとの調整が粗い。ローリングを受けている。251は，埦の底部付近である。高台が長く横に張り出し，体部は曲線的にのびる。高台を貼り付けたあとの調整が丁寧に施されている。252は，黒色土器B類である。底部が欠損しており，坏か埦かの区別ができない。ローリングを受けており，ミガキの方向が確認できない。

②須恵器（第54図・第55図）

須恵器は，高台付坏，坏，甕，壺等が出土している。

a）高台付坏（253）

253は，高台付坏の底部付近である。高台は，ほぼ直に貼り付けられており，内面は2段階に調整されている。

b）坏（254）

254は，坏の底部付近である。底面の調整が粗く，中心部が盛り上がっている。

c）甕（255～258）

255～258は，甕である。いずれも口縁部を中心とした上部である。

255は，口唇部に約1㎝の平坦面を有する。外面は，口唇部付近はナデ調整が施され，屈曲部から下部は，幅3～4㎜の櫛目が1.3㎝で5条を1単位に施されている。ただし，全面ではなく，ナデ調整が施されている部分もある。内面は，口唇部の立ち上がり部分に幅7㎜，深さ0.5㎜程の工具の削りと思われるわずかなくぼみが廻る。256は，口唇部に約1.3㎝の平坦面を有する。外面は，ナデ調整を基本として屈曲部に幅2㎜，高さ1.5㎜の粘土紐がめぐり，その上下に沈線が廻る。その下部には，3条を1単位とする櫛描波状文が施されている。257は，口唇部に平坦面を有する。屈曲部には幅4㎜の粘土紐が廻るが，先端は欠損している。その下部には，5条を1単位とする櫛描波状文が廻っている。258は，口唇直下が調整により断面三角形を呈している。内外面とも口縁部はナデ調整が施されている。屈曲部より下部の外面は横位の平行叩き目が，内面は同心円状の当て具痕が残る。

d）壺（259・260）

259・260は，壺である。

259は，肩部である。外面は横位の平行叩き目が残る。内面は粗いナデ調整が施され，指頭圧痕が残る。260は，胴部である。外面は横位と斜位の平行叩き目が残る。内面は粗いナデ調整が施され指頭圧痕，爪状の痕跡が残る。

③青磁（第55図）

越州窯系の青磁が出土している。

261は，大碗の底部付近である。高台は削りが施され，幅1㎝の畳付が作り出されている。高台内は調整が粗い。体部はまっすぐに立ち上がる。外面の底部付近は，無釉の部分が波状になっている。内外面に4か所ずつ目跡が残る。底面の目跡の周囲は，橙色に変色している。262は，碗の底部付近である。高台は中心に向かってなだらかにくぼむ。高台と体部の境界にV字状の沈線が廻る。体部は立ち上がったあと，わずかに外反するようであるが，欠損しているため詳細は不明である。外面の底部付近は無釉で，一部にしか釉がかかっていない。内面に3か所目跡が残る。細かい貫入がみられる。263は，碗の底部付近である。高台は中心に向かってなだらかにくぼむ。高台と体部の境界にV字状の沈線が廻る。体部はなだらかに内湾しながら立ち上がる。外面の残存部は無釉で，赤褐色を呈している。内面に2か所目跡が残る。264は，碗の底部付近である。蛇の目高台を有し高台内に3条の沈線が施されている。体部は残存部では直線的に立ち上がる。畳付に3か所の目跡が残る。内面には細かい貫入がみられる。

③その他（第56図）

その他の古代の遺物として，紡輪，線刻土器，円盤型土製加工品，焼塩土器，土錘，瓦などが出土している。

a）紡輪（265）

265は，土師器坏の底部を紡錘車の紡輪として再加工したものである。中心部に直径9㎜の孔が穿たれている。ローリングを受けている。

b）線刻土器（266）

266は，土師器坏の底部であるが，内面の2か所に線刻が施されている。

c）円盤型土製加工品（267・268）

267・268は，円盤型土製加工品である。

267は，胎土の観察から土師器甕の一部を用いて作られていると思われる。ローリングを受けているために調整法が確認できず，断定はできない。

268は，直径1.7㎝と小型の円盤型土製加工品である。胎土の観察から，土師器の坏・埦・皿のいずれかを再加工していると思われる。

d）焼塩土器（269）

269は，焼塩土器の一部である。内面に布目の圧痕が残る。

e）モミ痕のある土師器埦（270）

270は，モミと思われる圧痕が底面に残る土師器の充実高台の埦である。圧痕を顕微鏡観察したところ，わずかに格子状の組織痕が認められた。

f）土錘（271～275）

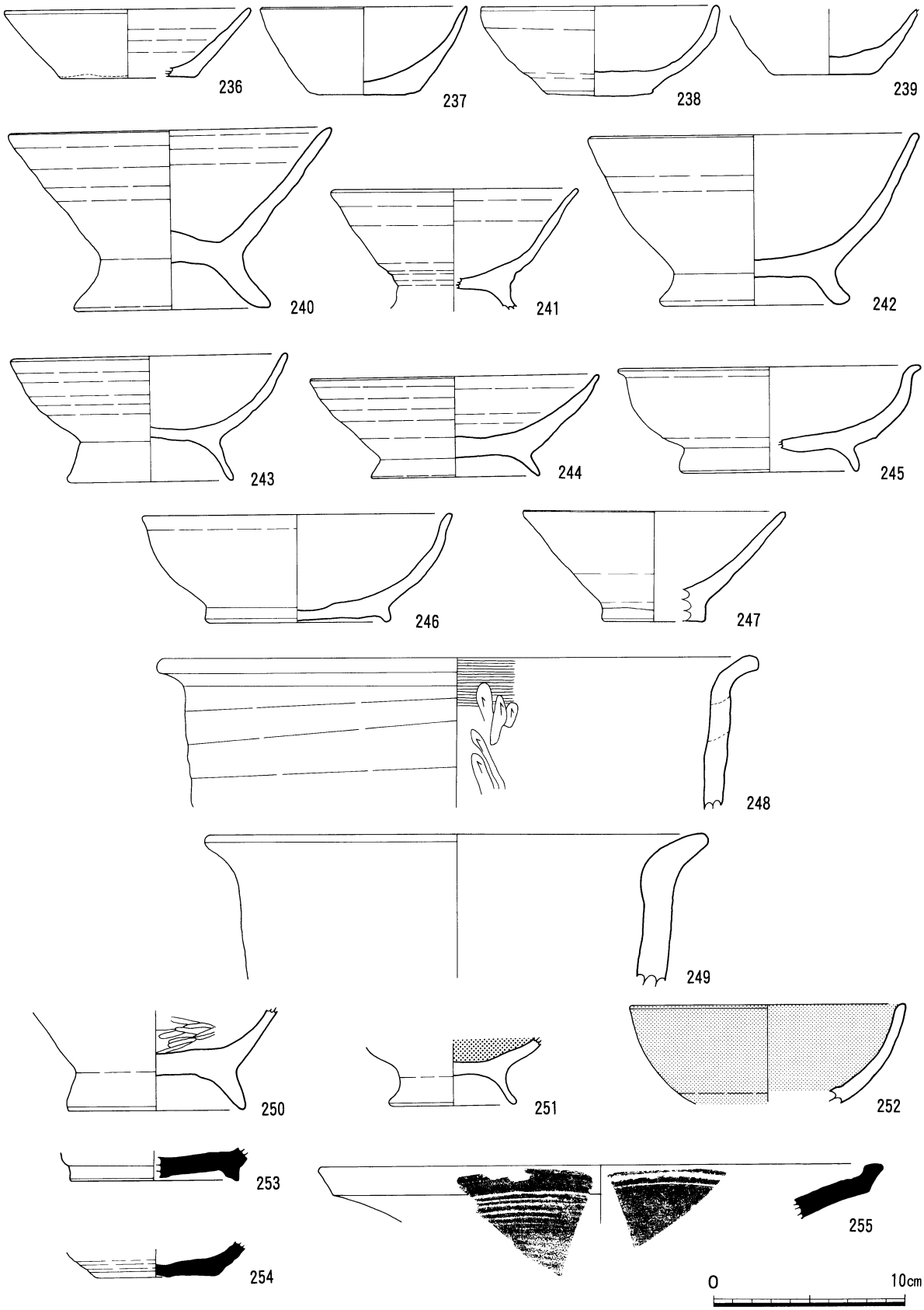
271～275は，土錘である。土錘については時期の認定が困難であるため，古代とはしているが，断定はできない。

271～273は，おおむね紡錘状のものに孔を貫通させた管状土錘である。

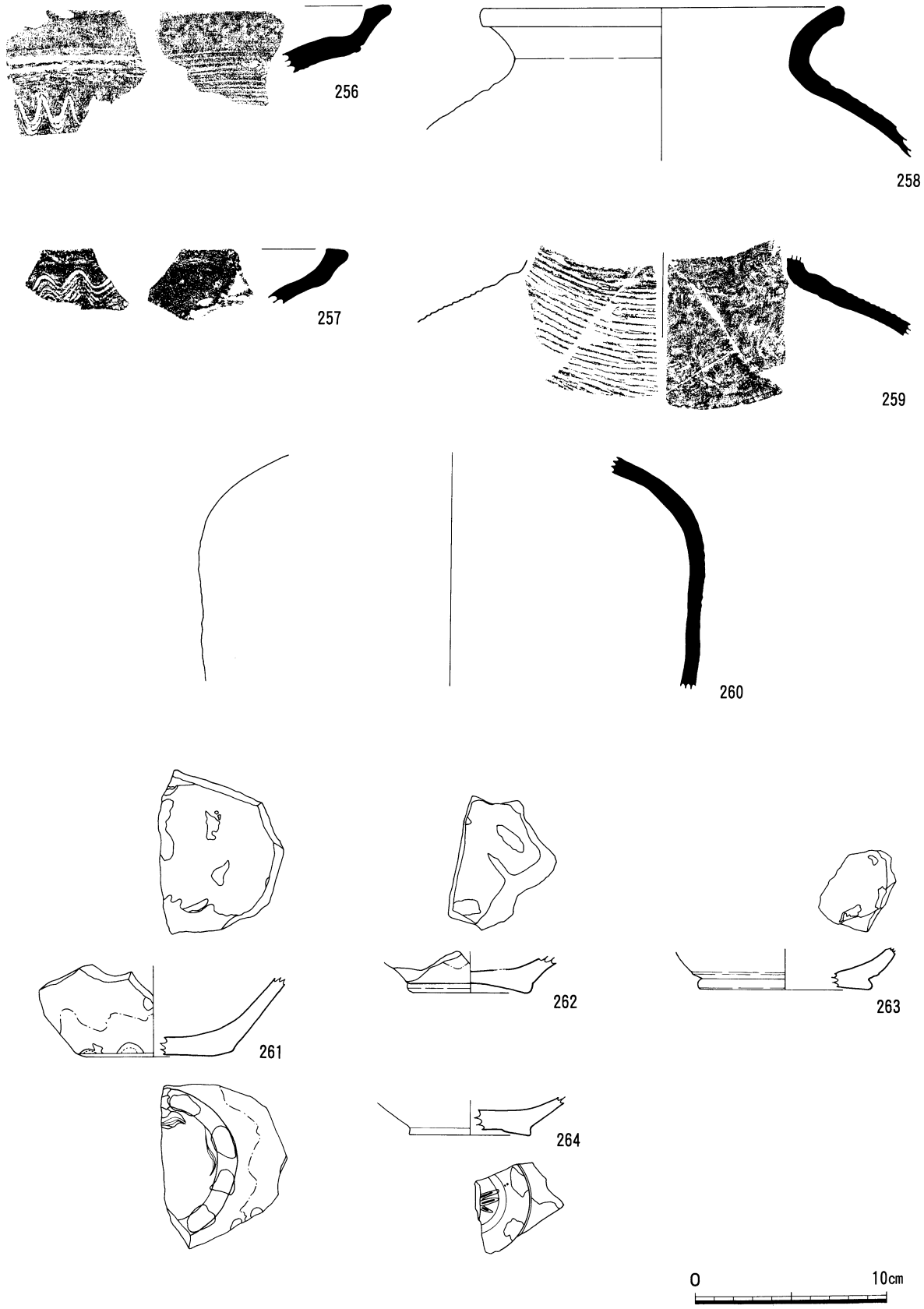
274・275は，棒状のものの両端をややつぶして孔をあける双孔棒状土錘である。

g）瓦（276）

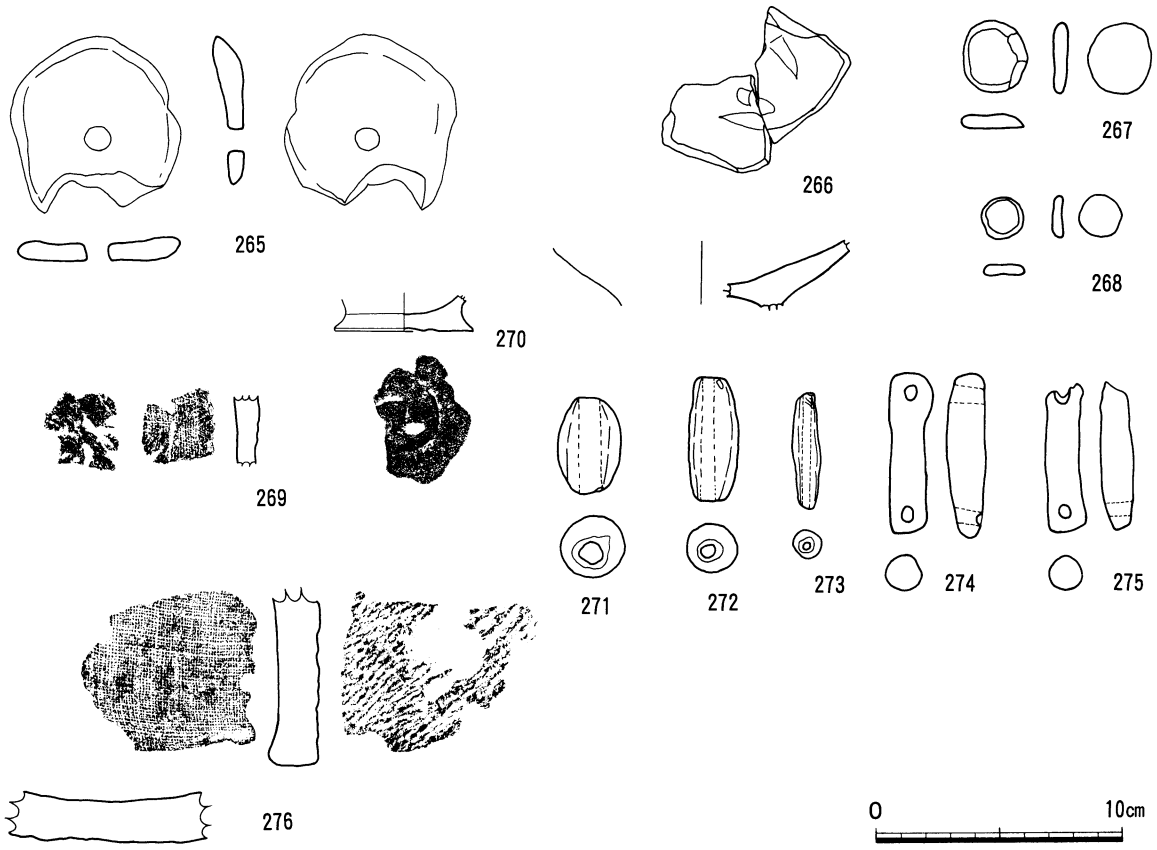
276は，平瓦である。表面に布目が，裏面に縄目叩きがみられる。



第54図　第２地点出土遺物Ⅰ（古代）



第55図　第２地点出土遺物Ⅱ（古代）



第56図　第２地点出土遺物Ⅲ（古代）

第２節　中世の調査

（１）調査の概要

中世については，全調査区にわたって遺物包含層は確認されず，遺構も検出されなかった。表土層中から磁器等の遺物が出土しているので，掲載することとした。古代の調査の概要でも述べているように，表土層は近世以降（江戸時代末か）の盛土であり，土砂の採取地はそう遠くはないと思われるが，原位置ではない。

（２）出土遺物（第57図）

①青磁

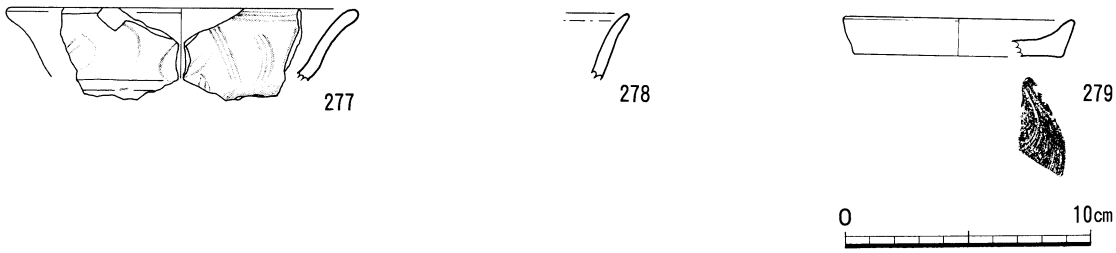
277は，稜花皿である。体部は，内湾しながら立ち上がり口縁部で外反する。貫入がみられる。

②白磁

278は，口禿の白磁である。口縁部でやや外反している。貫入がみられる。

③土師器

279は，土師器の皿である。底部切り離しは糸切りである。



第57図　第２地点出土遺物Ⅳ（中世）

白金原遺跡

第６章　白金原遺跡の調査の概要

第１節　白金原遺跡の調査

（１）調査の概要

遺物の散布が認められた工事計画地内に14か所のトレンチ（合計250㎡）を設定し，確認調査を実施した。その結果，予想された古墳時代～中世の遺物包含層は認められなかった。14トレンチでは畠跡と思われる遺構が検出された。１トレンチと６トレンチの状況から，遺構の広がりは１トレンチから６トレンチの間に限定されると判断した。遺物包含層は確認されず，遺構の検出のみを実施した。遺構検出のみの調査であるため，調査杭は設置したが，グリッドの設定は行っていない。

（２）検出遺構

古代以降と思われる，畠跡，溝状遺構６条が検出された。

①畠跡（第58図）

Ｖ層の黄橙色砂層に幅約25㎝，長さ約２ｍ，深さ約５㎝の黒色の埋土を伴う掘り込み（畝間）が50条以上も平行に検出された。畝間と平行する比較的長く浅いくぼみが検出されており，畦道であった可能性がある。小片のため図化していないが，埋土からは土師器や須恵器の小片が出土しており，古代以降の畠跡である可能性が高いと判断した。

②溝状遺構（第58図）

出土遺物が少なく，時期設定は困難であるが，切り合い関係は確認できた。

溝状遺構Ⅰは，N-24°-W方向にのびる。溝状遺構Ⅱを切っており，畠跡，溝状遺構Ⅲ・Ⅴに切られている。

溝状遺構Ⅱは，N-29°-W方向から北向きに曲がりN-24°-Wに再び曲がる。畠跡，溝状遺構Ⅰ・Ⅲ・Ⅴに切られている。

溝状遺構Ⅲは，N-43°-Eにのびる。溝状遺構Ⅰ・Ⅱを切っており，畠跡に切られている。

溝状遺構Ⅳは，N-44°-Eにのびる。畠跡に切られている。

溝状遺構Ⅴは，N-43°-Eにのびる。畠跡，溝状遺構Ⅰ・Ⅱを切っている。

溝状遺構Ⅵは，N-46°-Eにのびる。切り合い関係は認められない。

（３）出土遺物（第59図）

遺跡全体で，パンケース1箱分の遺物が出土している。いずれも小片のため，10点を選んで図化した。掲載点数が少ないため，縄文時代以降の遺物を一括して掲載することとした。

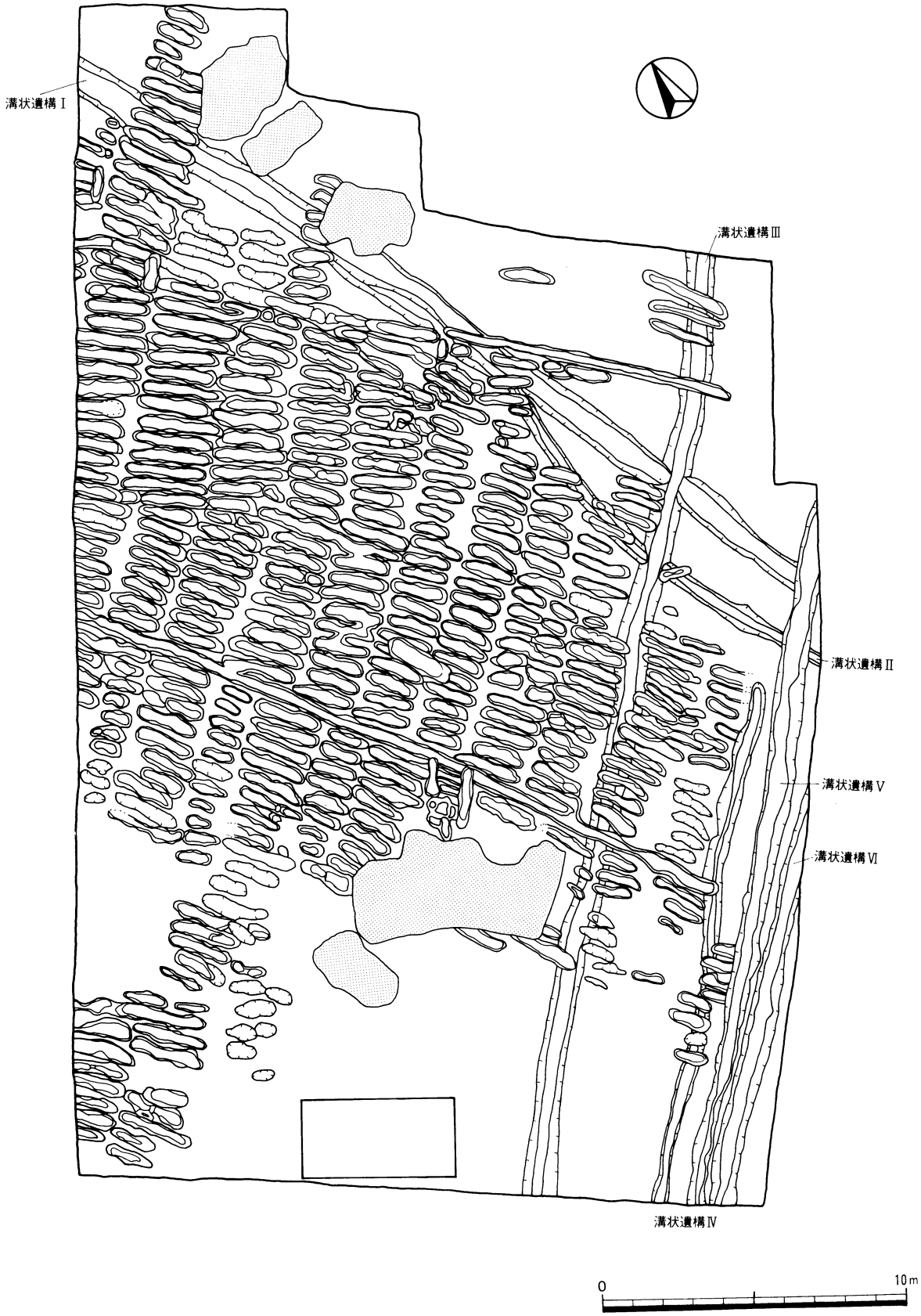
①縄文時代の遺物（１）

１は，円盤型土製加工品（通称メンコ）である。凹線が施されており，縄文時代後期の土器を加工したものである。

②弥生時代の遺物（２～６）

２～５は，弥生時代の甕の口縁部，６は，壺の肩部である。いずれも小破片で，ローリングを受けている。

２～４は，口唇部の断面が三角形を呈し，鋭く屈曲しているものである。



第58図　白金原遺跡遺構配置図

2は，口唇部の周囲にV字形の刺突が施されている。3は，口唇部の周囲に1条の沈線が廻る。4は，分厚い口唇部を有している。

5は，口唇部内面がややくぼみ，内側に張り出している。屈曲が弱く，「く」の字に外反している。

6は，屈曲部の直上に突帯が1条廻っている。

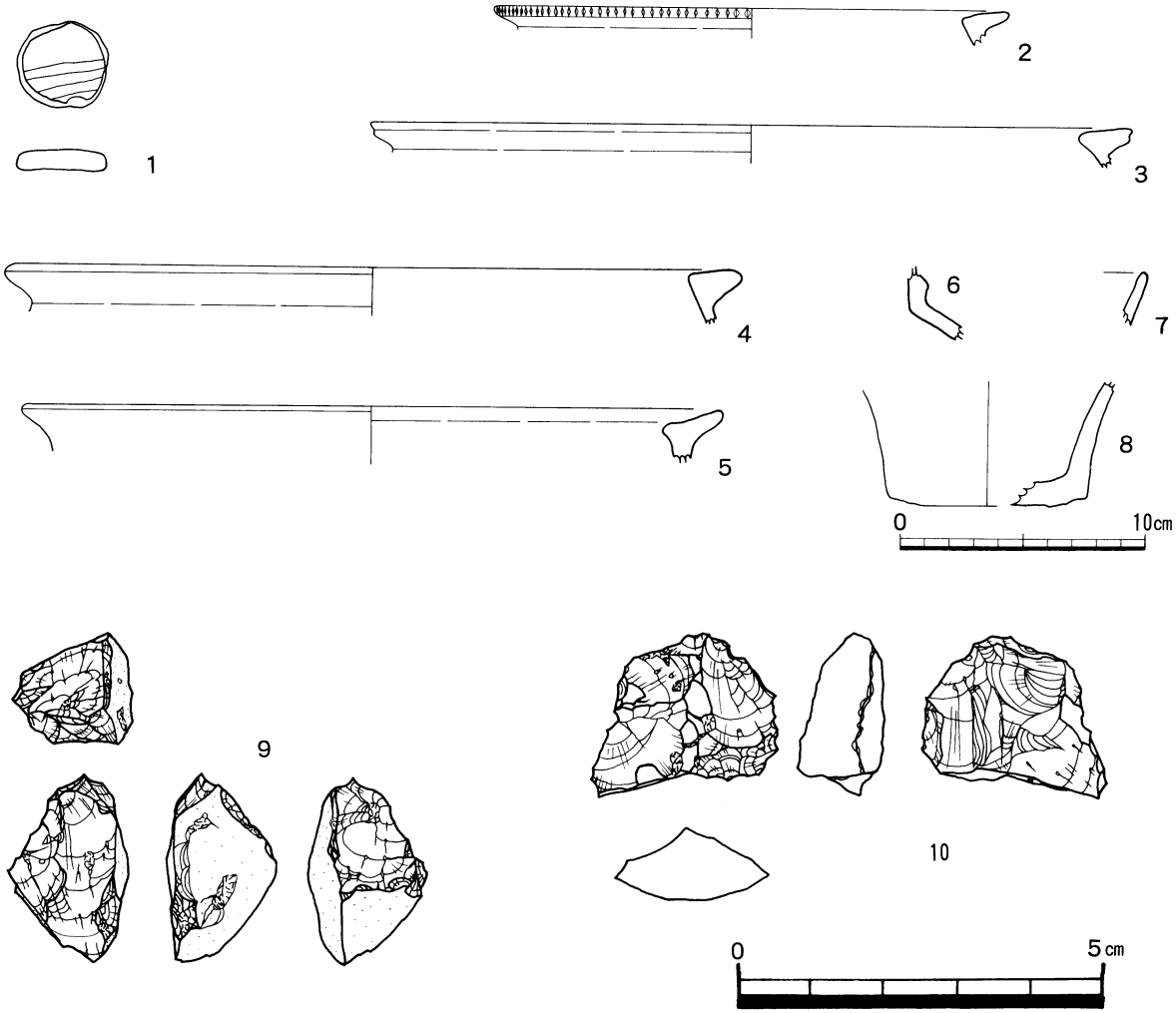
③古代の遺物（7）

7は，土師器の坏か椀の口縁部を含む破片である。

④時期不詳の遺物（8～10）

8は，土器の底部である。内外面ともナデ調整が施されている。小破片のため詳細は不明であるが，縄文時代中期の土器の底部である可能性がある。

9・10は，黒曜石である。9は，石核である。10は，剥片である。いずれも鹿児島市の三船産の黒曜石に類似している。



第59図　白金原遺跡出土遺物

第７章　出土遺物観察表

凡　　例

1．番号は，本文・挿図中の番号と一致する。
2．注記は，遺物の取り上げ番号である。
3．色調については，「新版標準土色帖」2001年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）によっている。ただし，オリーブを緑に置き換えているなど，日本語としてなじみの薄い色名を変更している。
4．特に記載していない場合，口径や底径などの長さの単位は「cm」，重さの単位は「ｇ」である。
5．土師器埦や，須恵器高台付坏などの高台高は，最も高い部分を計測した。
6．備考欄に用途などを記載する際に，確定できないものについては，末尾に「か」を付けた。

第９図　古墳時代出土遺物

番号	注記番号	出　土　区	層	胎　　土	色　調	口径	器高	底径	備　　考
1	411	E-6	Ⅱ	角閃石・石英・茶粒	灰白	－	－	－	甕胴部
2	1790	D-3	Ⅱ	石英	淡黄	－	－	－	甕胴部
3	－	2 T	表	角閃石・石英・茶粒	浅黄橙	－	－	7.0	甕底部
4	716	D-5	Ⅱ	角閃石・石英	橙	－	－	7.0	甕底部
5	－	D-8	表	角閃石・石英・長石	橙	－	－	8.4	甕底部
6	－	D-6	表	茶粒	浅黄橙	－	－	1.7	手づくね

第12図　方形周溝出土遺物

番号	注記番号	出　土　区	胎　　土	色　調	口径	器高	底径	高台高	備　　考
7	2301	D-3周ボ	角閃石	灰白	10.8	2.7	4.8	－	土師器坏
8	2300	D-3周ボ	茶粒	浅黄橙	10.6	2.8	5.2	－	土師器坏
9	1924	D-3SF	茶粒	浅黄橙	11.2	2.5	5.0	－	土師器皿
10	2302	D-５周ボ	茶粒	浅黄橙	10.2	2.3	5.8	－	土師器皿
11	1913	D-4	茶粒	灰白	10.0	2.2	5.8	－	土師器皿
12	2304	D-3周ボ	茶粒	灰白	10.1	2.2	6.4	－	土師器皿
13	2358	D-４周ボ	茶粒	橙	10.0	1.2	8.0	－	土師器皿
14	2303	D-3周ボ	角閃石・茶粒	灰白	9.8	3.6	6.6	0.9	土師器埦
15	2351	D-４周ボ	茶粒	浅黄橙	13.2	5.0	7.8	0.8	黒色土器A類埦
16	2380	D-４周ボ	茶粒	灰黄	－	－	－	－	黒色土器A類口縁
17	2357	D-４周ボ	－	黒	－	－	－	－	黒色土器B類
18	2360	D-４周ボ	茶粒	黒	－	－	－	－	黒色土器B類
19	2334	D-３周ボ	－	黒	－	－	－	－	黒色土器B類口縁
20	2279	D-３・４周ボ	茶粒	橙	－	－	－	－	焼塩土器

番号	注記番号	出　土　区	胎　　土	色　調	長さ	幅	孔径		備　　考
21	2361	D-４周ボ	茶粒	鈍黄橙	4.0	1.5	0.5	－	管状土錘

第17図　溝状遺構Ⅰ出土遺物

番号	注記番号	出　土　区	胎　　土	色　調	口径	器高	底径	高台高	備　　考
22	2223	C-3SD	石英・茶粒	浅黄	－	－	－	－	成川式土器胴部
23	2293	D-3溝	茶粒	黄橙	13.2	4.5	5.8	－	土師器坏
24	2288	C-3SF	茶粒	橙	12.8	4.8	7.2	－	土師器坏
25	2235	D-3SD	茶粒	橙	－	－	6.8	－	土師器坏
26	2228	C-3SD	茶粒	浅黄橙	11.6	4.8	5.4	－	土師器坏
27	2239	D-3SF	茶粒	淡黄	－	－	8.6	1.2	黒色土器A類底部

第18図　溝状遺構Ⅱ出土遺物

番号	注記番号	出　土　区	胎　　土	色　調	口径	器高	底径	高台高	備　　考
28	2296	D-3	角閃石・茶粒	浅黄橙	14.8	7.7	6.6	1.0	黒色土器A類埦
29	1689	D-3	茶粒	浅黄橙	12.8	4.6	7.5	0.6	黒色土器A類埦

第19図　溝状遺構Ⅲ出土遺物

番号	注記番号	出　土　区	胎　　土	色　調	口径	器高	底径	高台高	備　　考
30	2325	D-3周ボ	茶粒	浅黄橙	10.8	2.2	6.8	－	土師器皿
31	2172	D-3SF	茶粒	浅黄橙	15.7	6.3	7.4	0.6	黒色土器A類
32	1919	D-3SF	－	灰白	－	－	7.2	－	須恵器高台付坏

第20図　溝状遺構Ⅳ出土遺物

番号	注記番号	出　土　区	胎　　土	色　調	口径	器高	底径	高台高	備　　考
33	SD20	D-14	角閃石・茶粒	鈍橙	－	－	－	－	成川式土器台付鉢
34	SD19	D-15	茶粒	橙	10.2	4.3	5.0	－	土師器坏
35	SD15	D-15	石英・茶粒	浅黄橙	－	－	7.0	－	土師器坏
36	76	D-14	茶粒	浅黄橙	－	－	8.2	0.9	土師器埦
37	SD32	D-14	茶粒	浅黄橙	－	－	8.0	0.8	黒色土器A類埦底部
38	SD40	D-14	－	赤褐	－	－	－	－	須恵器甕
39	SD36	D-14	－	褐灰	－	－	－	－	須恵器甕

番号	注記番号	出　土　区	胎　　土	色　調	長さ	幅	孔径		備　　考
40	SD35	D-14	－	鈍黄褐	4.4	1.7	0.5	－	土錘

番号	注記番号	出　土　区	胎　　土	色　調	口径	器高	底径		備　　考
41	－	D-14・１５	－	橙	－	－	－	－	器物の脚部
42	SD25	D-14	－	橙	－	－	7.0	－	土師器坏糸切り
43	－	D-14・15	－	鈍黄橙	－	－	13.2	－	瓦質土器鉢
44	－	D-14	角閃石・茶粒	鈍黄橙	－	－	－	－	フイゴ羽口
45	SD16	D-14・15	茶粒	灰黄	39.8	14.0	13.6	－	瓦質土器擂鉢
46	SD21	D-14	茶粒	暗赤褐	27.6	－	－	－	備前系擂鉢
47	SD34	D-14	茶粒	暗赤褐	28.1	13.9	14.0	－	備前系擂鉢

第23図　１号竪穴出土遺物

番号	注記番号	出　土　区	胎　　土	色　調	口径	器高	底径	高台高	備　　考
48	104	D-11	茶粒	鈍橙	－	－	－	－	青磁碗，蓮弁文

第24図　２号竪穴出土遺物

番号	注記番号	出　土　区	胎　　土	色　調	口径	器高	底径	高台高	備　　考
49	69	D-11	茶粒	浅黄橙	15.6	－	－	－	土師器坏
50	50	D-11	茶粒	浅黄橙	－	－	5.6	－	土師器充実高台埦
51	166	D-11	茶粒	浅黄橙	－	－	5.4	－	土師器充実高台埦
52	59	D-11	茶粒	橙	－	－	6.6	1.2	土師器埦
53	63	D-11	茶粒	橙	－	－	7.3	1.5	黒色土器A類埦
54	173	D-11	－	赤褐	22.6	－	－	－	須恵器甕口縁

第25図　３号竪穴出土遺物

番号	注記番号	出　土　区	胎　　土	色　調	長さ	幅	孔径	備　　考
55	213	D-10・１１	茶粒	灰白	5.4	1.9	0.8	管状土錘

第26図・第27図　土師器（坏）

番号	注記番号	出　土　区	層	分類	胎　土	色　調	口径	器高	底径	備　　考
56	－	D-15	Ⅱクロカ	Ⅰ	茶粒	黄橙	17.4	6.4	8.6	
57	－	D-11	土坑	Ⅰ	茶粒	灰白	8.3	3.0	6.2	
58	－	E-10	表	Ⅰ	－	黄橙	－	－	7.5	
59	1046	D-4	Ⅱ	Ⅱ	角閃石・茶粒	淡黄	－	－	6.4	
60	1819	D-3	Ⅱ	Ⅱ	－	灰白	－	－	5.6	
61	1767	D-3	Ⅱ	Ⅱ	茶粒	浅黄橙	－	－	5.4	
62	1193	D-3	Ⅱ	Ⅱ	茶粒	浅黄橙	－	－	6.5	
63	623	E-5	Ⅱ	Ⅱ	茶粒	黄橙	－	－	6.5	
64	2189	D-3	Ⅱ	Ⅱ	茶粒	灰白	－	－	5.7	
65	997	D-4	Ⅱ	Ⅱ	茶粒	橙	－	－	4.8	
66	－	D-15	表	Ⅱ	茶粒	橙	－	－	6.0	赤色土器の可能性有
67	－	D-4	表	Ⅱ	茶粒	橙	－	－	7.4	
68	－	D-3	表	Ⅱ	茶粒	淡黄	－	－	5.6	
69	－	D-15	Ⅱクロカ	Ⅱ	茶粒	浅黄橙	－	－	5.3	

第28図・第29図　土師器（埦）

番号	注記番号	出　土　区	層	分類	胎　　土	色　調	口径	器高	底径	高台高	備　　考
70	1682	D-3	Ⅱ	Ⅰａ	茶粒	淡黄	－	－	8.4	0.6	
71	1803	D-3	Ⅱ	Ⅰａ	茶粒	浅黄橙	－	－	6.1	0.2	
72	70	D-14	クロ	Ⅰａ	茶粒	浅黄橙	－	－	－	－	
73	－	D-14	撹乱	Ⅰａ	茶粒	浅黄橙	－	－	7.4	0.9	
74	－	D-15	Ⅱクロカ	Ⅰａ	茶粒	浅黄橙	－	－	8.9	0.8	
75	－	D-15	Ⅱクロカ	Ⅰｂ	茶粒	浅黄橙	－	－	6.8	1.5	
76	－	D-4	表	Ⅰｃ	茶粒	橙	－	－	6.8	－	
77	1828	D-3	Ⅱ	Ⅱ	茶粒	浅黄橙	－	－	6.4	－	
78	1058	D-4	Ⅱ	Ⅱ	角閃石・石英	浅黄橙	－	－	6.0	－	
79	－	D-4	クロ	Ⅱ	茶粒	黄橙	－	－	8.0	－	

第30図　土師器（皿）

番号	注記番号	出　土　区	層	胎　　土	色　調	口径	器高	底径	備　　考
80	1047	D-4	Ⅱ	－	浅黄橙	11.2	1.8	5.2	
81	1240	D-3	Ⅱ	茶粒	淡橙	10.8	2.5	6.8	
82	1612	D-3	Ⅱ	茶粒	鈍黄橙	11.2	2.1	5.7	
83	1236	D-3	Ⅱ	茶粒	浅黄橙	－	－	－	
84	－	D-12	撹乱	－	浅黄橙	－	1.5	－	

第31図　土師器（甕）

番号	注記番号	出 土 区	層	胎　　土	色　調	口径	器高	底径	高台高	備　考
85	1693	D-3	Ⅱ	角閃石・白粒	黒褐	26.0	－	－	－	
86	1345	D-3	Ⅱ	角閃石・石英	鈍黄橙	23.8	－	－	－	
87	1183	D-3	Ⅱ	角閃石・石英・長石	鈍黄橙	30.2	－	－	－	
88	－	－	－	茶粒	浅黄橙	25.5	－	－	－	
89	－	D-15	Ⅱクロカ	軽石・石英・長石	鈍黄橙	24.5	－	－	－	内・橙
90	－	D-15	Ⅱクロカ	角閃石・軽石・長石	鈍黄橙	21.0	－	－	－	

第32図　黒色土器

番号	注記番号	出　土　区	層	分類	胎　土	色　調	口径	器高	底径	高台高	備　　考
91	－	7T	Ⅰ	Ⅰ	－	橙	－	－	9.0	－	充実高台
92	928	D-4	Ⅱ	Ⅱ	茶粒	浅黄	－	－	－	－	
93	－	D-15	Ⅱクロカ	Ⅱ	茶粒	鈍黄橙	－	－	6.8	－	
94	444	D-6	Ⅱ	Ⅲ	石英・茶粒	浅黄橙	－	－	9.2	1.1	
95	1539	D-4	Ⅱ	Ⅲ	茶粒	鈍黄橙	13.0	－	－	－	
96	1757	－	－	Ⅲ	茶粒	灰白	－	－	8.1	1.2	
97	1817	D-3	Ⅱ	Ⅲ	茶粒	浅黄橙	－	－	－	－	
98	245	E-6	Ⅱ	Ⅲ	茶粒	浅黄橙	－	－	－	－	
99	1185	D-3	Ⅱ	Ⅲ	－	浅黄橙	－	－	－	－	
100	1701	D-3	Ⅱ	Ⅲ	茶粒	黄橙	－	－	－	－	
101	100	E-6	Ⅱ	Ⅳ	－	鈍黄橙	10.7	4.7	6.0	0.7	外面赤色顔料
102	1445	D-3	Ⅱ	Ⅴ	茶粒	浅黄	－	－	－	－	
103	1386	D-3	Ⅱ	Ⅴ	茶粒	浅黄	－	－	9.4	0.7	
104	1748	D-3	Ⅱ	Ⅴ	茶粒	浅黄橙	－	－	8.2	－	
105	1328	D-3	Ⅱ	Ⅴ	茶粒	黄橙	－	－	8.6	－	
106	1365	D-3	Ⅱ	Ⅴ	茶粒	浅黄橙	－	－	8.2	0.5	
107	1054	D-4	Ⅱ	Ⅴ	角閃石・茶粒	黄橙	－	－	7.8	0.8	
108	1030	D-4	Ⅱ	Ⅴ	茶粒	浅黄橙	－	－	－	－	

第33図～第36図　須恵器

番号	注記番号	出　土　区	層	胎　土	色　調	口径	器高	底径	備　　考
109	－	D-6	表	軽石	灰	－	－	7.0	坏
110	－	D-15	Ⅱクロカ	－	灰	－	－	6.0	坏
111	－	E-10	表	－	青灰	－	－	－	坏
112	－	D-17P7	－	－	橙	18.6	－	－	坏蓋・生焼け
113	－	D-13	表	－	灰	15.0	－	－	坏蓋
114	－	C-9	盛り土	－	灰白	－	－	－	坏蓋
115	1833	D-3	Ⅱ	茶粒	褐灰	－	－	－	高坏の脚部
116	642	E-5	Ⅱ	－	褐灰	－	－	－	甕胴部・格子－同心円
117	47	D-3	Ⅱ	－	灰白	－	－	－	甕胴部・格子－同心円
118	1342	D-2	Ⅱ	茶粒	橙	－	－	－	甕胴部・平行－同心円
119	－	E-11	拡表	茶粒・長石	浅黄	－	－	－	甕胴部・平行－同心円
120	334	E-6	Ⅱ	－	黄灰	－	－	－	甕胴部・平行－同心円
121	1258	D-3	Ⅱ	長石	褐灰	－	－	－	甕胴部・平行－同心円
122	－	D-15	Ⅱクロカ	茶粒	橙	－	－	－	甕胴部・平行－同心円
123	－	17T	表	－	暗赤褐	－	－	－	甕胴部・格子－中間
124	－	E-11	表	角閃石	黄灰	－	－	－	甕胴部・格子－中間
125	－	D-15	Ⅱクロカ	－	黒褐	－	－	－	甕胴部・格子－中間
126	－	D-7	表	茶粒	橙	－	－	－	甕胴部・平行－中間

番号	注記番号	出　土　区	層	胎　土	色　調	口径	器高	底径	備　　考
127	－	D-15	Ⅱクロカ	茶粒	赤褐	－	－	－	甕胴部・平行－中間
128	－	D-7	表	茶粒	赤褐	－	－	－	甕胴部・格子－平行
129	－	E-9・10	拡表	－	暗赤褐	－	－	－	甕胴部・格子－平行
130	－	－	表	－	灰褐	－	－	－	甕胴部・格子－平行
131	－	ME-9・10	拡表	－	灰褐	－	－	－	甕胴部・平行－平行
132	1233	D-3	Ⅱ	－	灰褐	－	－	－	甕胴部・平行－平行
133	921	D-4	Ⅱ	－	黄灰	－	－	－	甕胴部・平行－平行
134	－	D-7	表	－	赤褐	－	－	－	甕胴部・平行－平行
135	－	D-15	Ⅱクロカ	軽石	灰白	－	－	－	壺肩部
136	1548	D-4	Ⅱ	茶粒	暗赤	－	－	－	壺肩部
137	－	D-14SK	クロ	－	橙	－	－	－	壺胴部
138	－	24T	ⅠbⅡ	軽石	黄灰	－	－	－	壺胴部
139	671	D-5	Ⅱ	軽石	黄灰	－	－	－	壺胴部
140	666	D-5	Ⅱ	石英	灰白	－	－	－	壺胴部
141	1783	D-3	－	茶粒	黄橙	－	－	15.2	壺胴部～底部

第37図　その他の古代遺物

番号	注記番号	出　土　区	層	胎　土	色　調	口径	器高	底径	高台高	備　　考
142	－	D-11	表	茶粒	橙	－	－	－	－	香炉蓋
143	－	D-13	表	茶粒	橙	－	－	－	－	丹塗り
144	1127	D-4	Ⅱ	茶粒	黄灰	－	－	－	－	紡錘車？
145	－	D-15	Ⅱ	白粒・茶粒	橙	－	－	8.0	－	線刻土器
146	2398	E-5	溝	茶粒	浅黄橙	－	－	7.7	－	円盤型土製加工品？
147	1119	D-4	Ⅱ	石英・茶粒	鈍黄橙	－	－	－	－	焼塩土器

番号	注記番号	出　土　区	層	胎　土	色　調	長さ	幅	孔径		備　　考
148	1295	D-13	Ⅱ	角閃石	浅黄橙	－	2.4	0.7	－	管状土錘
149	664	D-15	Ⅱ	茶粒	鈍黄橙	－	2.4	1.0	－	管状土錘
150	44	D-14	－	－	褐灰	3.4	1.6	0.8	－	管状土錘
151	44	D-14	－	－	褐灰	－	1.6	0.8	－	管状土錘
152	1293	D-3	Ⅱ	－	鈍黄褐	3.8	1.5	0.4	－	管状土錘
153	－	D-11・12	表	茶粒	浅黄橙	3.9	1.3	0.4	－	管状土錘
154	－	E-6	表	角閃石	褐灰	3.5	1.3	0.5	－	管状土錘
155	618	E-5	Ⅱ	茶粒	鈍黄橙	－	1.2	0.4	－	管状土錘
156	－	19T	表	茶粒	浅黄橙	－	1.5	0.4	－	管状土錘

番号	注記番号	出　土　区	層	胎　土	色　調	口径	器高	底径	高台高	備　　考
157	589	E-5	Ⅱ	石英	橙	－	－	－	－	須恵器転用硯
158	－	D-10	撹乱	－	－	－	－	5.4	0.4	青磁・越州窯系古代

第40図　竪穴遺構出土遺物

番号	注記番号	出土区	釉	口径	器高	底径		備　　考
159	20	D-9・10	透明釉	－	－	4.6	－	肥前系陶器碗
160	62	D-9・10	透明釉	－	－	4.6	－	在地産陶器碗，蛇の目釉剥ぎ
161	39	D-9・10	灰釉	－	－	7.2	－	唐津系陶器大碗ｏｒ鉢
162	64	D-9・10	透明釉	13.4	3.8	5.4	－	肥前系磁器皿，蛇の目釉剥ぎ
163	68	D-9・10	鉄釉	10.2	5.7	6.2	－	加治木・姶良系陶器仏飯具，見込みに目跡

番号	注記番号	出土区	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備　　考
164	－	D-9・10	安山岩	11.5	－	－	1.15kg	砥石
165	32	D-9・10	砂岩	－	－	－	0.18kg	砥石

番号	注記番号	出土区	石材	径			重さ	備　　考
166	5	D-9・10	凝灰岩	30.6	－	－	0.38kg	碾き臼 or 捏鉢
167	8	D-9・10	凝灰岩	30.0	－	－	1.34kg	碾き臼

第41図　中世遺物Ⅰ

番号	注記番号	出　土　区	層	胎　土	色　調	口径	器高	底径	備　　考
168	－	E-9・10	拡表	茶粒	浅黄橙	12.4	3.0	8.6	土師器坏
169	－	D-12	表	－	灰白	－	－	5.4	土師器坏
170	－	1 2T	表	－	浅黄橙	－	－	7.2	土師器坏
171	3	D-11	－	－	橙	－	－	7.0	土師器皿
172	980	D-4	Ⅱ	茶粒	鈍橙	8.4	1.3	7.0	土師器皿
173	－	D-14	クロ	茶粒	黄橙	－	－	－	羽釜
174	－	2 2T	表	長石	紫灰	－	－	10.4	東播系捏鉢
175	857	D-4	Ⅱ	白粒・茶粒	鈍橙	－	－	－	備前系擂鉢
176	－	D-14・15	クロ	－	灰黄	24.6	－	－	瓦質擂鉢
177	－	D-11	撹乱	石英・茶粒	黄灰	－	－	－	瓦質擂鉢
178	－	D-8	表	長石	橙	30.0	－	－	瓦質火舎
179	－	D-8	表	金雲母・茶粒	浅黄橙	－	－	－	瓦質火舎
180	－	D-9	撹乱	－	浅黄橙	20.8	－	－	瓦質火舎
181	20	－	表	茶粒	橙	14.4	－	－	瓦質火舎

第42図　中世遺物Ⅱ（青磁）

番号	注記番号	出　土　区	層	口径	器高	底径	高台高	備　　考
182	－	C-6・7	クロカツ	－	－	6.0	0.6	龍泉窯系碗，蓮弁文
183	632	E-5	Ⅱ	－	－	－	－	龍泉窯系碗，鎬蓮弁
184	－	B-5	クロカツ	－	－	－	－	龍泉窯系碗，蓮弁文
185	－	D-14	クロ	－	－	－	－	坏口縁部，蓮弁文
186	－	D-14	表	－	－	6.0	0.9	碗底部，花のスタンプ，ラマ蓮弁
187	－	D-10	撹乱	－	－	－	－	碗口縁部，線描蓮弁文
188	－	D-15	表	－	－	5.3	0.9	碗底部
189	2	D-11	－	－	－	4.5	0.7	碗底部，花のスタンプ，線描蓮弁文
190	3	D-11	－	－	－	5.2	0.9	碗底部，線描蓮弁文
191	4	D-11	SKセイジ4	－	－	5.0	0.4	碗底部
192	－	E-10	表	13.7	6.3	4.6	0.6	碗
193	－	13T	表	－	－	6.3	0.6	碗底部
194	－	D-18.19	表	－	－	5.4	0.7	碗底部
195	－	5 T	Ⅰ	－	－	5.8	0.7	碗底部
196	－	D-11	－	12.1	3.2	6.5	0.6	稜花皿
197	－	6 T	表	－	－	5.6	0.5	稜花皿，花のスタンプ

第43図　近世遺物Ⅰ（陶磁器）

番号	注記番号	出土区	層	胎土	口径	器高	高台高	備　　考
198	近オチ47	D-9・10	－	灰白	11.4	5.4	4.7	肥前系，「太明嘉靖年製」
199	－	9 T	Ⅰ	灰白	－	－	6.2	肥前系，五弁花文
200	－	－	－	灰白	－	－	3.8	清朝青花，端反小碗
201	－	9 T	－	灰白	－	－	4.4	肥前系，端反碗
202	－	D-17	撹乱	灰白	10.5	5.8	4.1	在地産，端反碗
203	近オチ69	D-9・10	－	灰白	－	－	3.3	景徳鎮窯系，碁笥底皿，中世
204	SD30	D-14	－	灰	9.8	2.5	4.7	漳州窯系，蛇の目釉剥ぎ
205	－	9 T	Ⅰ	褐灰	－	3.8	－	唐津系陶器，稜花皿
206	近オチ35	D-9・10	－	灰白	－	－	5.3	肥前系，見込みに目跡
207	近オチ7	D-9・10	－	橙	－	－	10.0	肥前系，芙蓉手
208	－	－	－	灰白	13.9	2.7	6.9	肥前系，コンニャク印判五弁花文，蛇の目釉剥ぎ
209	－	2 T	表	灰白	9.8	2.6	4.2	在地産，蛇の目釉剥ぎ
210	－	－	－	灰白	10.0	2.7	5.6	在地産，青くてかる透明度の高い釉
211	－	12T	表	灰白	10.2	3.0	5.0	在地産，青くてかる透明度の高い釉

第44図　近世遺物Ⅱ

番号	注記番号	出土区	層	胎　土	色調	口径	器高	底径	備　考
212	－	E-11	カク表	茶粒	浅黄橙	－	－	－	土師質土器坏
213	－	D-18.19	土手表	茶粒	浅黄橙	19.1	3.4	15.3	焙烙
214	－	D-18.19	土手表	茶粒	浅黄橙	18.9	3.5	15.2	焙烙
215	－	D-18.19	土手表	茶粒	浅黄橙	－	－	－	焙烙
216	－	D-18.19	土手表	－	浅黄橙	－	－	－	焙烙取っ手
217	－	E-11	カク表	－	浅黄橙	－	－	－	焙烙取っ手
218	－	D-18.19	土手表	－	浅黄橙	－	－	－	焙烙取っ手
219	－	D-18.19	土手表	茶粒	浅黄橙	－	－	－	焙烙取っ手
220	－	D-11	表	角閃石・石英	浅黄橙	26.4	10.4	1.7	調理器具

番号	注記番号	出土区	層	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備　考
221	－	D-14	Ⅱ	砂岩	－	3.8	1.5	37	硯

第46図　時期不詳の遺物

番号	注記番号	出土区	層	胎　土	色　調	備　考
222	－	9T	Ⅰ	茶粒	鈍黄橙	フイゴの羽口・内橙
223	949	D-4	Ⅱ	石英・茶粒	鈍黄橙	粘土塊，用途不明

第47図　古　　銭

番号	注記番号	出 土 区	層	径(mm)	内径(mm)	厚さ(mm)	重　さ	備　考
224	－	E－6	表	23.6	18.6	1.6	3.64	治平元寳
225	－	D－10	撹乱	25.7	21.3	1.2	2.40	政和通寳
226	－	D－14	黒色土	23.0	18.5	1.35	2.35	洪武通寳
227	－	D－9・10	近落	23.0	18.2	1.4	2.69	洪武通寳
228	－	－	表	28.6	23.0	1.4	4.46	寛永通寳，四文銭，11波
229	－	D－14	表	23.8	19.1	1.3	3.61	寛永通寳，1期（古寛永）
230	－	D－11	表	24.3	19.6	1.1	2.42	寛永通寳，1期（古寛永）
231	－	E－11	表	25.1	19.9	1.25	2.54	寛永通寳，2期（背面に「文」）
232	－	－	－	22.8	18.25	1.3	2.72	寛永通寳，3期
233	－	D－11	表	22.3	18.4	0.8	1.58	寛永通寳，3期
234	－	19T	表	23.1	－	1.35	3.78	一銭銅貨
235	－	19T	表	22.2	－	1.35	3.20	半銭銅貨，明治十年鋳造

第54図～第56図　第2地点出土遺物（古代）

番号	注記番号	出　土　区	層	胎土	色調	口径	器高	底径	高台高	備　考
236	－	B-5	クロカツ	茶粒	浅黄橙	14.0	3.8	8.2	－	土師器坏Ⅰ類
237	－	B-6	クロカツ	石英・茶粒	浅黄橙	10.9	4.3	5.4		土師器坏Ⅰ類
238	－	B-5	クロカツ	茶粒	浅黄橙	12.4	4.7	5.7	－	土師器坏Ⅱ類
239	－	C-1・2・24T	クロカツ	茶粒	浅黄橙	－	－	5.2	－	土師器坏Ⅱ類
240	－	－	－	茶粒	橙	17.8	9.3	10.4	2.7	土師器椀Ⅰb類
241	－	B-5	クロカツ	茶粒	浅黄橙	13.0	－	－		土師器椀Ⅰb類
242	－	27T	撹乱	茶粒	黄橙	17.7	9.0	10.2	1.6	土師器椀Ⅰb類
243	－	B-9	クロカツ	茶粒	橙	13.7	5.8	7.1	1.3	土師器椀Ⅰb類
244	－	C-5・6・7	クロカツ	茶粒	浅黄橙	15.8	5.3	9.2	1.2	土師器椀Ⅰb類
245	－	B-5	クロカツ	茶粒	浅黄橙	15.8	5.6	8.6	1.3	土師器椀Ⅰb類
246	－	B-2	アンチカ	茶粒	浅黄橙	16.2	5.6	9.7	0.3	土師器椀Ⅰc類
247	－	B-5	アンチカ	茶粒	浅黄橙	13.8	5.8	5.4	－	土師器椀Ⅱ類
248	－	32T	表	茶粒	橙	31.6	－	－		土師器甕
249	－	B-5	クロカツ	茶粒	橙	26.3	－	－		土師器甕
250	－	27T	撹乱	石英・茶粒	黄橙	－	－	9.6	1.9	黒色土器A類
251	669	B-11	Ⅱ	茶粒	浅黄橙	－	－	6.7	1.6	黒色土器A類
252	－	B-5	クロカツ	－	黒	14.4	－	－	－	黒色土器B類
253	－	24T	Ⅰb～Ⅱ	茶粒	灰黄	－	－	8.8	0.6	須恵器高台付坏
254	－	B-6	アンチカ	軽石	灰	－	－	6.2	－	須恵器坏

番号	注記番号	出　土　区	層	胎土	色調	口径	器高	底径	高台高	備　　考
255	－	B-6・7	表	－	灰	29.4	－	－	－	須恵器甕
256	－	B-5	クロカツ	茶粒	暗赤褐	－	－	－		須恵器甕
257	－	C-6・7	クロカツ	－	暗赤褐	－	－	－	－	須恵器甕
258	－	B-4・5	クロカツ	－	浅黄橙	19.6	－	－	－	須恵器甕
259	－	C-6・7	クロカツ	－	浅黄橙	－	－	－	－	須恵器壺
260	－	B-5	クロカツ	－	褐灰	－	－	－	－	須恵器壺
261	－	B-9	クロカツ	灰色	－	－	－	8.1	－	青磁越州窯系
262	－	B-7	アンチカ	灰色	－	－	－	6.2	0.5	青磁越州窯系
263	－	C-11	撹乱	灰色	鈍黄	－	－	9.2	0.5	青磁越州窯系
264	－	B-7	クロカツ	灰色	－	－	－	6.2	0.3	青磁越州窯系

番号	注記番号	出　土　区	層	胎土	色調	径	孔径			備　　考
265	－	B-7	クロカツ	茶粒	浅黄橙	7.0	0.8	－	－	紡錘車の紡輪

番号	注記番号	出　土　区	層	胎土	色調	口径	器高	底径		備　　考
266	－	B-6・9	クロカツ・アンチカ	茶粒	浅黄橙	－	－	7.0	－	線刻土器

番号	注記番号	出　土　区	層	胎土	色調	長径	短径	厚さ		備　　考
267	－	B-5	クロカツ	雲母・軽石・	茶褐	3.0	2.7	0.6	－	円盤型土製加工品
268	－	31T	排土	茶粒	橙	1.7	1.6	0.4	－	円盤型土製加工品

番号	注記番号	出　土　区	層	胎土	色調	口径	器高	底径		備　　考
269	－	B-8・9	クロカツ	茶粒	灰白	－	－	－	－	焼塩土器
270	－	B-7	アンチカ	茶粒	浅黄橙	－	－	5.6	－	籾痕の残る土器
271	－	B-5	クロカツ	－	灰白	2.6	0.9	3.9	－	管状土錘
272	－	C-6・7	クロカツ	軽石	黄橙	2.1	0.6	5.0	－	管状土錘
273	－	B-6	クロカツ	角閃石	浅黄橙	1.2	0.4	4.7	－	管状土錘
274	－	B-5	クロカツ	軽石・茶粒	浅黄橙	1.8	0.7	6.5	－	双孔棒状土錘
275	－	B-5	クロカツ	茶粒	浅黄橙	1.4	0.5	6.0	－	双孔棒状土錘

番号	注記番号	出　土　区	層	胎　土	色調	厚さ				備　　考
276	－	B-5	クロカツ	角閃石・石英	灰白	2.1	－	－	－	布目痕，平瓦

第57図　第２地点出土遺物（中世）

番号	注記番号	出　土　区	層	胎土	色調	口径	器高	底径	高台高	備　　考
277	－	C-11	表	－	－	14.4	－	－	－	青磁，稜花皿
278	－	C-9	盛り土	－	－	－	－	－	－	白磁，口禿
279	－	B-7	クロカツ	茶粒	橙	9.4	1.5	8.6	－	土師器皿，糸切り底

第59図　白金原遺跡出土遺物

番号	注記番号	出土区	層	胎　　土	色調	口径	器高	底径		備　　考
1	－	3T	灰白色砂礫層	角閃石・茶粒・長石	黄橙	3.7	0.9	－	－	縄文後期，円盤型土製加工品
2	－	7T	砂層暗褐色土	角閃石・石英・長石	灰黄褐	21.0	－	－	－	弥生甕
3	－	9T	表土	角閃石・茶粒・長石	橙	30.8	－	－	－	弥生甕
4	－	9T	砂層	角閃石・茶粒・長石	橙	30.0	－	－	－	弥生甕
5	－	9T	砂層	角閃石・長石	橙	28.6	－	－	－	弥生甕
6	－	9T	表土	角閃石・茶粒・長石	浅黄橙	－	－	－	－	弥生壺
7	－	A-3	溝３	茶粒	黄橙	－	－	－	－	土師器
8	－	10T	黄白色砂層	角閃石・長石	黄褐	－	－	8.2	－	時期不詳

番号	注記番号	出土区	層	器　　種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備　　考
9	48	B-3	畑埋土	石核	黒曜石	2.52	1.66	1.43	4.72	三船産か
10	－	14T	表層	剥片	黒曜石	2.20	2.53	1.10	4.55	三船産か

第８章　調査のまとめ

森遺跡第１地点

古墳時代について

古墳時代については，遺構が存在しないことや遺物包含層中からの遺物の出土量が少ないため，詳細については不明である。

古代について

第１地点の主体をなす時代である。出土遺物は，９世紀～11世紀と考えられる。

【周溝】

主体部は撹乱のために破壊されていると考えられるが，この遺構は方形周溝墓である可能性が高い。副葬品が出土しておらず時期の認定は困難である。本遺跡に隣接する小倉畑遺跡では，直線距離にして約60mしか離れていない地点で，周溝部の一部が破壊されているものの主体部が残存している方形周溝墓が１基検出されており，10世紀中頃とされている。

鹿児島県内における古代の周溝墓の検出例としては，この他に，鹿屋市榎崎Ａ遺跡で５基，東市来町向栫城跡と川内市計志加里（けしかり）遺跡で各１基ずつ検出されている。

九州の古代・中世の周溝墓については，上床真氏の集成（上床2002）がある。

【土師器】

土師器については，中村和美氏の分類・編年（中村1997）に基づいて，まとめてみたい。中村氏の形式分類の指標・編年は以下の通りである（中村1997改変）。

坏　平底を原則とする。ただし，須恵器模倣形態で高台をもつものは坏として扱う。

属性１　底部切り離し技法（Ａへら切り，Ｂ糸切り）

属性２　体部形態（ａ直線的，ｂ丸みをもつ）

属性３　底部形態（Ⅰ円盤状の底部すなわち高さのあるもの，０無いもの，Ⅱ高台をもつもの）

属性４　法量（口径－器高－底径）

属性５　調整法

属性１～３を組み合わせ，実際には５形式が存在する。Aa0は，口径／底径＜２となる須恵器模倣形態のAa00と口径／底径＞２となる土師器独自の形態のAa01に細分されており，Aa01は，法量によってさらに細分できるとしている。

編年

Aa00 → Aa01～ → Ab0 → AbⅠ → B

椀　原則として高台をもつもので，深さのあるもの。

属性１　高台形態（Ａハの字状に広がり比較的高さのあるもの，Ｂ短い高台を貼り付けるもの，Ｃ充実高台）

属性２　体部形態（ａ直線的，ｂ丸みをもつ）

ｂについては，体部の１深いもの，２浅いもので細分可能。

属性３　法量（口径－器高－高台計）

属性４　調整法

属性１，２により６形式が存在する。

編年

Aa → Ab1 → Ab2 → Bb

Ca → Cb

皿（小皿）　口径に対し器高が低いもの。皿と小皿の違いは大まかに口径10cmを境界とする。

属性１　底部切り離し技法（Ａへら切り，Ｂ糸切り，Ｃ高台付）

属性２　法量（口径－器高－底径）

属性１により５形式が存在する。

編年

皿 → 小皿

A → A → B

C　C

坏Ⅰ類については，表土層中から出土した56・58は，体部が直線的であることから，Aa0に相当する。９世紀と考えられる。57は，箱型を呈する須恵器模倣形態の坏であり，Aa00に相当するが，口径が8.3cmと小さいことを考慮すると９世紀後半と考えられる。

坏Ⅱ類については，体部が丸みをもつことや，円盤状の底部を有することからAbⅠに相当する。10世紀と考えられる。

椀Ⅰａ類は，比較的短くどっしりとした高台を有するもので，体部の形態は，欠損している遺物が多いため不明な点が多いが残存部では直線的にのびると思われる。これは，前記の分類には入っていないが，Aaに先行するタイプと考えられる（中村和美氏御教示）。９世紀後半～10世紀初頭と考えられる。

椀Ⅰｂ類は，高台が「ハ」の字状に広がり高さを有している。体部の形態が不明なため，AaとAbのいずれに該当するか不明である。10世紀初頭～10世紀中葉と考えられる。

椀Ⅰｃ類は，短くつまみだしたような高台を有する。Bbに相当する。11世紀と考えられる。

椀Ⅱ類は，充実高台を有し，体部が直線的である。Caに相当する。９世紀後半～10世紀初頭と考えられる。

皿は，口径が復元できた３点については，いずれも口径が11cmほどであることから，小皿の出現期に近いものであろう。11世紀と考えられる。

【香炉】

142は，表土層中からの出土であるが，土師器の蓋の一部である。欠損部が多いため詳細は不明であるが，鈕の形態が通常の坏蓋の鈕と異なっている。また，内面にはススが付着しており，

香炉の蓋である可能性がある。

山本信夫氏の集成（山本1999）によると九州内における土師器の香炉と考えられる遺物の出土例は，大宰府の観世音寺境内北辺で蓋１点，政庁前面（南部）で脚１点，久留米市ヘボノ木遺跡で身と蓋の２セット，姶良町小倉畑遺跡で蓋２点，身と蓋の１セットが知られているのみである。

このうち小倉畑遺跡は，本遺跡と県道をはさんで隣接しており，現在のところ鹿児島県内においては，この地域でしか出土例がみられない。小倉畑遺跡ではこの他に，土師器の鉄鉢模倣品が出土しているが，出土地点が旧河道であり，付近に寺院が存在した可能性が指摘されている。本遺跡においては，第２地点で大隅国分寺に使用されたものと同型の瓦も出土しており，この地域周辺に寺院が存在した可能性が高いといえる。

史料による記録には古代の寺院は見当たらないため，今後の考古学的な調査に期待したい。

【青磁】

越州窯系の青磁が出土している。10世紀後半～11世紀中葉のものと考えられる。

中近世について

中近世については，遺構は検出されているが，遺物包含層は存在していない。

【遺構】

近世の遺構として，道路状遺構と竪穴遺構が検出されている。

道路状遺構については，時期判断の材料が乏しい。調査担当者の判断では，近世以前に遡る可能性が指摘されている。竪穴遺構については，出土遺物から判断して近世の遺構と判断してよいと考えられるが，目的や性格が不明である。

【遺物】

中近世の遺物としては，糸切り底を有する坏，東播系の捏鉢，備前焼や瓦質の擂鉢，瓦質の火舎，青磁，染付，焙烙等が出土している。このうち時期を推定できる青磁や染付で判断すると，12世紀後半から19世紀のものまで，まんべんなく出土しており，本遺跡周辺で古代から近世まで人間の生活が営まれ続けたことを示している。

近代について

第２次世界大戦時に使用された防空壕の跡が，検出された。地面を掘り込み，掘立柱を周囲に廻らし，天井を葺いていたものと思われる。本遺跡の所在する姶良町では，昭和20年７月29日に山田橋付近が米空軍により空襲され死者３名を出し，８月５日には松原，６日には脇元が空襲を受けている。近年戦争の記憶が風化しつつあるといわれているが，このような粗末な防空壕で爆撃におびえていたことを忘れるべきではない。

森遺跡第２地点

古代について

第２地点の主体をなす時代であるが，遺構や包含層が残存していた調査区が少ないため，不明な点が多い。

【掘立柱建物跡】

４軒の掘立柱建物跡が検出されている。本遺跡の西１km弱に位置する小瀬戸遺跡で検出された２軒の掘立柱建物跡と梁間間×桁行間の面積を比較すると以下のようになる。

森遺跡		小瀬戸遺跡	
１号建物跡（２間×３間）	11.38㎡	建物跡Ⅰ（２間×３間）	14.49㎡
２号建物跡（２間×３間）	17.36㎡	建物跡Ⅱ（２間×３間）	14.51㎡
３号建物跡（２間×２間）	9.21㎡		
４号建物跡（２間×３間）	17.32㎡		

森遺跡・小瀬戸遺跡の掘立柱建物跡の面積比較

同規模の２間×３間で比較すると，小瀬戸遺跡では検出された２軒の面積はほぼ同じである。本遺跡では，１号建物跡と２・４号建物跡の２種類に分類できる。１号建物跡と２号建物跡は切り合っており，時期差があるのは確実である。４号建物跡との時期関係は明瞭ではないが，面積の比較からは，２号建物跡と４号建物跡の時期は近い可能性がある。

【瓦】

古代の瓦が出土している。表土層中からの出土であり，原位置を保っていない。本遺跡の北西約1.5kmに位置する宮田ヶ岡窯跡は大隅国分寺に供給する瓦を焼いた窯跡である。本遺跡出土の瓦は，この窯跡で出土しているものと類似している。付近での出土例としては，前出の小瀬戸遺跡があり，地方官衙等の存在が想定されている。

白金原遺跡

縄文時代について

縄文時代後期の指宿式土器を加工したと思われる円盤型土製加工品が出土している。ローリングを受けており，砂礫層からの出土であることから，周辺部からの流れ込みであると考えられる。

弥生時代について

弥生時代の甕や壺が少量出土しているが，いずれもローリングを受けており，小破片で出土している。本遺跡の周辺には，竪野遺跡や保養院遺跡など弥生時代の遺跡が存在しており，周辺からの流れ込みであると考えられる。

遺構について

畑跡と溝状遺構を検出した。遺構の時期については，出土遺物が少ないために断定することは困難である。畑跡に関しては畝間の長径が約２ｍと短い。可能性としては，「所有者の違いを示す」「栽培作物の違いを示す」等が想定できるが，断定はできない。

溝状遺構に関しては，畝間に切られるもの多いが，５号は畝間を切っており，耕作期間をまたがって溝が作られていることを示している。

引用・参考文献

青﨑和憲・中村和美ほか「榎崎Ａ遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(63)
鹿児島県教育委員会　1992

上床真「九州における古代・中世の周溝（墓）遺構の集成と若干の検討－鹿児島県内の周溝墓を中心として－」
『小倉畑遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター　2002

下鶴弘「宮田ヶ岡窯跡」『姶良町埋蔵文化財発掘調査報告書』第７集　姶良町教育委員会　1999

寺原徹「小倉畑遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(34)
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2002

戸崎勝洋・立神次郎「小瀬戸遺跡・建馬場遺跡・松木田遺跡」
『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(19)　鹿児島県教育委員会　1982

中村和美「鹿児島県坊津と出土陶磁器」『貿易陶磁研究』18　貿易陶磁研究会　1998

中村和美「鹿児島県における古代の在地土器」『鹿児島考古』31　鹿児島県考古学会　1997

中村和美「鹿児島県（薩摩・大隅国）における平安時代の土器－土師器の変遷を中心に－」
『中近世土器の基礎研究Ｘ』日本中世土器研究会　1994

間壁忠彦「備前焼」『考古学ライブラリー』60　ニュー・サイエンス社　1991

山本信夫「大宰府出土施釉陶器の編年について」『国立歴史民俗博物館研究報告』82
国立歴史民俗博物館　1999

「姶良町郷土誌」　姶良町郷土誌改定編さん委員会　1995

「大宰府条坊跡Ⅱ」『太宰府市の文化財第７集』　財団法人　古都大宰府を守る会　1983

「ヘボノ木遺跡」『久留米市文化財調査報告書』　第39集　久留米市教育委員会　1984

付編　科学分析報告

森・小倉畑遺跡出土鉄関連遺物の金属学的調査

（株）九州テクノリサーチ・TACセンター
大澤　正己

概要

9世紀後半代を中心とする森遺跡と小倉畑遺跡出土の鉄関連遺物4点を調査して次の点が明らかになった。

〈1〉森遺跡出土の椀形状滓2点は，鉱物組成が白色粒状結晶のヴスタイト（Wüstite: FeO）と淡灰色長柱状結晶のファイヤライト（Fayalite: $2FeO \cdot SiO_2$）を晶出する。化学組成は砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）0.55～0.97%，バナジウム（V）0.02～0.04%，酸化マンガン（MnO）0.06～0.15%，五酸化燐（P_2O_5）0.33～0.39%など含有する。これに1点の椀形滓からは，赤熱鉄素材の表面から鍛打によって剥落した鍛造剥片を付着していて，鉄素材の繰返し折り曲げ鍛接の高温作業で排出された鍛錬鍛冶滓に分類される。

〈2〉なお，森遺跡からは，鋳造に伴う溶解炉炉頂部の炉壁破片や坩堝破片，羽口片などが検出されていたので，椀形滓は非鉄金属の溶融に際して排出された滓を懸念していた。更に当遺跡からは，鉛（Pb）か錫（Sn）を連想させる灰白色剥片の出土があった。こちらは分析の結果，89.8% Al－5.4% Fe－3.9% O組成が得られた。アルミニウム（Al）は1827年ドイツで初めて還元された金属であって，近代遺物の混入と判断せざるをえなかった。

〈3〉小倉畑遺跡は森遺跡に隣接した遺跡である。これより流動滓の小片（12g）が出土した。鉱物組成はイルミナイト（Ilmenite: $FeO \cdot TiO_2$）とウルボスピネル（Ulvöspinel: $2FeO \cdot TiO_2$）が晶出し，化学組成は二酸化チタン（TiO_2）20.34%，バナジウム（V）0.41%，酸化マンガン（MnO）1.19%，五酸化燐（P_2O_5）0.43%などを含む。塩基性砂鉄を始発原料とする製錬滓であった。

両遺跡からの遺物出土量があまりにも少ないまでも，製鉄一貫作業と非鉄金属鋳造などの操業は，完全に無視はできぬ遺跡と考えられる。

1．いきさつ

森遺跡は鹿児島県姶良郡姶良町森に所在する。9世紀から12世紀にわたる遺跡で，活動の中心は9世紀後半代である。当遺跡の第1地点より溶解炉・炉頂部破片，坩堝破片，羽口などと共に椀形滓や淡灰色非鉄金属片などが出土した。そのうちの椀形滓と非鉄金属片を通して，当時の金属手工業の実態を把握する目的から金属学的調査の運びとなった。なお，森遺跡の北東に隣接して小倉畑遺跡があって，ここからも流動性をもつ滓が1点検出された。出土地区不明で表層のものであるが併せて調査した。

2．調査方法

2－1　供試材

Table.1に示す。調査試料は森遺跡出土品33点と小倉畑出土品1点で合計4点である。

2−2　調査項目

(1) 肉眼観察

遺物の肉眼観察所見。これらの所見をもとに分析試料採取位置を決定する。

(2) 顕微鏡組織

切り出した試料をベークライト樹脂に埋込み，エメリー研磨紙の＃150，＃240，＃320，＃600，＃1000と順を追って研磨し，最後は被研磨面をダイヤモンド粒子の3μと1μで仕上げて光学顕微鏡観察を行った。なお，金属鉄の炭化物は，ピクラル（ピクリン酸飽和アルコール液）で，フェライト結晶粒は5％ナイタル（硝酸アルコール液）で，腐食（Etching）している。

(3) ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成と，金属鉄の組織同定を目的として，ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み，その時に生じた窪みの面積をもって，その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

(4) ＥＰＭＡ（Electron Probe Micro Analyzer）調査

分析の原理は，真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し，発生する特性Ｘ線を分光後に画像化し，定性的な結果を得る。更に標準試料とＸ線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定が可能である。

(5) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分（Total Fe），金属鉄（Metallic Fe），酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C），硫黄（S），：燃焼容量法，燃焼赤外吸収法

二酸化硅素（SiO_2），酸化アルミニウム（Al_2O_3），酸化カルシウム（CaO），酸化マグネシウム（MgO），酸化カリウム（K_2O），酸化ナトリウム（Na_2O），酸化マンガン（MnO），二酸化チタン（TiO_2），酸化クロム（Cr_2O_3），五酸化燐（P_2O_5），バナジウム（V），銅（Cu），：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

3．調査結果

3−1.　森遺跡出土品

(1) OGM−1：椀形滓

①肉眼観察：平面は不整台形状の椀形鍛冶滓の周縁部欠損の中核部である。表皮は小豆色で荒れは少なく粘稠質の肌をもつ。3cm幅の木炭に押し潰された痕跡を留める。また，裏面にも2.7cm×3.5cmを測る木炭痕を深く刻む。この木目木炭痕跡には赤褐色鉄銹を発する。側面は全面破面で，茶褐色緻密質に小気泡を散在させる。なお，当初断面には縦方向を貫通する程の長い気孔が存在し，非鉄金属の滓の懸念が生じた。

②顕微鏡組織：Photo.1の①〜⑨に示す。②は鉄滓表層に付着した鍛造剥片である。その拡大組織が①④⑤である。鍛造剥片は鍛冶の鍛打作業において赤熱鉄素材の表面から剥離した剥

片である。この鍛造剥片は，鉄素材を大気中で加熱，鍛打すると表面酸化膜が剥離する。俗に鉄肌（金肌）やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により，表面が荒れ肌の厚手から，平坦で薄手へと，色調は黒褐色から青味を帯びた銀色（光沢質）へと変化する。鍛冶工程の段階を押える上で重要な遺物である。(注1) 今回提示した鉄滓付着の鍛造剥片は，0.02～0.05mmの極薄であった。

この鍛造剥片の酸化膜としての被膜構造を述べると，白色微厚の外層ヘマタイト（Hematite : Fe_2O_3），中間層のマグネタイト（Magnetite : Fe_3O_4），大部分は内層ヴスタイト（Wüstite : FeO）から構成される。ここに示した組織は研磨ままで3層の分離が不鮮明である。これを王水（塩酸3：硝酸1）で腐食（Etching）すると，風化を受けていなければ，外層ヘマタイトは白色微厚層はそのまま残り，中間層マグネタイトは黄変し，内層は黒変する。なお，鍛造剥片の内層ヴスタイトの顕著な粒状化傾向は鍛打作業の初期段階で派生し，凝集，非晶質化は中間・後半段階への作業進行を表わす。

一方，鍛造剥片は，微細な鍛冶派生物であり，発掘調査中に土中から肉眼で観察するのは難しく，通常は鍛冶址床面の土砂を水洗することにより発見される。鍛冶工房の調査に当っては鍛冶炉を中心にメッシュを切って土砂を掘り上げ，水洗・乾燥・選別・磁選・秤量により分布状況を把握できれば，工房内の作業空間配置の手掛りとなりうる重要な遺物である。(注2)

また，鍛造剥片の3層のうちの外層ヘマタイト相は，1450℃を超えると存在しなくて，内層ヴスタイト相は，570℃以上で生成されることはFe－O系平衡状態図で説明されている。(注3) 当椀形滓は，当初断面気孔の長大からくる異様さから非鉄金属滓を懸念したが，鍛造剥片付着の発見から鍛冶滓に認定できた。

次に鉄滓としての鉱物組成に触れる。白色粒状結晶のヴスタイト（Wüstite : FeO），淡灰色長柱状結晶のファイヤライト（Fayalite : $2FeO \cdot SiO_2$）が暗黒色ガラス質スラグ中に晶出する。なお，ヴスタイト結晶の局部には粒内にFe－Ti化合物を析出する個所もあった。⑥⑦に示す。鍛造剥片の内層ヴスタイトの凝集と非晶質の検出と併せて，当鉄滓は鉄素材の繰返し折り曲げ鍛接の高温作業で排出された鍛錬鍛冶滓に分類される。なお，⑧は木炭片の噛み込み組織である。

③ビッカース断面硬度：Photo. 1の⑨に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は515 Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値が450～500Hvであって，(注4) これの上限を僅かに超えているがヴスタイトに同定できよう。測定面積が狭小で亀裂などの発生からくる誤差とみておきたい。

④化学組成分析：Table. 2に示す。鉄分が多くて夾雑成分の低め傾向の成分系である。すなわち，全鉄分（Total Fe）は54.48%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.11%，酸化第1鉄（FeO）58.27%，酸化第2鉄（Fe_2O_3）12.98%の割合であった。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は25.79%で，このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）は3.22%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）0.97%，バナジウム（V）0.04%など少量検出される。また，酸化マンガン（MnO）0.15%，銅（Cu）0.01%以下なども砂鉄系を裏付ける。なお，他の随伴微量元素の酸化クロム（Cr_2O_3）0.04%，硫黄（S）0.05%，砒素（As）0.004%など極く微量であるが五酸化燐（P_2O_5）のみは0.33%と鍛錬鍛冶滓にしては高め傾向にある。砂鉄中に

混在する燐灰石（Apatite）の影響が表われているのであろうか。

（2）OGM－2：椀形滓

①肉眼観察：平面は不整楕円状で扁平な椀形滓のほぼ完形小型品（38ｇ）である。ただし，表面の約1/2の表皮は剥落して，こちらには気泡の露出があるが，残る半分の表皮側には気泡の発生はない。表裏面は共に小さい木炭痕が弱くスタンプされて赤褐色銹に薄く覆われる。

②顕微鏡組織：Photo. 2の①～⑨に示す。①～⑦は鉄滓の鉱物組成である。白色粒状結晶のヴスタイトが凝集晶出し，その粒間に僅かのファイヤライトと暗黒色ガラス質スラグが埋める。ヴスタイトの粒内には微かに縞状模様が表われる。該品も鍛錬鍛冶滓の後半段階の派生品である。⑧⑨は滓中へ落下した鉄である。銹化しているが素地にパーライト（Pearite：フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織）の痕跡を留める。パーライトは占める面積によって炭素含有量が推定できる。面積の約半分で0.4%，全面パーライトで共析鋼の0.77%である。該品のパーライト量は極く微量で極軟鋼（C：0.01%以下）レベルのものであった。

③ビッカース断面硬度：Photo. 2の⑦に白色粒状結晶の硬度測定圧痕を示す。硬度値は433 Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の下限を僅かに切っているがヴスタイトに同定できる。

④化学組成分析：Table. 2に示す。前述のOGM－1椀形滓よりも鉄分は増加して，夾雑成分は逆に減少する。全鉄分（Total Fe）は61.28%に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.14%，酸化第1鉄（FeO）52.88%，銹化鉄含みで酸化第2鉄（Fe_2O_3）が僅かに多くて28.65%の割合である。ガラス質成分は更に減少して13.44%で，このうちに塩基性成分も2.08%となる。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）0.55%，バナジウム（V）0.02%なども低減し，更に酸化マンガン（MnO）も0.06%まで低下する。なお，酸化クロム（Cr_2O_3）は0.15%とやや増加して，五酸化燐（P_2O_5）は0.39%と近似レベルである。該品も鍛打最終段階での派生物で砂鉄系鍛錬鍛冶滓に分類される。

（3）OGM－3：非鉄金属片

①肉眼観察：平面が不整台形状で端部に捲れをもつ7.6×2.4cmで厚み1.3cmの非鉄金属片である。灰白色剥片で鉛（Pb）か亜鉛（Zn）ではないかと考えていた。

②EPMA調査：剥片断面を鏡面研磨して供試材とした。COMP（反射電子像）をPhoto. 4に示す。まず，コンピュータープログラムによる高速定性分析結果をFig. 1に示す。A－Rankで検出された元素は，アルミニウム（Al），鉄（Fe），珪素（Si），酸素（O）であった。定量分析値は，Photo. 4に示す如く89.9% Al－5.4% Fe－0.9% Si－3.9% O組成が得られた。予想に反してアルミニウム剥片で近代開発の代物である。後世の混入物と言わざるをえない。

3－2.　小倉畑遺跡出土品

（1）OGM－4：流動滓

①肉眼観察：流動滓の最先端部の小破片（12ｇ強）である。2条流れ出し寸前の表面は，黒色小豆色まじりの光沢質で滑らか肌を呈する。裏面は床面粘土との反応痕と，その窪みに粘土と白

色礫を噛み込む。

②顕微鏡組織：Photo. 3 に示す。① ～ ③ は鉱物組成である。白色剥片状結晶のイルミナイト（Ilmenite：$FeO \cdot TiO_2$）と雪花状結晶のウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）を晶出した。塩基性砂鉄製錬滓の晶癖である。また ⑤ ～ ⑦ は鉄粒が散在し，組織は全面セメンタイトを析出した高炭素鋼であった。

③ビッカース断面硬度：Photo. 3 の ⑧ は淡茶褐色雪花状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は640Hv であった。ウルボスピネルに同定される。また ⑨ はセメンタイト析出鉄粒で硬度値は471Hv であった。組成に対応した硬度値である。

④化学組成分析：Table. 2 に示す。鉄分少なく脈石成分の多い成分系である。全鉄分（Total Fe）28.98％に対して，金属鉄（Metallic Fe）0.39％，酸化第 1 鉄（FeO）33.70％，酸化第 2 鉄（Fe_2O_3）3.42％の割合であった。ガラス質成分は39.94％と多く，そのうちに塩基性成分も6.99％を含む。更に砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）20.34％，バナジウム（V）0.41％は高くて，酸化マンガン（MnO）も1.19％と高値である。銅（Cu）は0.01％で塩基性砂鉄原料の製錬滓であった。

4．まとめ

森遺跡から出土した 2 点の椀形滓は，38～62 g と小型ながら鉱物組成にヴスタイトを晶出し，化学組成は鉄分（Total Fe）が55～61％と多く，脈石成分は低めで二酸化チタン（TiO_2）0.55～0.97％，バナジウム（V）0.02～0.04％，酸化マンガン（MnO）0.06～0.15％など少量含有し，銅（Cu）0.01％以下から砂鉄系鉄素材の繰返し折り曲げ鍛接の高温鍛冶作業で排出された鍛錬鍛冶滓に分類できた。また，1 点の椀形滓には，鍛冶作業にて赤熱鉄素材の鍛打工程で剥離した酸化膜である鍛造剥片が検出できて，鍛冶滓としての傍証がとれた。

一方，森遺跡の出土遺物には，溶解炉の炉壁破片や坩堝破片，非鉄金属剥片，羽口などが混在しており，椀形滓は非鉄金属の溶解作業で派生した滓としての懸念も生じた。その背景には，滓の色調が小豆色めき，気孔が縦断面を貫通寸前の長大なものが発生し，通常見慣れた鍛冶滓とは異質な雰囲気が感じられた。しかし，前述したように今回の調査結果から非鉄金属滓の問題は杞憂に終った。過去に溶解炉炉床部と炉壁，坩堝片などと共にヴスタイト晶出の椀形滓（小型）がセット関係となった遺物群の調査経験がある。(注5) 更に近年は鉱山関連の報告例も増加しており，例えば島根県大田市所在の石見銀山の例がある。当遺跡からもカラミと称する滓が検出され「褐色のサビが見られる碗形で底面に土が付着しているもの」が出土し，EPMA の SEI でヴスタイトの晶出があり，X 線回折からは「非鉄金属製錬のカラミに一般的に見られる鉄橄欖石（ファイヤライト），ヴスタイトを確認した」とある。各試料の調査結果をみると「ヴスタイトを顕著に含み」の連発である。(注6)

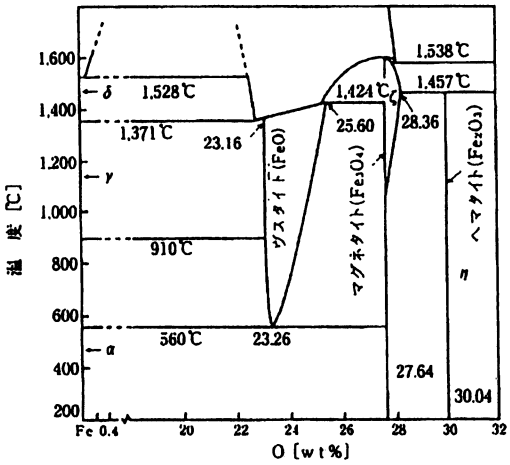
以上の如く，小型椀形滓は非鉄金属（銅，銀）の溶融でも頻繁に派生するので配慮が必要である。福岡県では大宰府史跡の匠司伝承地からの滓には注意したが，(注7) 鹿児島県においても金やその他の鉱山の多い地域なので，それなりの目配りが必要と考える次第である。

注）

(1) 大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘年報15』（平成 3 年度）千葉県立房総風土記の丘 1992

(2) 大澤正己「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『奈良尾遺跡』（今宿バイパス関連埋蔵文化財調査報告書第13集）福岡県教育委員会 1991

(3) 森岡ら「鉄鋼腐食科学」『鉄鋼工学講座』11 朝倉書店 1972



Fe-0 系平衡状態図

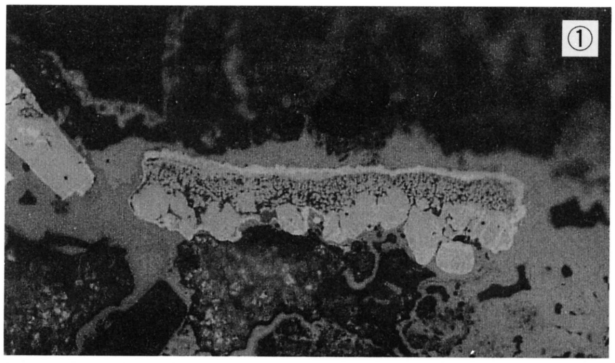
(4) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968. ヴスタイトは450～500Hv，マグネタイトは500～600Hv，ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。また，ウルボスピネルの硬度値範囲はないが，マグネタイトにチタン（Ti）を固溶するので，600以上の値をもてばウルボスピネルと推定している。

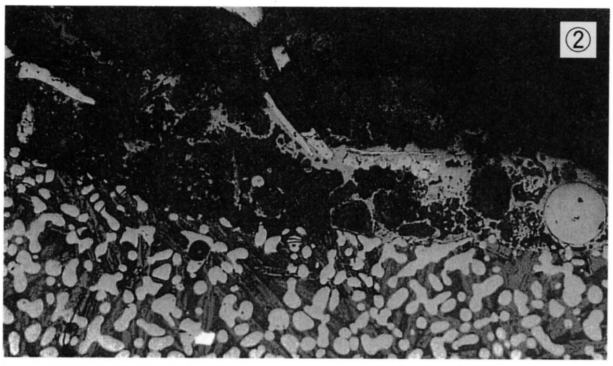
(5) 大澤正己「尾崎遺跡出土鋳銅関連遺物の金属学的調査」『尾崎遺跡－九州縦貫自動車道関係文化財調査報告29－』（北九州埋蔵文化財調査報告書第118集）（財）北九州市教育文化事業団 埋蔵文化財調査室 1992

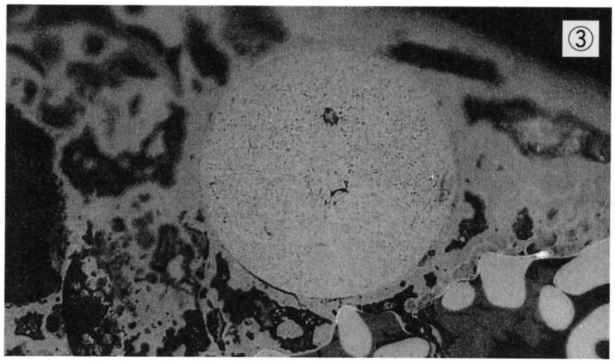
(6) 島根県教育委員会他『石見銀山』石見銀山遺跡総合調査報告書　平成 5 年度～平成10年度〔発掘調査・科学調査編〕第 2 冊 1999

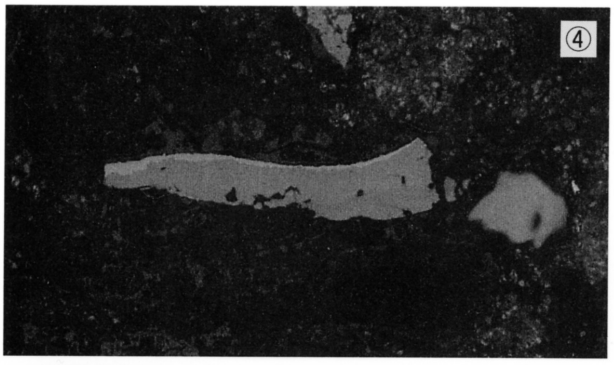
(7) 大澤正己「大宰府史跡（政庁跡・来木地区）出土鉄塊と鋳造関連遺物の金属学的調査」『大宰府政庁跡』（大宰府史跡発掘調査報告書Ⅱ）九州歴史資料館 2002.3

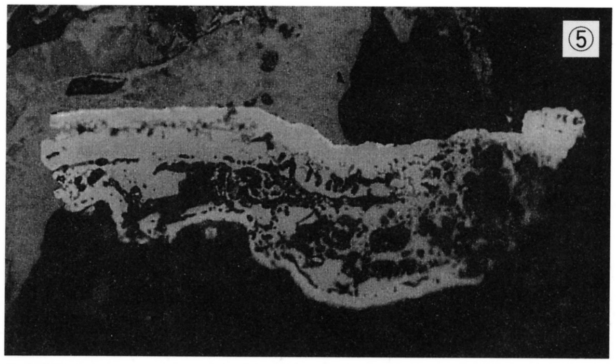
OGM−1
椀形滓
①④⑤×400 付着鍛造剥片
②×100，③×400
表層付着球状鉄（銹化）
左上方：鍛造剥片付着
⑥×100，滓組織，⑦×400
ヴスタイト：⑨硬度 515Hv
⑧×100，木炭(鉄分置換)

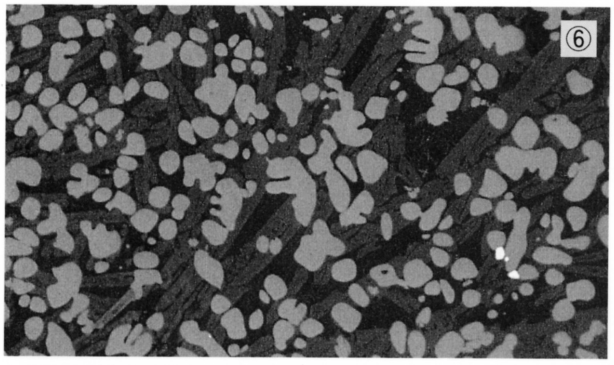


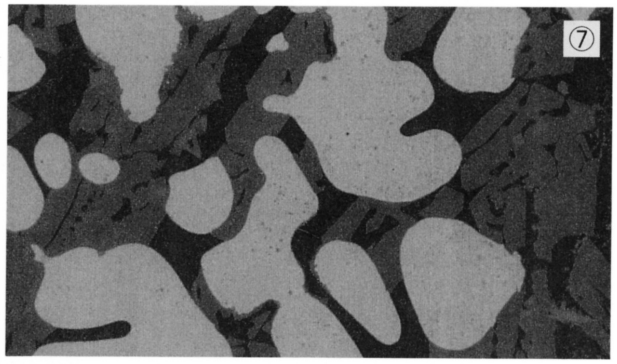


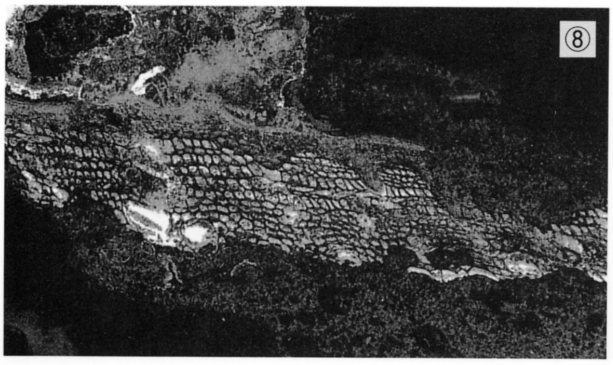












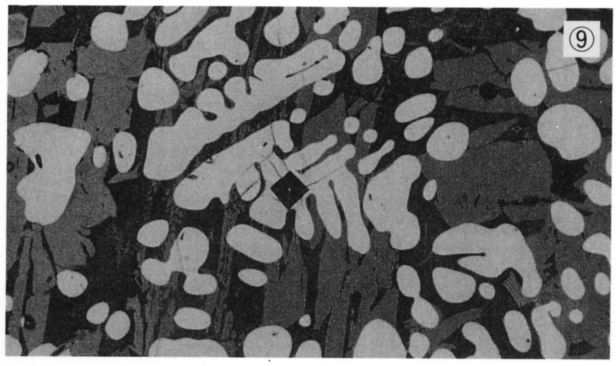
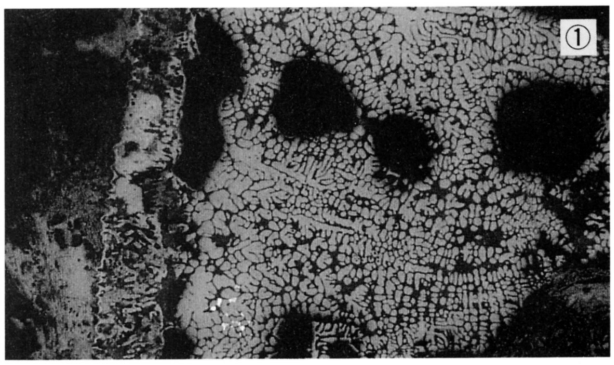
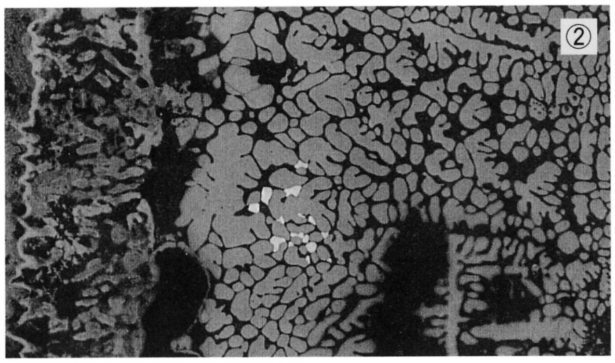
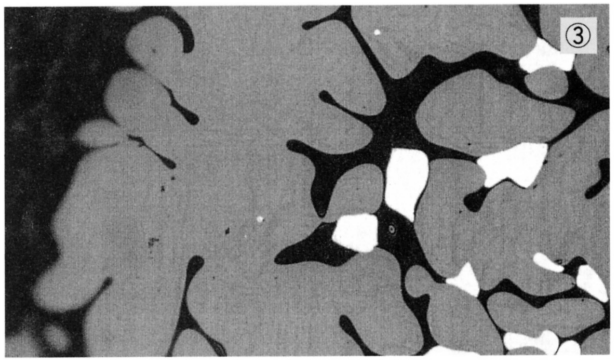


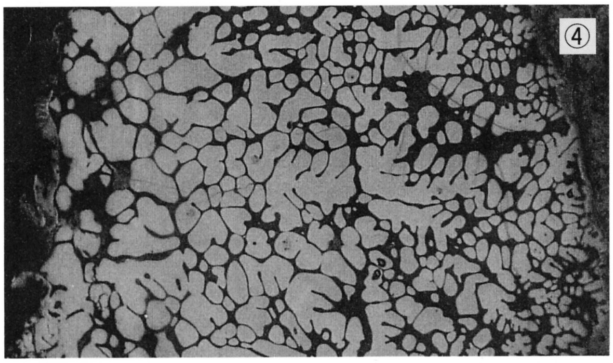
Photo. 1　鉄滓の顕微鏡組織

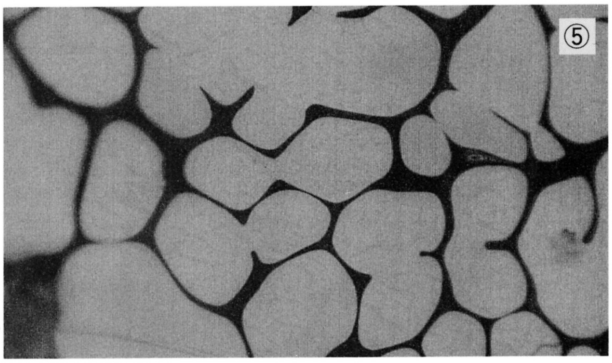
OGM−2
椀形滓
①×50, ②×100, ③×400
ヴスタイトと金属鉄粒
④×100, ⑤×400, ⑥×100
ヴスタイト凝集
⑦×200, 硬度圧痕
433Hv, ヴスタイト
⑧×100, ⑨×400, 銹化鉄

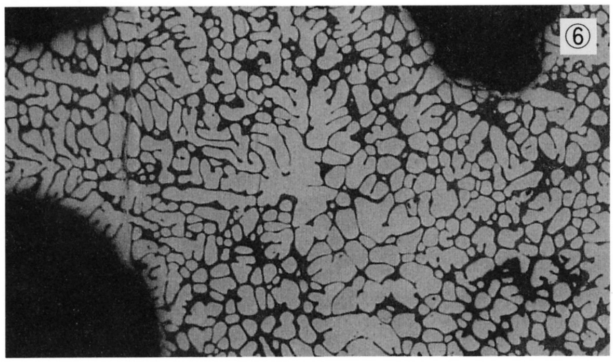


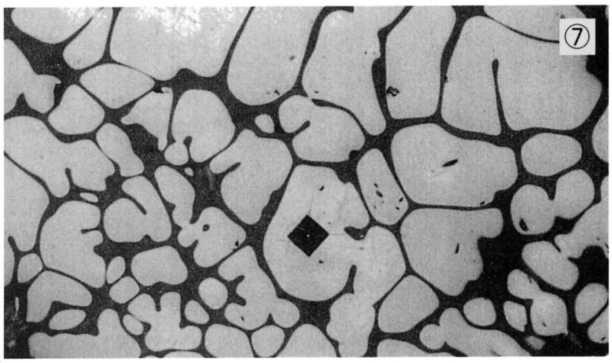


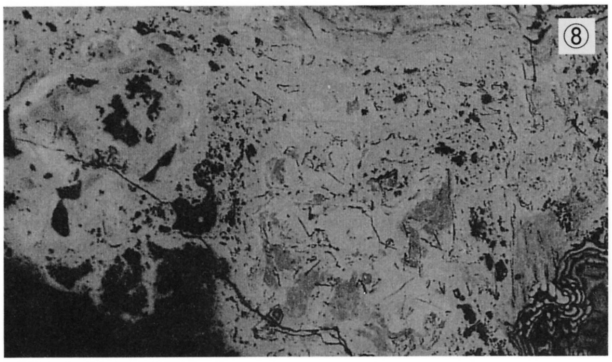












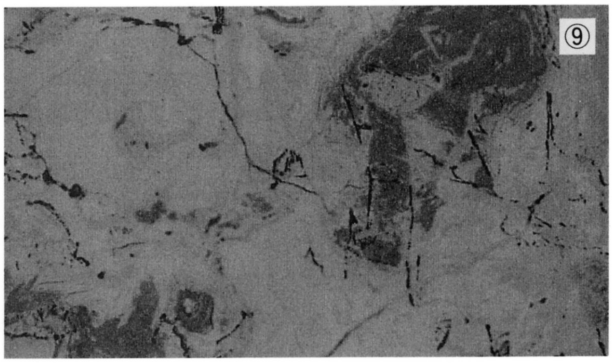
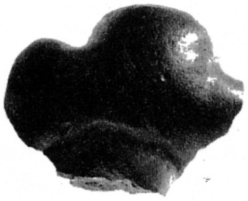
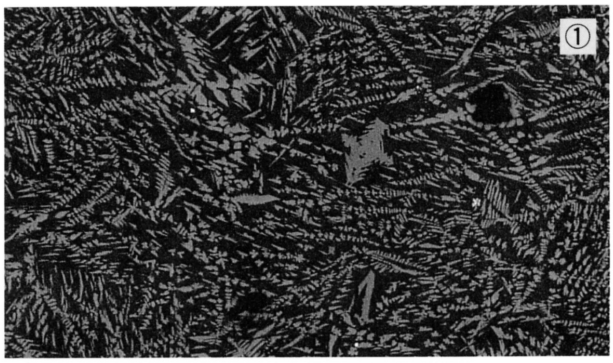
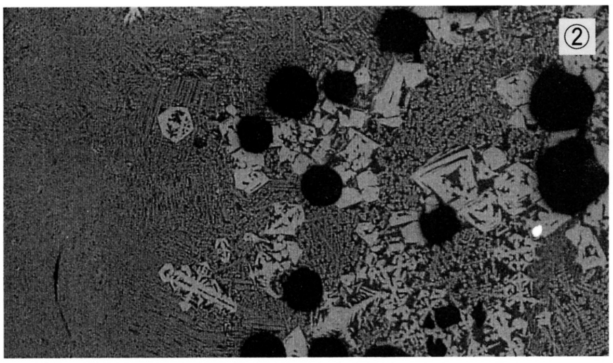


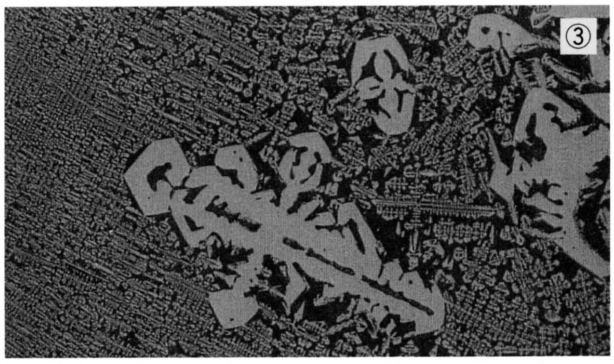
Photo. 2　鉄滓の顕微鏡組織

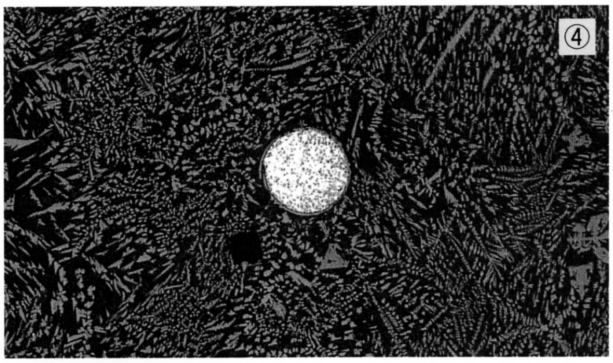
OGM−4
流動滓（製錬滓）
①②×100, ③×400
ウルボスピネル
④×100, ⑤〜⑦×400, ナイタル
etch, 金属鉄粒
⑧ ⑦×200, 硬度圧痕
⑧ 640Hv, ウルボスネピル
⑨ 471Hv,セメンタイト析出鉄

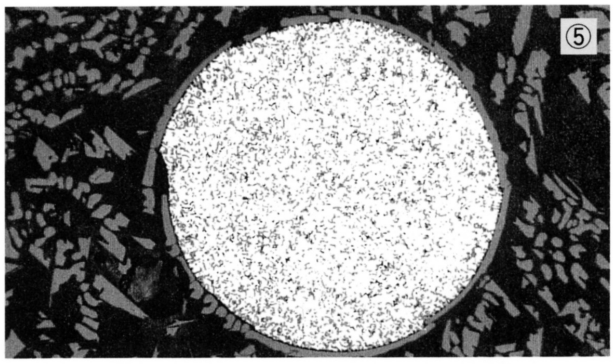


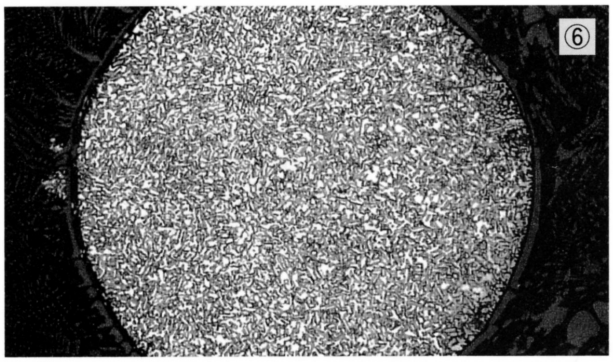


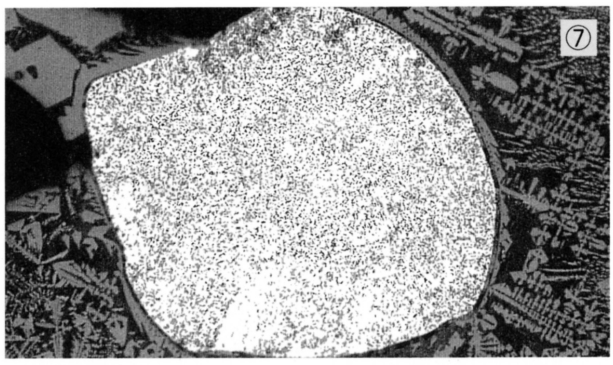


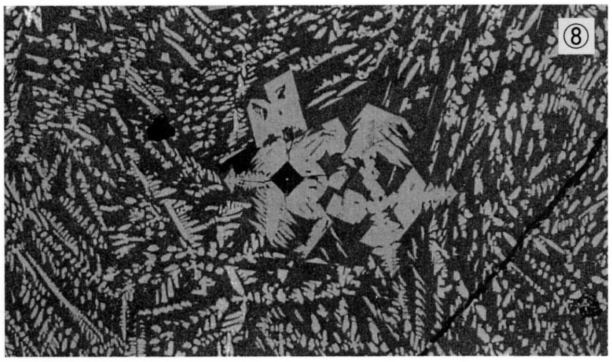












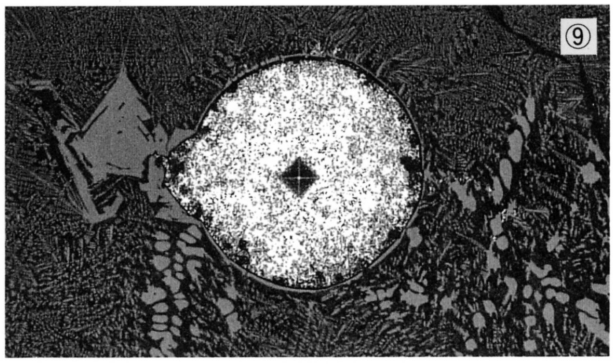


Photo. 3　鉄滓の顕微鏡組織

OGM−3
×100

Element	1
o	3.881
Al	89.846
Si	0.886
Fe	5.387
Total	100.000

Photo. 4　非鉄金属片の定量分析結果

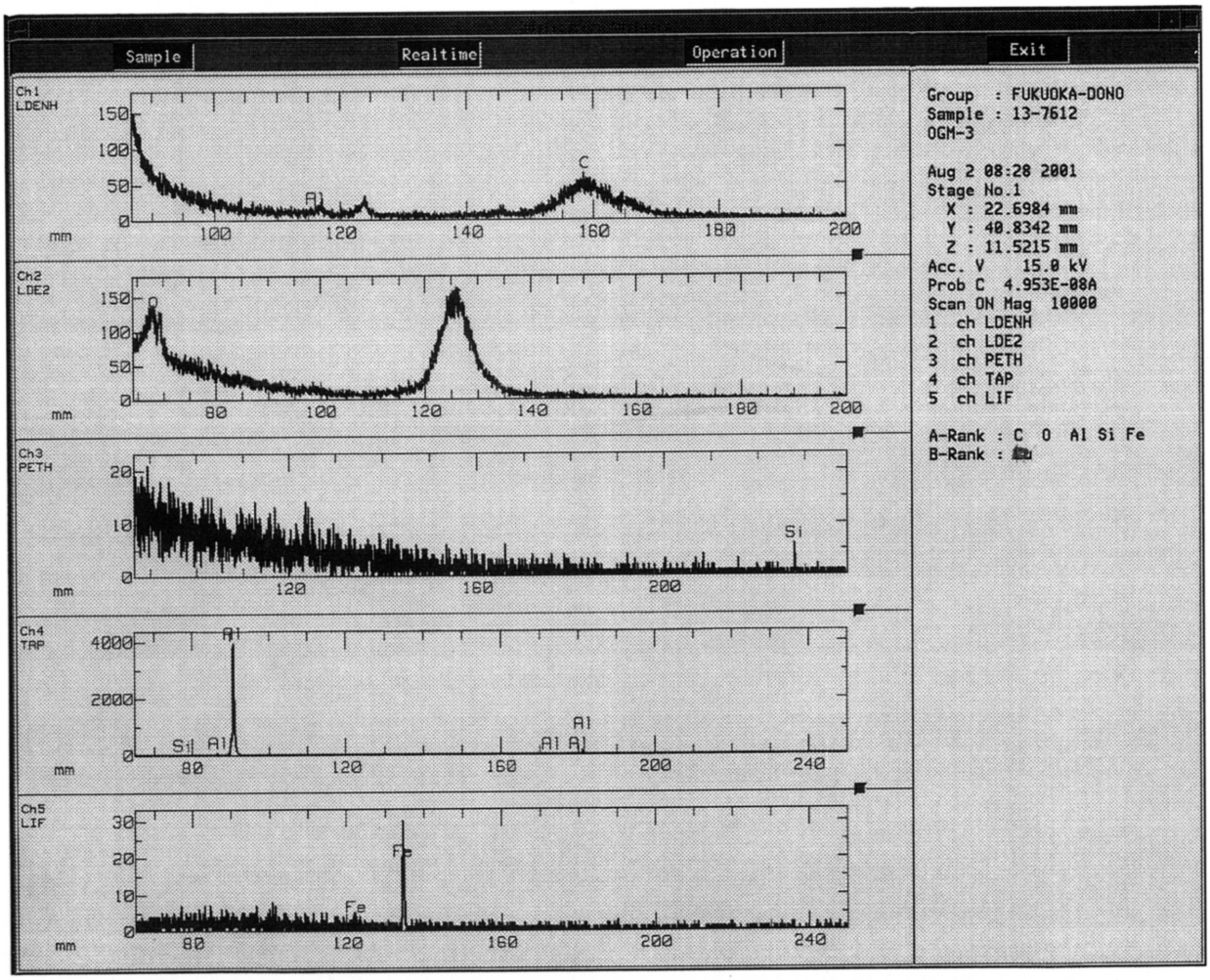


Table. 1　供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物No.	遺物名称	推定年代	計測値		磁着度	メタル度	調査項目								備考
						大きさ(mm)	重量(g)			マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー	
OGM-1	森	E-11	234	椀型滓	不明	39×38×27	61.7				○	○			○			
OGM-2	森	D-5	2137	椀形滓	平安後期	33×51×21	37.6				○	○			○			
OGM-3	森	D-7	1564	非鉄金属(Al)	現代か？	76×24×13	14.6							○				
OGM-4	小倉畑	不明		流動滓	不明	23×29×10	11.9				○	○			○			

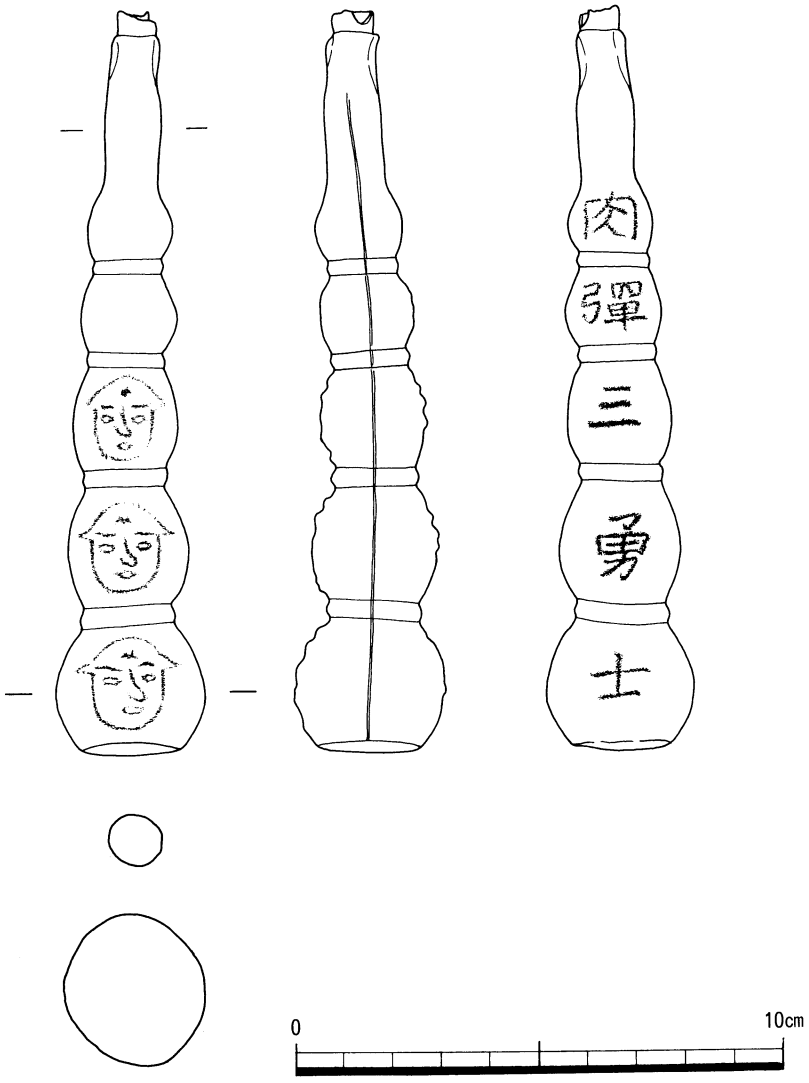
Table. 2　供試材の組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)*	酸化アルミニウム (Al_2O_3)*	酸化カルシウム (CaO)*	酸化マグムシウム (CaO)*	酸化カリウム (K_2gO)*	酸化ナトリウム (Na_2O)*	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸燐化 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	砒素 (As)	造滓成分	造滓成分/(Total Fe)Σ*	TiO_2/(Total Fe)	注
OGM-1	森	E-11	椀型滓	不明	54.48	0.11	58.27	12.98	16.47	4.92	2.22	1.00	0.92	0.26	0.15	0.97	0.04	0.05	0.33	0.09	0.04	<0.01	0.004	25.79	0.473	0.018	
OGM-2	森	D-5	椀形滓	平安後期	61.28	0.14	52.88	28.65	7.95	2.73	1.49	0.59	0.50	0.18	0.06	0.55	0.15	0.05	0.39	0.11	0.02	<0.01	0.001	13.44	0.219	0.009	
OGM-4	小倉畑	不明	流動滓	不明	28.98		33.70	3.42	24.51	7.09	2.43	4.56	0.96	0.39	1.19	20.34	0.09	0.02	0.43	0.03	0.41	0.01	0.010	39.94	1.378	0.702	

Table. 3　出土遺物の調査結果のまとめ

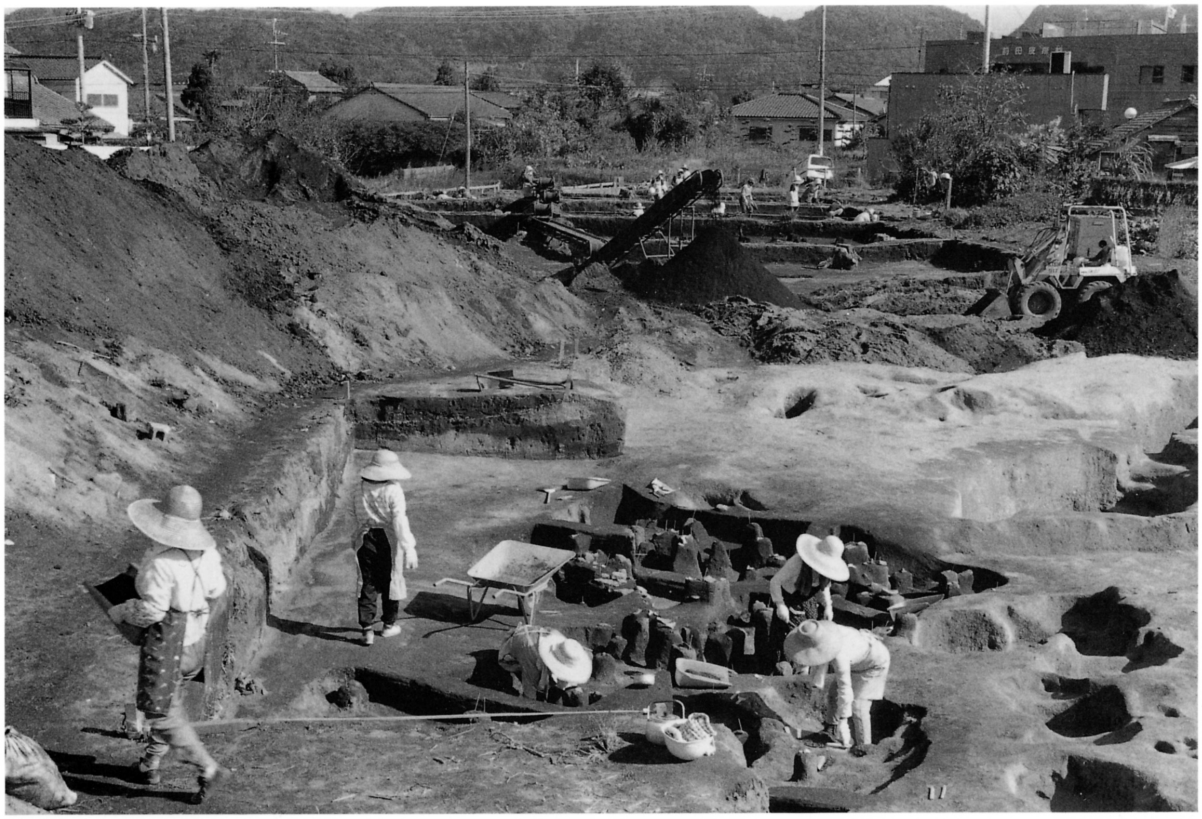
符号	遺跡名	出土位置	遺物No.	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	調査項目								所見
							Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	ガラス質成分	Cu	
OGM-1	森	E-11	234	椀型滓	不明	W(粒内析出物)＋F，鍛造剥片付着	54.48	12.98	3.22	0.97	0.04	0.15	25.79	<0.01	砂鉄系鍛錬鍛冶滓
OGM-2	森	D-5	2137	椀形滓	平安後期	W凝集	61.28	28.65	2.08	0.55	0.02	0.06	13.44	<0.01	砂鉄系鍛錬鍛冶滓
OGM-3	森	D-7	1564	非鉄金属(Al)	現代か？	89.9% Al－5.4% Fe－3.9% O									アルミニュウム剥片
OGM-4	小倉畑	不明		流動滓	不明	I＋U＋鉄粒	28.98	3.42	6.99	20.34	0.41	1.19	39.94	0.01	砂鉄製錬滓

W：Wustite(FeO)　　F：Fayalite($2FeO \cdot SiO_2$)　　I：Ilmenite($FeO \cdot TiO_2$)　　U：Ulvospinel($2FeO \cdot TiO_2$)



肉弾三勇士のビン

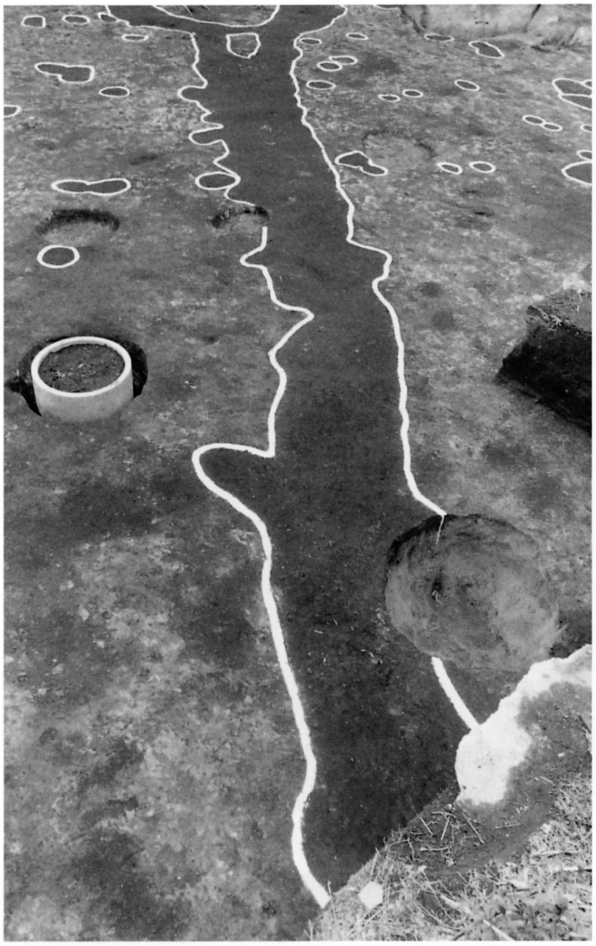
図　　版
PLATE



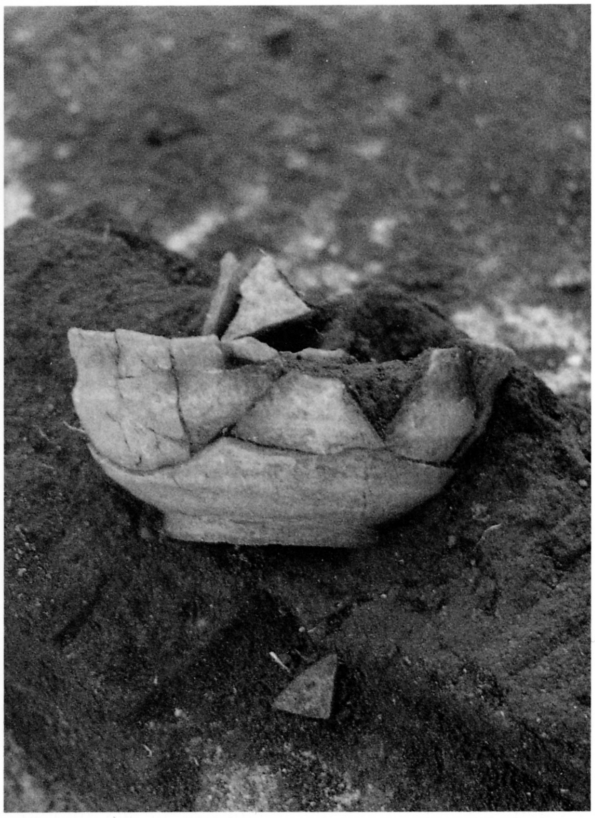
調査風景（森遺跡）

調査風景（白金原遺跡）

図版 2



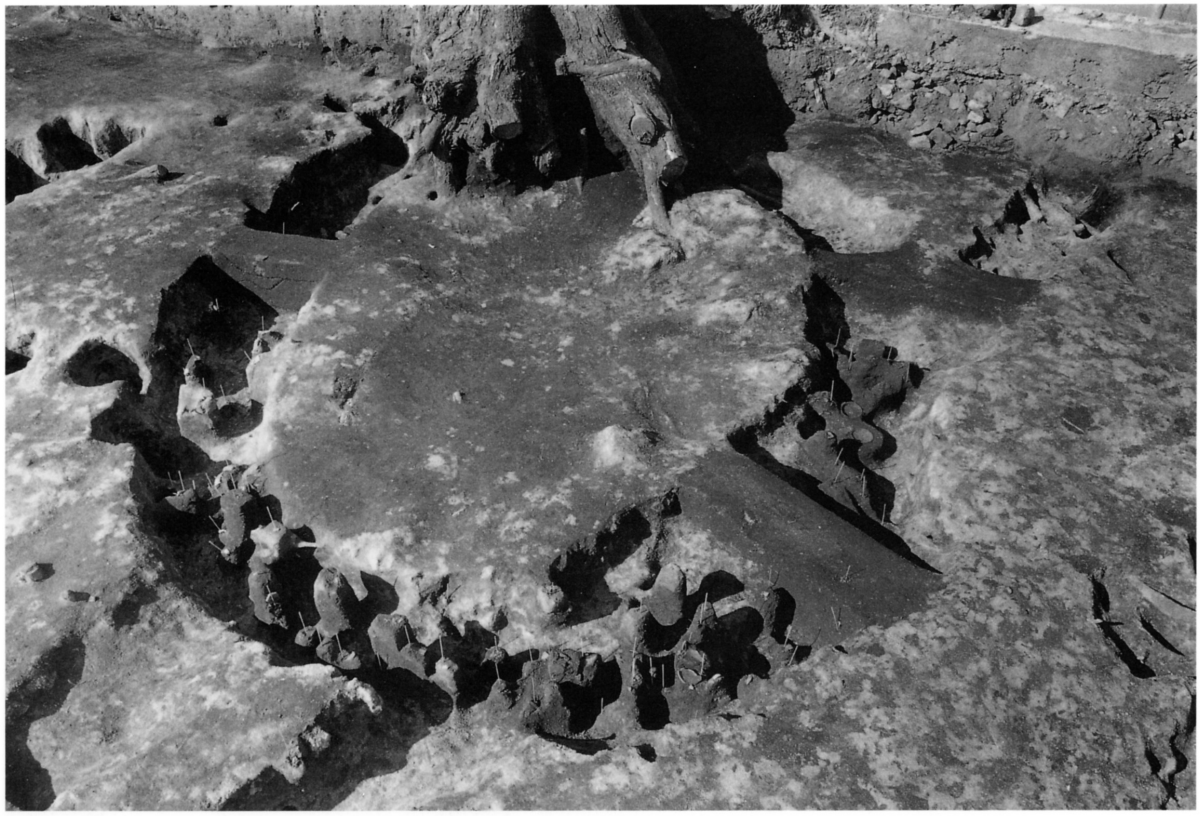
溝状遺構



遺物出土状況

溝状遺構埋土断面

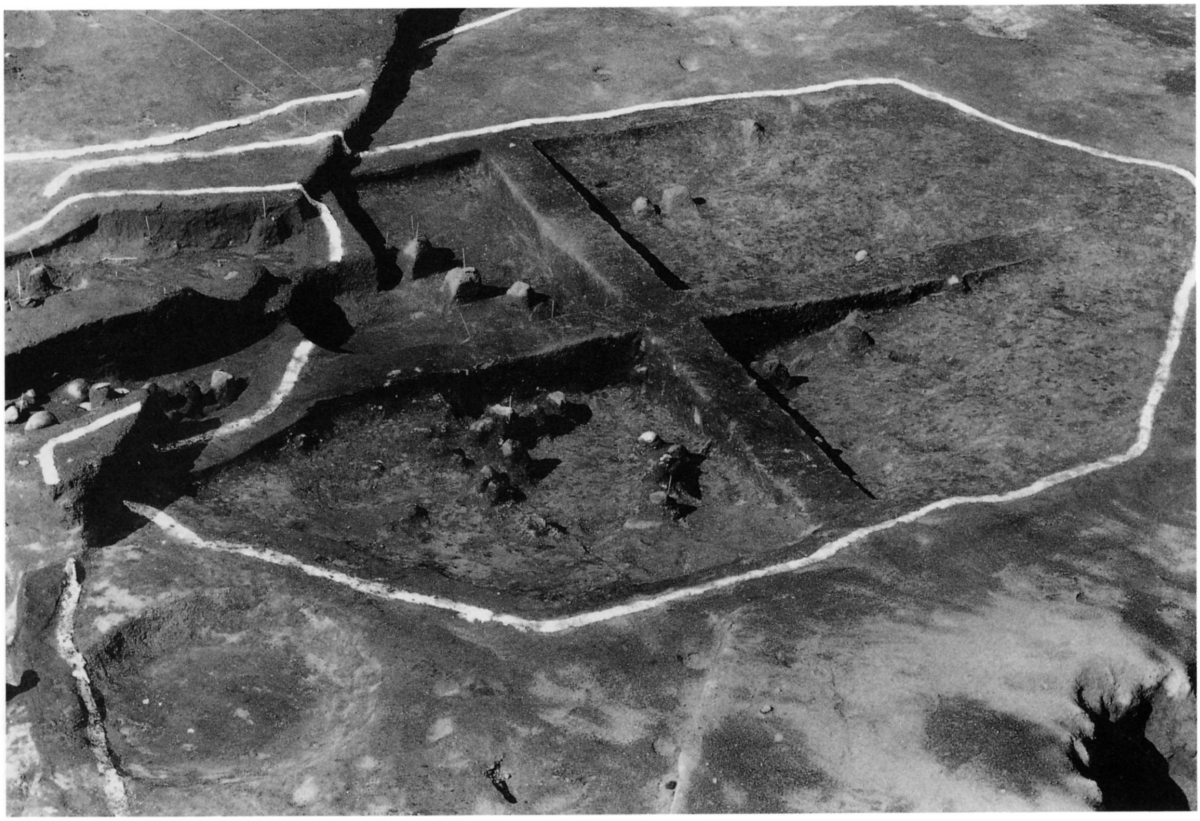
方形周溝



方形周溝

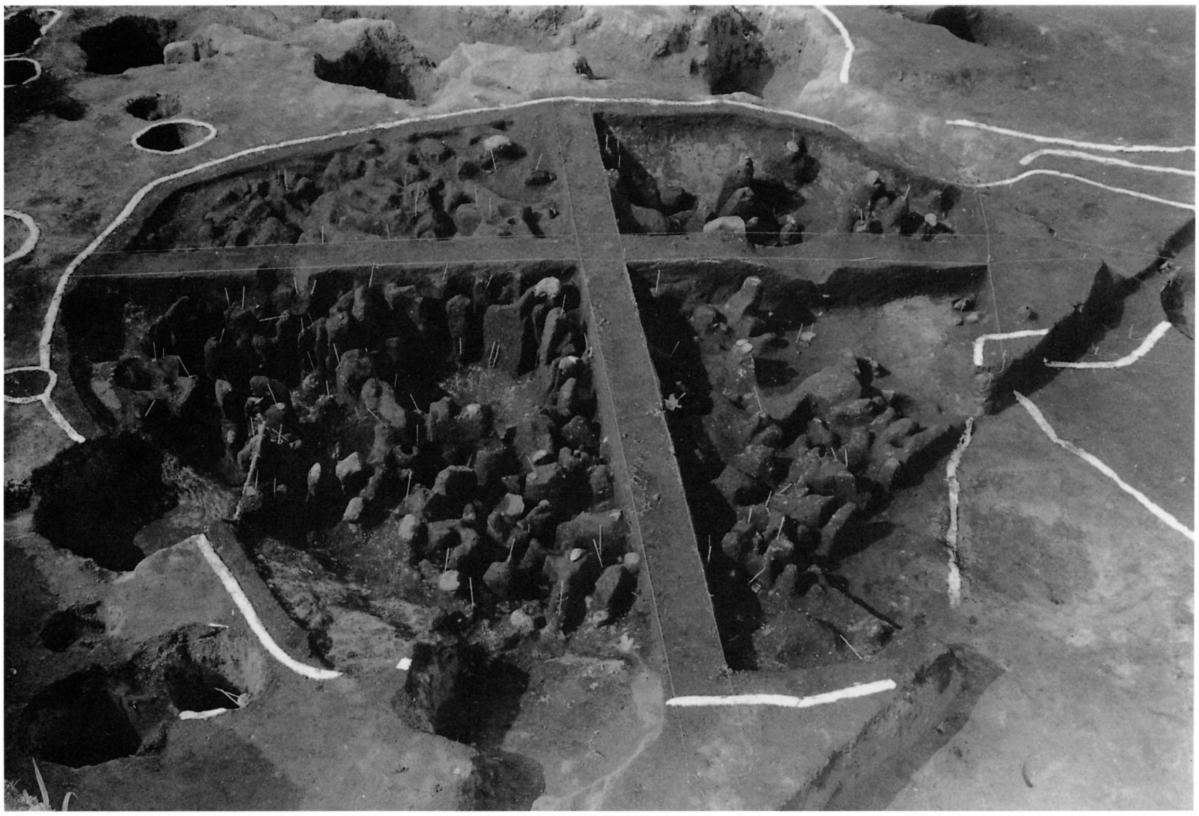
図版 4

竪穴検出状況



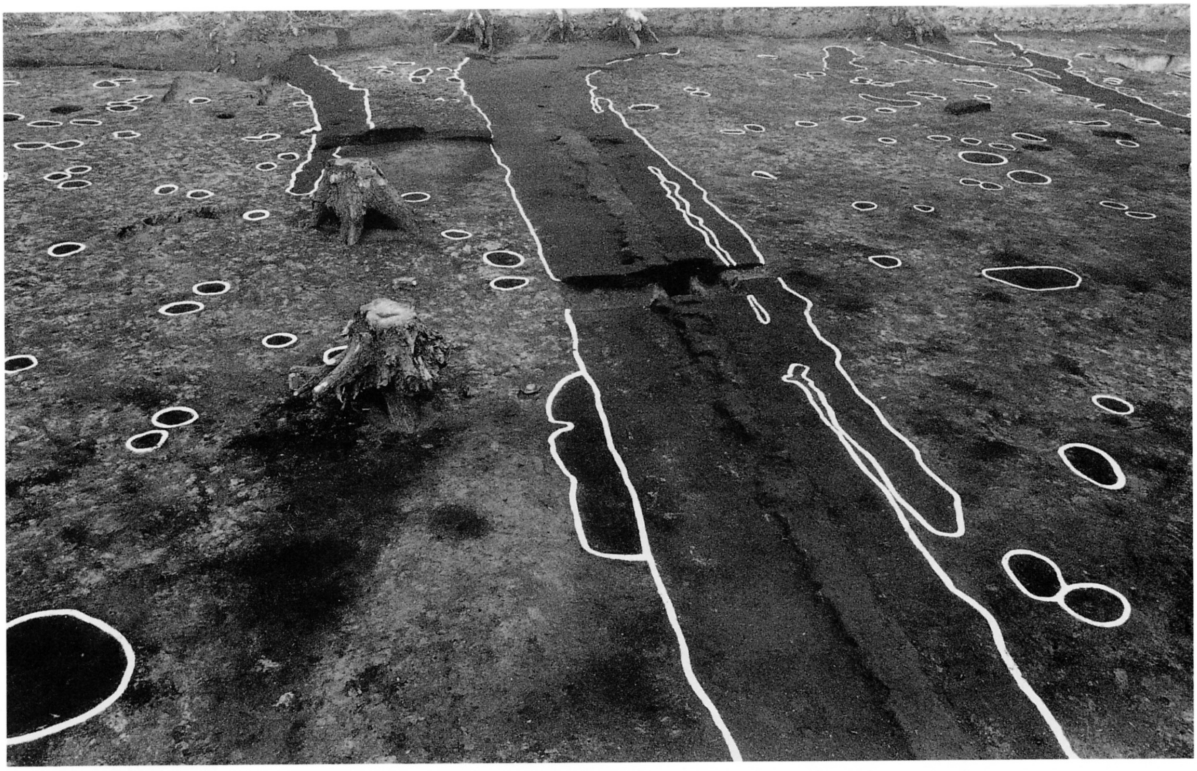
1号竪穴

2 号竪穴



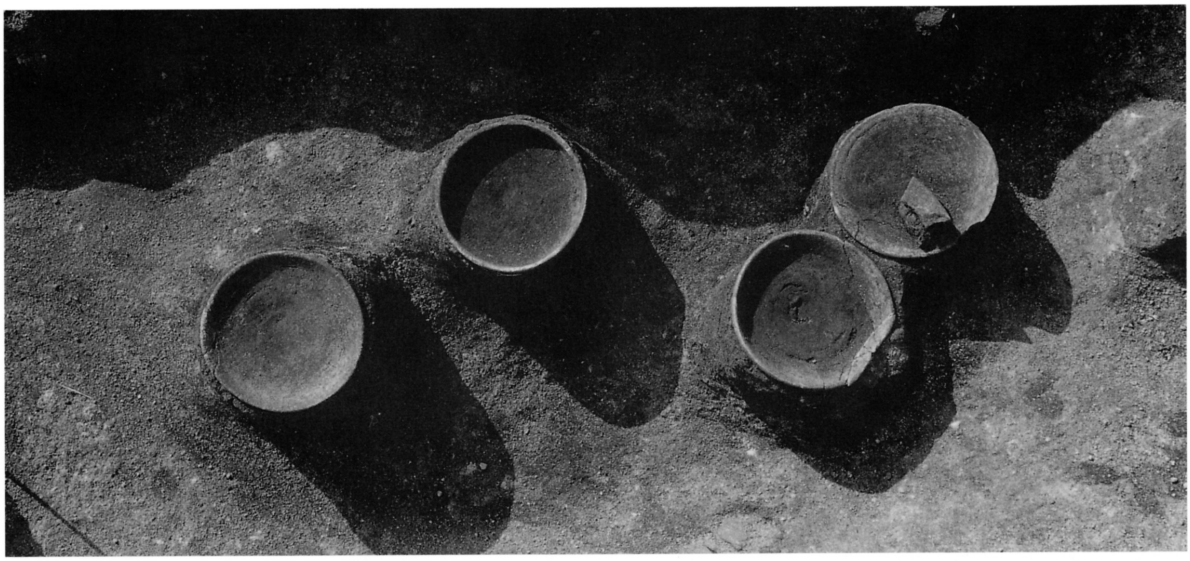
3 号竪穴

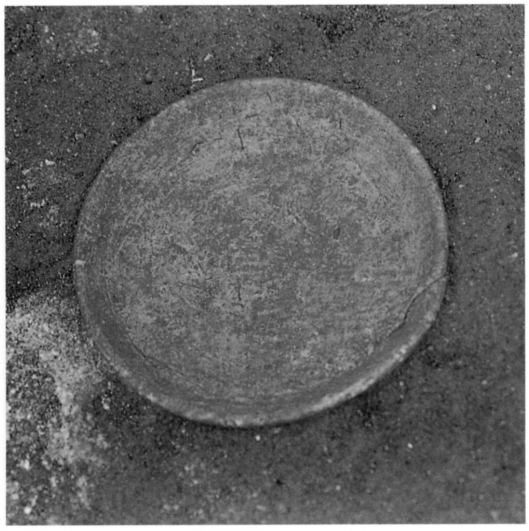
図版 6



道路状遺構Ⅱ

竪穴遺構



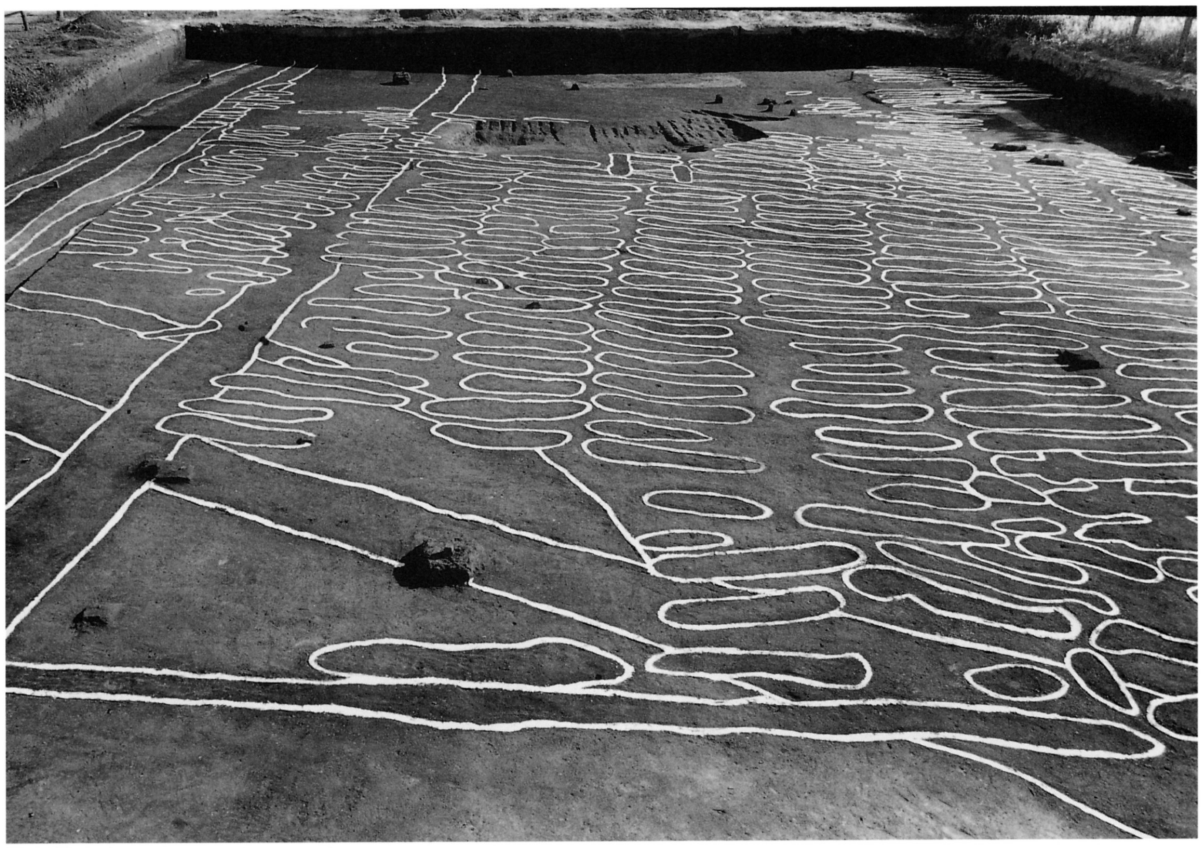


遺物出土状況

図版 8

遺物出土状況

防空壕跡



白金原遺跡遺構検出状況

7

10

12

14

24

26

28

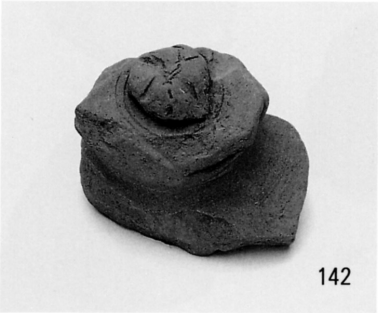
29

31

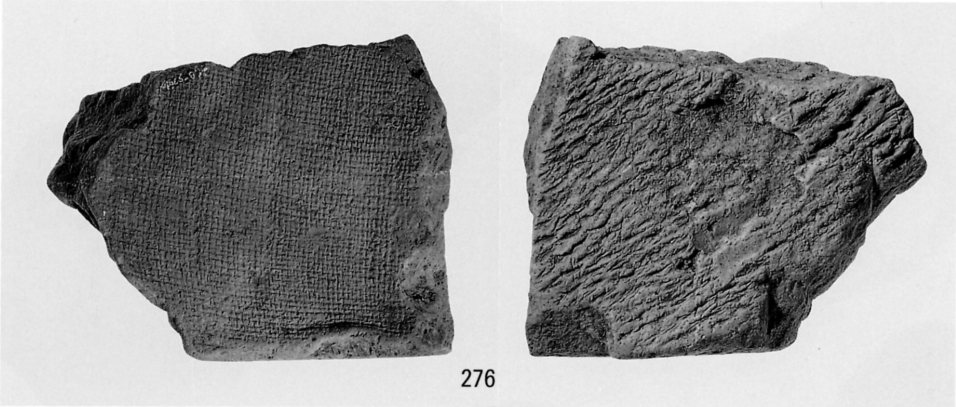
238

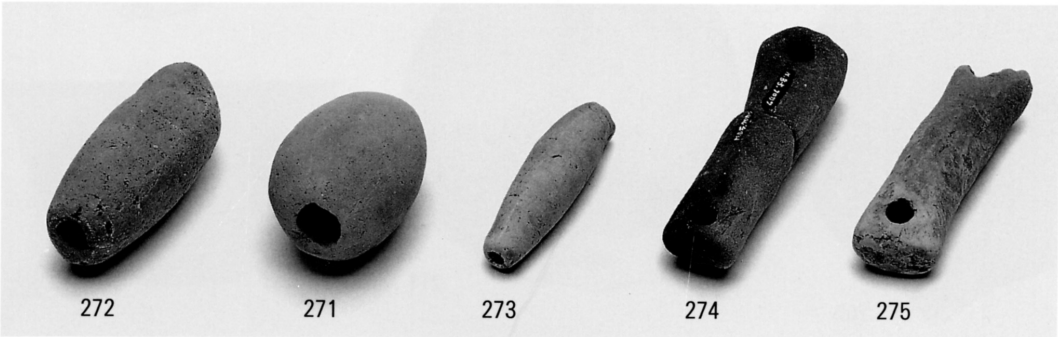
240

243

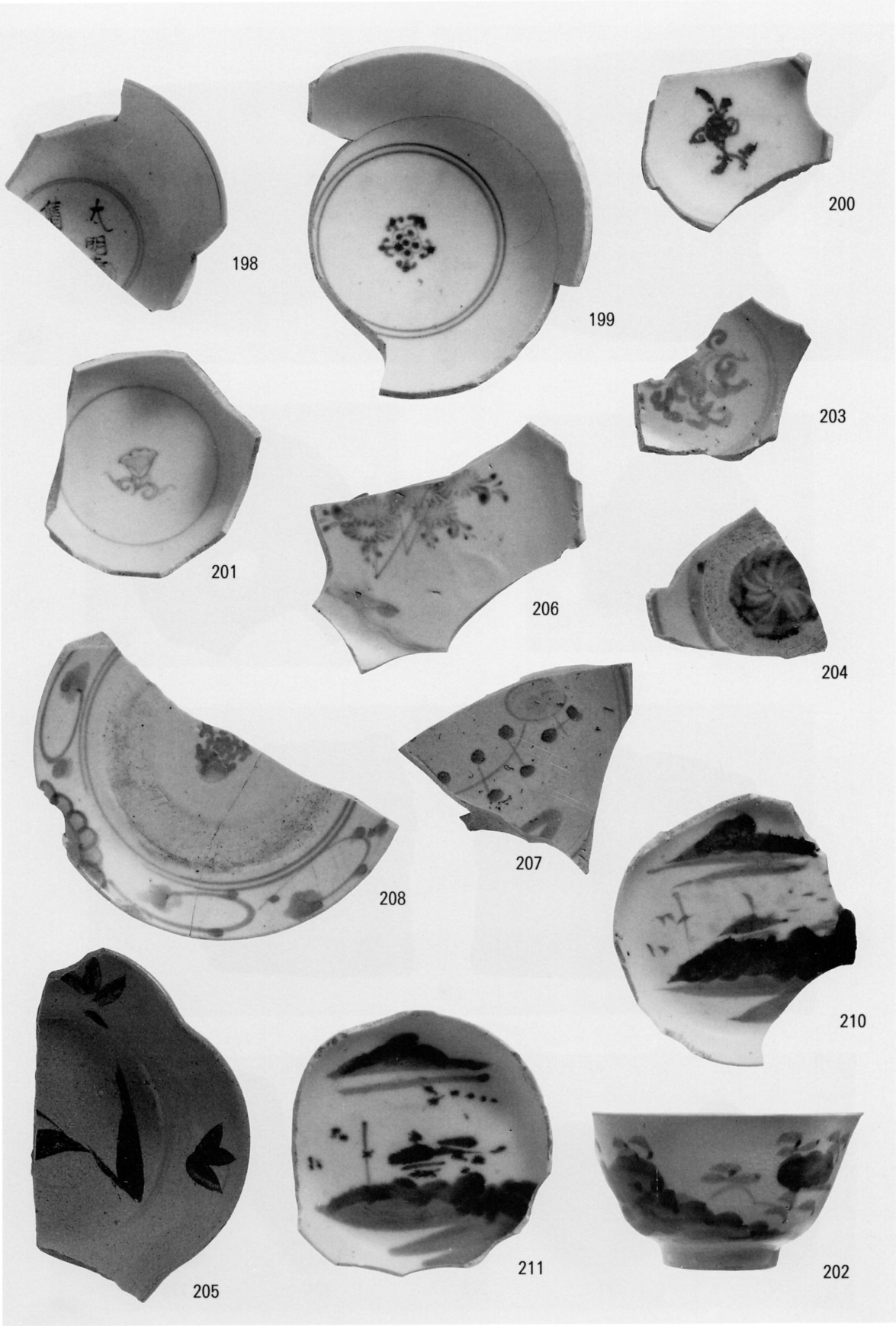

142

265


276


272 271 273 274 275

図版12



163

160

あとがき

今では道路になっている遺跡を足で歩いてみて地形や景観を確かめ，なんとか遺跡をイメージしてみようとした。残念ながら地形は大きく変貌し，今から約1,000年前の遺跡の姿を思い描くことは難しかった。それではと，現在に残された遺物を観察し実測する毎日が続いた。諸先輩方に観察のポイントを教えてもらった。今まで同じものに見えていた土師器の一片一片がそれぞれ微妙に異なることに気づいた。似ているもの，似ていないもの……。土師器の一片がそれぞれ個性をもつ人間のように感じられ，だんだん愛着がわいてきた。遺物たちのつぶやきが聞こえてくるような気がした。それをとらえて声にすること。それが整理作業の醍醐味なのかなと思った。特定の場所の特定の時代の像を，遺物や遺構をとおして考え，描いていくという考古学のおもしろさの一端に触れることができたような気がする。

最後に整理作業に従事していただいた皆様方に心より感謝申し上げます。

整理作業に携わった皆さん

川野　高子　寺田みどり　中西マリ子　中屋　弘子　川崎　弘子　坂口　裕子
橋口そのみ　春山まり子　古川　陽子　松平ひとみ　森川さとみ　和田まり子
髙橋　　亨

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（55）

森　遺　跡
白金原遺跡

発行日　2003年3月20日
発　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461　鹿児島県国分市上之段1175番地1
印　刷　斯文堂株式会社
〒892-0838　鹿児島市新屋敷町14－16
TEL　099－226－3747